

平成 25 年度老人保健事業推進費等補助金

老人保健健康増進等事業

農村環境を活かした介護のあり方調査研究事業報告書

～農村環境を活かした「いきいきライフ」の実現～

平成 26 年 3 月

長野県木島平村

はじめに

平成 27 年、木島平村は村政 60 周年という節目の年を迎えます。しかしながら、昭和 30 年 2 月の合併当時に約 8,200 人だった人口も、現在では約 5,000 人まで減少しています。

そうした中、農村での誇りある暮らしと、都市と農村の共生を目指した『農村文明』の創生に向けて」の取組みが始まり、着実に歩みを進めています。

雇用の拡大と待機者解消を目指し、旧小学校舎を活用した特養の整備と近接する下高井農林高校との連携強化をはじめ、若者定住を促進するため旧保育園舎を活用した集合住宅の整備と宅地分譲、高付加価値型ビジネスを創出するための 6 次産業化事業の推進、力強い農業の担い手の育成と遊休農地活用など 6 つのプロジェクトを進め、過疎脱却を目指して事業を進めています。

今回、地域福祉の充実を図るため、木島平村の持つ農村環境を最大限に活かして、人びとが誇りを持ち、誰もが健康で仲良く生きがいを持ち続けながら暮らせるよう、村民との協働で「誇りあるふるさと木島平」の実現を目指すための調査研究をしました。

末筆になりましたが、本研究にあたって調査、研究にご協力をいただいた各位に厚く御礼を申し上げます。本報告書が、木島平村のような農村で暮らす方々にとっての一助になれば幸いです。

平成 26 年 3 月

長野県木島平村長 芳川 修二

目 次

第1章 調査研究の目的と実施方法

- 1 背景…………… 2
 - ◇「農村文明の創生」で誇れるふるさと木島平村をつくるために
 - ◇木島平村の介護や地域福祉を取り巻く潮流
- 2 調査研究の目的…………… 4
- 3 調査研究の実施方法…………… 5

第2章 調査研究の結果

- 1 調査結果とまとめ
 - (1) 全国村事例調査……………10
 - (2) 村民意識調査とヒヤリング……………19
 - ア 村民意識調査（40歳～65歳）……………19
 - イ 住民聞き取り調査……………59
 - ウ 村民意識調査（20歳代～30歳代）……………64
- 2 農村環境を活かした「いきいきライフ」の実現
 - (1) 「いきいきライフ」実現のための活動プログラム構想 ……79
 - (2) 活動プログラム構想の基本的な運営組織のイメージ……………81
 - (3) 活動プログラムの展開

第3章 まとめと検討事項

- 1 まとめ……………88
- 2 検討事項……………88

～資料編～

- 1 研究会の主な意見……………92
- 2 全国村調査様式……………95
- 3 園芸福祉について……………98
- 4 都市部の高齢者の住宅の方向性…………… 100

第 1 章 調査研究の目的と実施方法

1 背景

◇「農村文明の創生」で誇れるふるさと木島平をつくるために

木島平村は、農山村での誇りある暮らしの確立と都市との共生をめざし、日本の農山村の持つ普遍的で多様な価値と機能を高める方向として「農村文明の創生」と位置付け、平成 21 年から、その実現に向かう運動を展開している。

これは、かつて農山村にあった稲作を中心とした自然との共生で築いてきた国土の保全、水資源涵養、保健休養、教育空間としての機能、さらには支え合いを基本とした地域の自治機能などを見直し、農山村が果たす役割と機能について都市住民の理解と共感を得ながら、農山村の生業と運営を持続させていくことで、都市にもメリットがあることを示していくものである。

近年の農山村は急速な過疎化や超高齢社会への進展により、水資源涵養や保健休養機能、地域住民が支え合う機能など、農山村が持つべき多様な価値と機能が失われかねない状況にある。木島平村のような農山村で暮らす人びとが、地域での暮らしに誇りを持ち、真の豊かさや生きがいを感じながら地域での暮らしができるような活動を具体的に検討することが必要である。

このような状況の中、木島平村は、平成 22 年に過疎法による指定を受けたが、過疎脱却に向けた持続可能な村づくりを目指し、人口 5000 人を維持するための重点事業として「村力再生プロジェクト 5000」を展開している。

このプロジェクトは、2015 年に開業する北陸新幹線を見据え、力強い農業の担い手の育成と遊休農地の活用、高付加価値型ビジネス創出のための 6 次産業化の推進、若者の定住・移住を目的とした住環境の整備のほか、「雇用拡大型福祉プロジェクト」として、廃校となった旧小学校舎を活用した地域密着型特養を整備し、雇用拡大と質の高い介護を提供する施設を目指し、近接する下高井農林高校と連携を深め、いつまでも地域で安心して暮らせる体制づくりを目指している。

◇木島平村の介護や地域福祉を取り巻く潮流

「木島平で生まれて木島平であの世へ旅立つ幸せ」は多くの村民の願いであ

る。人は加齢によって心身の衰えがあるとしても、できるだけ自分の力で生きたいと願っている。

木島平村の高齢者は、住む場所や人びととの絆で結ばれ、そうした関係によってはぐくまれる安心感のある日々の営みこそが木島平村の暮らし方であると願っている。

十分な医療体制や高齢者福祉施設が整備されていなかった時代から、お互い様（互助）の精神で地域みんなで高齢者の暮らしを支えてきた。よって、家族内の高齢者を温かく支えるのは、家族の当然の義務であり責任であると考えられ、寝たきりになった老親の介護も受け入れてきた。

しかし、こうした地域での支え合いと家族の支え合いを当然とし、それに頼る考え方だけでは立ち行かなくなりつつある。

介護保険制度ができて以来、介護が必要になった人への支援体制は充実してきたはあるものの、さらに進む高齢社会を考えた場合、多少の不便さはあるとしても、いつまでも地域で、在宅で暮らせるよう多方面から受けられる支援の体制づくりが必要になってきている。例えば独居の高齢者や老々夫婦が日常生活で孤立することがないように手立てを講ずる必要もでてきた。

また、生きがいを持ち続け、できるだけ介護が必要とならないために健康でいられる「心と体」づくり、できるだけ在宅で暮らせるように地域の人との良い関係性と絆をつくり、維持していくことが必要となっている。

そこで、「農村文明」を掲げる木島平村としては、それにふさわしい健康長寿と介護・福祉の新たな展開が求められている。

高齢者が人生の最後まで、年長者としての豊かな経験と知恵を次世代へ承継しつつ、元気で充実感をもって村の暮らしを生き抜ける、そうした地域福祉を、この木島平村で実現してゆきたい。

そのために、村民一人一人が村への愛着と誇りを持ち続け、農村環境のすべてを貴重な資源として活用し、村民の誰もが健康で自分らしく、しかも都市住民も移り住みたくするような村の形成を目指すプログラムを作成してゆきたい。

2 調査研究の目的

本調査研究は、木島平村の現状を踏まえ、「農村文明」の創生を目指して、これからの高齢者の介護と福祉のあり方を明らかにしようとするものである。木島平村で暮らす住民同士の地域支え合いを考えるにあたって、「農村文明」の理念を活かしたものとなることが求められている。

こうした考え方のもとで、木島平村の環境を構成しているすべての社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を高めることができ、農村環境を活かすことのできる新しい介護のあり方を施策プログラムとして提案することにしたい。

（1）本研究調査のテーマとねらい

- 木島平村のこれからの福祉施策の基本的な資源である「支え合い力」など、地域との関係性の強化方策を明確にし、その仕組みを検討する。
- 地元農業高校と地域が連携し、豊かな人材をつくる仕組みを検討する。
- 農村文明の理念の一つである「都市との共生」から、「農村の暮らし」が都市地域の人びとにも開かれ、交流できる魅力的な農村型の健康長寿の仕組みを検討する。

（2）本研究調査の対象と範囲

木島平村が提唱する「農村文明創生」の理念を踏まえ、木島平村が有する農村環境、自然環境や人と人のつながり、もともとあった支え合いなどのネットワークを活かした新しい介護・地域福祉の在り方を構想することをめざして調査検討にあたり、実現性のあるプログラムを検討・提案する。

（3）成果の質的基準

- 農村文明の創生運動としてふさわしい村民運動としての取組み
- 木島平村の地域社会が有する社会関係資本をより強くする取組み
- 生涯学習施策や健康教育施策、介護予防施策等を総合化する取組み
- 雇用確保施策の一つとして、多様な主体の連携により交流を進める取組み
- 将来は農都連携型介護予防プログラムとして都市住民に開かれた取組み

(4) 研究調査の検討方針

- 要介護度が高くなるまでは、できるだけ在宅で暮らせる環境づくりとする
- 自分らしく生きようという気概や生きがいを持ち続けることを支援
- 社会参加する機会を用意して関係性を深めることを支援
- 上記の機会と場を創るための方策を検討する

3 調査研究の実施方法

(1) 研究会の実施

調査研究委員会を設け、農山村としての木島平村の環境を活かした福祉、農村資源を活用して高齢になっても自分らしく暮らせる方策を検討した。

委員構成は以下のとおりで、オブザーバーとして厚生労働省老健局総務課に同席をいただいた。

	氏 名	役 職 等
委員長	大森 彌	東京大学名誉教授
委 員	進士五十八	東京農業大学名誉教授・元学長 日本園芸福祉普及協会会長
	小田切徳美	明治大学農学部教授
	菅原 弘子	福祉自治体ユニット事務局長
	田村 明孝	(株)タムラプ ランニング & ホペ レーティング 代表
	西村 清利	下高井農林高等学校校長
	芳川 修二	木島平村長

◇ 研究会実施スケジュール

2013 年 9 月 25 日 第 1 回 研究方法、研究課題の方向性の検討

2014 年 1 月 22 日 第 2 回 アンケート調査結果報告、研究課題検討

2014 年 3 月 17 日 第 3 回 アンケート調査結果報告、研究成果検討

(2) アンケート等調査の実施

調査は、以下のアンケート、ヒヤリング及び事例調査を行った。

ア 全国の村への事例調査

対象：全国の村 183 自治体の高齢者福祉、介護担当者へ郵送調査。

回収数 76 自治体（回収率 41.5%）

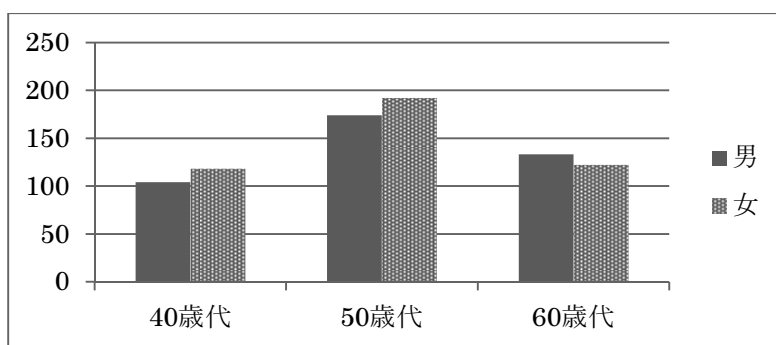
内容：全国の村の地域コミュニティ資源の事例調査。生活支援実施
主体や担い手の状況について

イ 木島平村民の意識調査

① 村民アンケート調査

対象：40 歳～65 歳の中から 1,200 人を抽出し郵送により調査。

回収率 70.3%（男 411 人、女 432 人）。



内容：地域のつながり意識、農作業に関する意識、健康に関する
意識等についての調査

② 高齢者へのヒヤリング調査

対象：高齢者介護予防事業（一次予防事業）の地区出前デイス
ビス参加者への聞き取り調査。65 歳代～80 歳代、50 人。

内容：農作業への意識、生きがいは、抱えている問題等

③ その他参考にした調査

内容：木島平村社会福祉協議会が平成 25 年 12 月に村民（全世

帯) に実施した、地域とのつながりや、ボランティアへの意識調査を参考にした。

対象：回答者の中から 20 歳から 39 歳までを抽出。85 人。

20 歳代－男 10 人・女 5 人、30 歳代－男 35 人・女 35 人

第 2 章 調査研究の結果

(1) 全国村事例調査

全国村のコミュニティ資源の事例調査

地域コミュニティの資源と活動について、どのような取組みを行っているか実態を把握し、木島平村の今後の取組みには何が必要なのかを探るきっかけとした。

◇調査の対象

全国の村 183 自治体の高齢者福祉・介護担当者

回収数 76 (回収率 41.5%)

◇調査の概要

村のコミュニティ資源について、介護予防や閉じこもり予防につながっている、住民同士のコミュニケーションが図れる環境や高齢者が自主的に行っている活動の事例を調査した。また、介護予防事業について、どのような予防事業と地域資源を活かした特色のある事業について調査した。

■ コミュニティの場について (資料1)

(1) 公民館や温泉施設などを活用した娯楽活動が主

集会場や公民館で趣味や娯楽を楽しむ、ゲートボールなどの軽スポーツをする機会は、ほとんどの村で確保されている。

(2) 老人クラブのような団体活動が交流の場

老人クラブや婦人会のような、既存の団体を母体として自主的に活動している。(24 自治体)

(3) 温泉施設も活動やコミュニティの場

送迎バスで、温泉や診療所などが併設した施設などを活用(18 自治体)

■ 活動の場 （資料1）

団体で活動する高齢者が、農産物加工や直売所での販売を通じて活動し、張り合いや生きがいを感じているという事例（17自治体）。

直売所に出したものを販売することにより、多少の収入を得ることで、張り合い、生きがいがつくりにつながっている。

また、直売所に集まることで、交流ができるコミュニケーションの場となっている。

○シイタケ栽培、松茸狩り・ブルーベリー狩り運営、特産物加工（島人参、赤カブ、漬物、焼酎）

■ 自主的活動について （資料1）

地区によっては、積極的に集まりお茶飲みやサロンをしているところが27自治体。そのうち、活動主体が「老人クラブ」と回答したものが半数の14自治体あった。

高齢者における自主活動については、「老人クラブ」が依然として高く、多様な活動ができる地域の仲間づくりの場所として浸透している。

老人クラブのような、ある程度地域のつながりの中の組織に加入することで、定期的な活動へとつながっていくと考える。

■ 地域コミュニティ資源について（資料1）

・地区ごとにある老人クラブとしての活動事例が多く、その中でも、週1回集まりお茶飲みをするところや、高齢者が組織する団体が31もある村もあり、内容にあまり差はないが、地域により活動自体に差がある。

■ 介護保険以外の生活支援サービスについて （資料2）

介護保険のサービス以外の生活支援サービスの実施内容と主体

・生活支援サービスの状況調査から、介護保険にない生活支援で最も多いのが配食、次いでみんなが集まれるサロン、送迎サービス、買い物、掃除の順となっている。

また、このサービスの運営主体となっているのは、社会福祉協議会が多く、次いで行政（村）で対応している例が多い状況となっている。

身近な支援ですぐに対応できる、雪かきや買い物などは、やはり隣近所の助け合いで支援をしている状況がみえた。

■ 事例調査結果とまとめ

全国の村の事例調査から、規模や形態はさまざまであるが、どの村もコミュニティづくりの取り組みは行っている。

まずは身近な集まりから、集会場や温泉施設などを利用しながら集まれる場所の確保、また自分が持っている趣味や娯楽を中心としたものをツールとして仲間の確保をしている。

また、地元ならではの特産物や加工品などを共同で作り、小遣い稼ぎをして張り合いを感じる活動も行っている。

介護保険適用外の生活支援については、配食や掃除洗濯、送迎、買物支援、サロン、ゴミだしなど様々な支援が行われている。

しかし、ほとんどの村では、人材不足や担い手不足から、村社会福祉協議会や行政が主体となって実施している。ただ、隣近所の住民がついでにできるようなゴミだし、雪かき、話し相手、草刈りなどは地域住民によって支援が行われる割合が多くなっている。

さらに進む高齢化で、支援の担い手不足が顕著になることが予想される。農村では、事業所や企業が参入することが難しいため、社会福祉協議会や行政が担う部分はさらに大きくなると考えられる。

コミュニティの活動については、老人クラブが従来からの組織であるが、新規会員がなかなか入らないなどの問題もあり、活動が広がらず、停滞しているという問題も抱えている。

これからは、地域住民同士が自主的に活動や交流を行うことで、生活支援につながり、互いに支援し合える環境をつくっていく必要がある。

この調査から、高齢になっても自分らしく暮らしていくため、地域とのつながりや隣近所のお互い様の心を育みながら、村にある資源を活用して、取組んでいくことが重要な課題であると考ええる。

（問9）地域コミュニティ資源の状況

ゲート・パークゴルフ盛ん。村営温泉施設利用多い。

温泉への福祉バス運行。冬期室内でパークゴルフ。公民館で麻雀。

隣人との交流が見られるなど人口が少ないゆえのメリットも

老人クラブ週1回開催。近所のつながり強い。

温泉へのバス運行（週1）。診療所・買い物へのバス運行。待ち時間に交流。

温泉施設へ村営バス運行 スポーツ団体各種活動

集まる習慣がない。施設は震災により消失。

パークゴルフ場。屋内運動場でゲートボール

運動の為の無料開放施設、月一回の定期交流

地域によっては地区会、老人会が自主的に公民館に集って事業展開

高齢者女性の集まりで特産物生産加工

公共浴場、ゲートボール場、グランドゴルフ場など

見守りネットワークシステムを設置し24H安否確認等民生委員を含め行う。

自主的、定期的に集まるサロン

避難前の行政区単位に入居させコミュニティ維持を図った。近くの運動場利用。

地区会、老人会が自主的に集まる。

70歳以上温泉券配布及び割引。

温泉センター利用

ゲートボール。グランドゴルフ。

ゲートボール、露天風呂

特産品の製造加工。村営サウナへ集う。

陶芸教室の開催や園児と交流。浴場の優待券カードの発行

温泉が有料の為利用者少ない

図書館、公民館等の利用。ゲートボール

温泉施設。70歳以上無料。集まっている。

温泉が情報の発信地。住民同士の行き来。ただ別荘地は独特の地域となり防災等に問題抱える

近所でお茶飲み習慣ある。グランドゴルフ。

主産業が高原野菜の為、冬期間閉じこもり気味になるので教室で場所の提供や自主的にグループ活動している

敬老会

地域交流センターで麻雀、以後、幼児とのふれあい。みんな集まれる。

隣近所などの交流は良。マレット・ゲート参加者減少。

各地区の小さな集まり 介護予防事業で対応

移動手段がなくなり出かけることが難しくなっている

共同浴場は独居、高齢者世帯の憩いの場 二か所のマレットゴルフ場

新設されたスーパーで買い物と会話がコミュニケーションの場。75歳以上はバス・入浴無料の温泉。

75歳以上共同浴場無料 地区の清掃などお茶を飲んだり顔を合わせる

温泉施設&診療所でゆっくり1日過ごす

共同浴場は自由に入浴できる。

温泉施設を安価に利用できる為コミュニケーションの場。屋内ゲートボールなど併設。

隣近所でのお茶のみ。マレットゴルフ。

道の駅内の施設で野菜の栽培～食事の提供をしている老人クラブのスポーツ盛ん。

ゲートボールの練習会、大会実施

直売所への販売、野菜作り。

グランドゴルフ盛ん。老人クラブ、高齢者学級に所属している。畑で話をする。

お互いの家に伺いコミュニケーションを取る。朝市を行っている地域も。

サロンをモデル的に言い広げていけるように進めている段階

屋内ゲートボール場

コミュニティセンターに自主的に集まる

集いの場の提供、入浴施設の提供

村福祉センターへの無料バス。センター無料開放。

共同浴場が交流の場

川の駅などに野菜や加工品を持参し販売。高齢者女性グループ共同作業で加工品を作る。

商店主による移動販売に高齢者が集まる。

無料電話 バス、病院等の待合室 敬老会

あしやげ（寄り合い場）、市場（特産品協会）はあり、高齢者が作った野菜を販売。交流の場に。

親戚・同級生などのつながり強く互いの家を行き来。各地区ゲートボール

老人クラブのサークル活動盛ん。

朝市毎月。地域ごとにゲートボール。特産物（島人参）販売。

老人クラブでグランドゴルフ、草刈り清掃ボラ行

(問10)地域住民が行う自主的活動

老人クラブ、わらべ唄の会 読み聞かせ 大正琴サークル

公民館活動で麻雀教室。集まる。

高齢者同士の連携強い。

ゲートボール、グループでしいたけ栽培

老人クラブで毎月温泉利用で集まる

グループでシイタケ栽培。ゲートボール社協支援

自治会単位でのまちづくりが盛ん

介護予防教室、サロン

調理ボラ、運動普及サポーター

一地区のみ当番制でサロン開催

高齢者が組織を作り、冬期間に学校教育と連携し児童・生徒に遊びや藁細工等、手作りの物を教えている

老人クラブ等による活動：共同利用箇所等の草むしりや花植え

老人クラブ：グランドゴルフや地区の清掃活動等の共同活動 共同浴場が憩いの場

高齢者の自主組織による学校への伝承活動

地区行事の実施。老人クラブでの交流

自主的・定期的サロンがある

介護予防ボラとして活動、イベント、体操教室等行う

老人クラブで地元神社清掃。月2回昼食を食べる。昼食は社協で。

高齢者の学ぶ大学の企画

ふれあいサロン（当初行政→今は自主運営）

元民生委員によるサロン活動

老人クラブ活動盛ん。カラオケ、ボーリング等

公民館活動が盛ん。70歳以上31団体。

傾聴ボラ

2か所の直売所が交流の場。小遣い稼ぎの場になっている。

NPO地域サロン開設

特産物赤カブの生産加工をグループで行う。

老人クラブ 無尽

特産物生産加工販売。県知事賞。各種サークル活動活発。そば打ち盛ん。

無料バス村内循環

古民家改装しサロン

共同浴場。共同洗い場。コミュニケーションの場。

老人クラブ

環境整備さぎょうを年数回

貯金クラブでウォーキング、体操。

配食ボラ、福祉用具貸出ボラ 福祉の村づくりの会

老人クラブ、身体障害者福祉協議会、青年団

百歳体操を各集会所で実施

特産物センター―住民持ち寄りの漬物や農産物販売

老人クラブ会員等で月一回地元の神社の清掃等行う

老人クラブで地元神社清掃。

農産物出荷・加工品づくり。

老人クラブ活動盛ん。集落花壇づくり。

空き家利用し1回/w集会。お茶飲み。有志で活動。

老人クラブ活動盛ん。

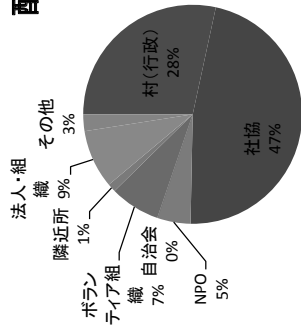
老人会 婦人会 子ども会 ジュニアオーケストラ等

つつじの会 ふれあい給食で園児の交流 会員のお楽しみ旅行

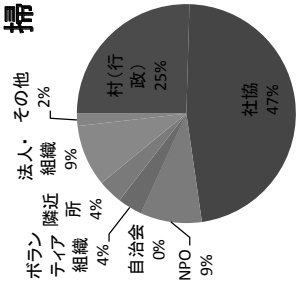
【全国村事例調査】生活支援の実施主体 (単位は実施主体数)

実施組織	配食	掃除	洗濯	食事	入浴見守	雪かき	サロン	送迎	買い物	話し相手	ゴミ出し	受診付添	草刈り
村(行政)	23	14	12	9	5	14	15	14	9	6	7	4	5
社協	38	26	21	19	14	11	32	29	24	14	13	8	7
NPO	4	5	5	4	3	2	4	3	4	1	4	2	4
自治会	0	0	0	0	0	3	7	0	1	2	0	1	2
ボランティア組織	6	2	1	3	1	4	6	2	2	6	0	0	2
隣近所	1	2	2	2	1	6	2	7	7	9	8	4	5
法人・組織	7	5	4	2	1	8	1	3	7	1	3	0	16
その他	2	1	1	1	1	1	2	2	2	3	0	3	4
合計	81	55	46	40	26	49	69	60	56	42	35	22	45

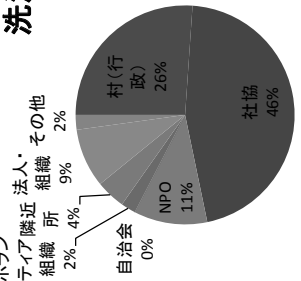
配食



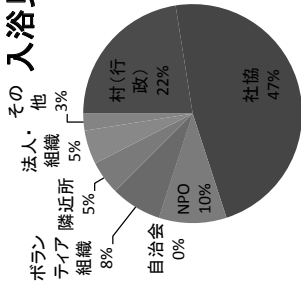
掃除



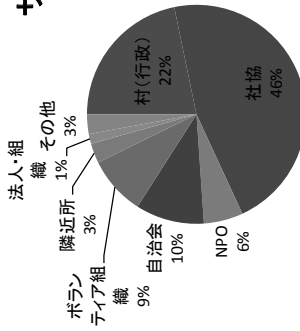
洗濯



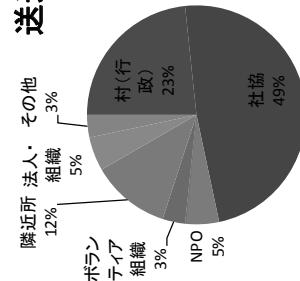
入浴見守



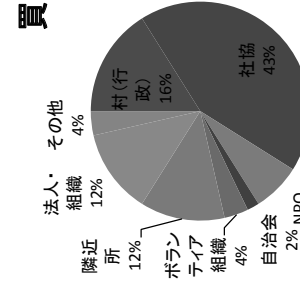
サロン



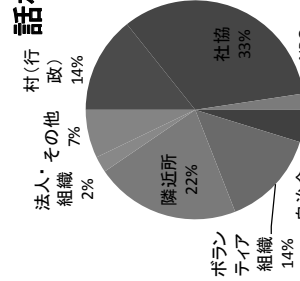
送迎



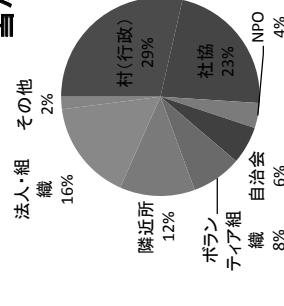
買物



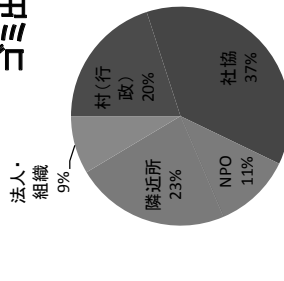
話相手



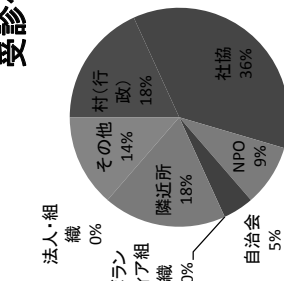
雪かき



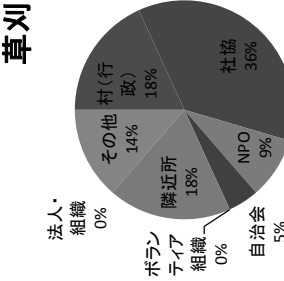
ゴミ出し



受診付添



草刈り



(2) 村民意識調査とヒヤリング

ア 村民意識調査（40歳～65歳対象）

1 社会参加について

問1 地域の会やグループに、どのくらいの頻度で参加していますか。（○は1つずつ）

①ボランティアのグループ	1 週4回以上	3 週1回	5 年に数回
	2 週2～3回	4 月1～3回	6 参加していない
②スポーツ関係のグループやクラブ	1 週4回以上	3 週1回	5 年に数回
	2 週2～3回	4 月1～3回	6 参加していない
③趣味関係のグループ	1 週4回以上	3 週1回	5 年に数回
	2 週2～3回	4 月1～3回	6 参加していない
④区の役員会・活動	1 週4回以上	3 週1回	5 年に数回
	2 週2～3回	4 月1～3回	6 参加していない
⑤学習・教養サークル	1 週4回以上	3 週1回	5 年に数回
	2 週2～3回	4 月1～3回	6 参加していない
⑥その他の団体や会 ()	1 週4回以上	3 週1回	5 年に数回
	2 週2～3回	4 月1～3回	6 参加していない

男	1	2	3	4	5	6
①	0	3	0	15	57	280
②	0	15	10	14	74	250
③	0	5	2	33	73	266
④	3	3	9	121	171	90
⑤	0	1	0	7	37	315
⑥	2	1	4	25	62	233

女	1	2	3	4	5	6
①	0	0	4	12	30	381
②	2	12	14	12	19	359
③	0	3	7	43	39	329
④	0	1	0	34	194	186
⑤	0	1	3	14	23	377
⑥	1	4	1	11	40	321

■地域の活動に「参加していない」が多い

参加している男性の多くは、地区の役員等で活動している方が多い。次いでスポーツ

や趣味の活動に参加している。年に数回は男女ともに地区の会議に参加している。

問2 社会参加活動どのくらいの頻度でしていますか。（○は1つずつ）

①見守りが必要な高齢者を支援する活動	1 週4回以上 2 週2～3回	3 週1回 4 月1～3回	5 年に数回 6 していない
②介護が必要な高齢者を支援する活動	1 週4回以上 2 週2～3回	3 週1回 4 月1～3回	5 年に数回 6 していない
③子どもを育てている親を支援する活動	1 週4回以上 2 週2～3回	3 週1回 4 月1～3回	5 年に数回 6 していない
④地域の生活環境の改善（美化）活動	1 週4回以上 2 週2～3回	3 週1回 4 月1～3回	5 年に数回 6 していない

男	1	2	3	4	5	6
①	0	0	1	5	20	365
②	0	1	0	2	8	380
③	1	0	0	6	27	360
④	0	0	2	18	186	200

女	1	2	3	4	5	6
①	1	4	4	6	12	388
②	3	3	2	4	9	398
③	3	0	1	3	18	390
④	0	1	0	8	122	283

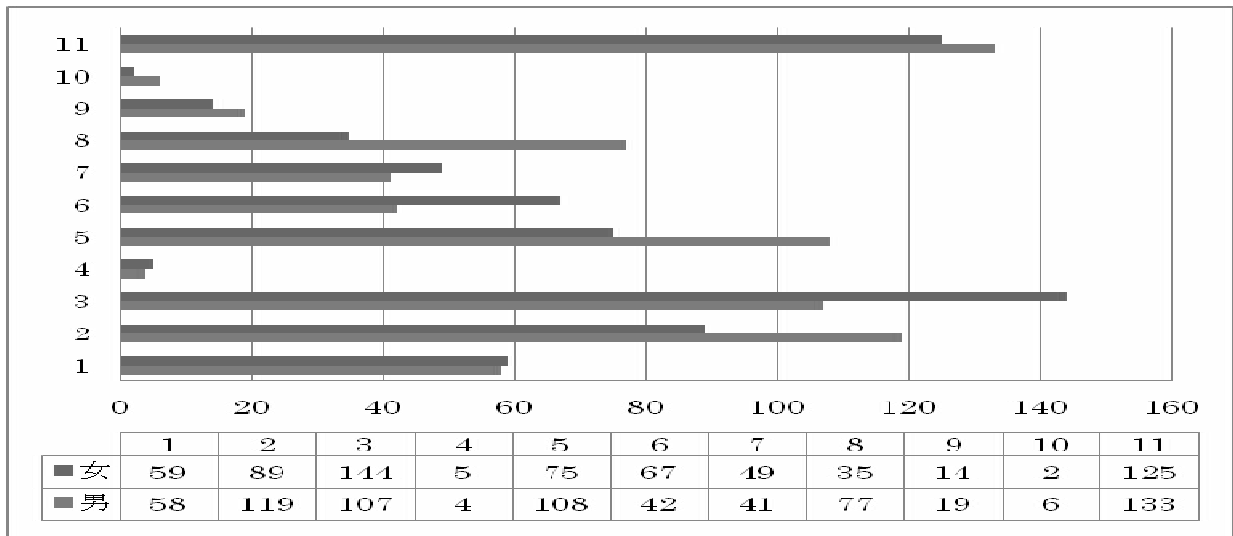
■社会活動への参加はあまり関心がない

年に数回は、社会活動に参加している人は多く、中でも地域の生活環境の改善のために参加している方が多い。

女性は、地域の高齢者や介護の必要な方などの見守りをする人がおり、いざというときには頼りになるのではないかと考える。

問3 どのような活動に参加したいですか（できるとおもいますか）。（○はいくつでも）

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 学習や教養を高めるための活動 | 6 地域のボランティア活動 |
| 2 スポーツやレクリエーション活動 | 7 サークル・自主グループによる活動 |
| 3 趣味、娯楽活動 | 8 自分の知識や技術を生かした活動 |
| 4 老人クラブ活動 | 9 若い世代との交流（学校訪問など） |
| 5 区の活動 | 10 その他（ ） |
| | 11 特にない |



■活動への参加意識が高い

7割の方が何かしらの活動に参加したい（できる）との回答があった。

男性はスポーツやレクリエーション活動に29%、趣味、娯楽活動、区の活動に26%でした。

女性は趣味、娯楽活動に33%、スポーツやレクリエーション活動に21%でした。

ボランティア活動についても10%を超えている。

みんなで集まって活動したい（できる）という意識が高いのは、コミュニケーションをとる場面が増えるとともに、地域の絆や仲間意識の向上により、村の良さにつながっている。

問4 まわりの人との「助けあい」の状況についてお聞きします。

それぞれ、あてはまる番号をお選びください。（○はいくつでも）

①心配事や愚痴を 聞いてくれる人	1 配偶者	4 兄弟姉妹・親戚・親・孫	7 その他
	2 同居の子ども	5 近隣の人	()
	3 別居の子ども	6 友人	8 いない
②心配事や愚痴を 聞いてあげる人	1 配偶者	4 兄弟姉妹・親戚・親・孫	7 その他
	2 同居の子ども	5 近隣の人	()
	3 別居の子ども	6 友人	8 いない
③病気で数日間 寝込んだ時に、 看病や世話を してくれる人	1 配偶者	4 兄弟姉妹・親戚・親・孫	7 その他
	2 同居の子ども	5 近隣の人	()
	3 別居の子ども	6 友人	8 いない
④病気で数日間 寝込んだ時に、	1 配偶者	4 兄弟姉妹・親戚・親・孫	7 その他

看病や世話を してあげる人	2 同居の子ども	5 近隣の人	()
	3 別居の子ども	6 友人	8 いない

男	1	2	3	4	5	6	7	8
①	281	51	26	162	46	163	10	22
②	282	98	62	174	53	166	8	24
③	310	77	23	133	4	9	4	21
④	301	122	41	188	12	14	3	22

女	1	2	3	4	5	6	7	8
①	283	119	114	239	64	278	15	9
②	260	152	132	256	81	256	15	4
③	320	177	77	155	7	18	5	9
④	340	218	110	252	14	25	3	3

■助け合いは家族から

助け合いは、まず家族からそして子供・親戚へと繋がっている。

しかし、心配ごとなどの相談は友人を頼りにしている人が多い。

隣近所にたすけを求める人が少ない。これは徐々に隣近所のつながりが薄くなってしまっていると思われる。

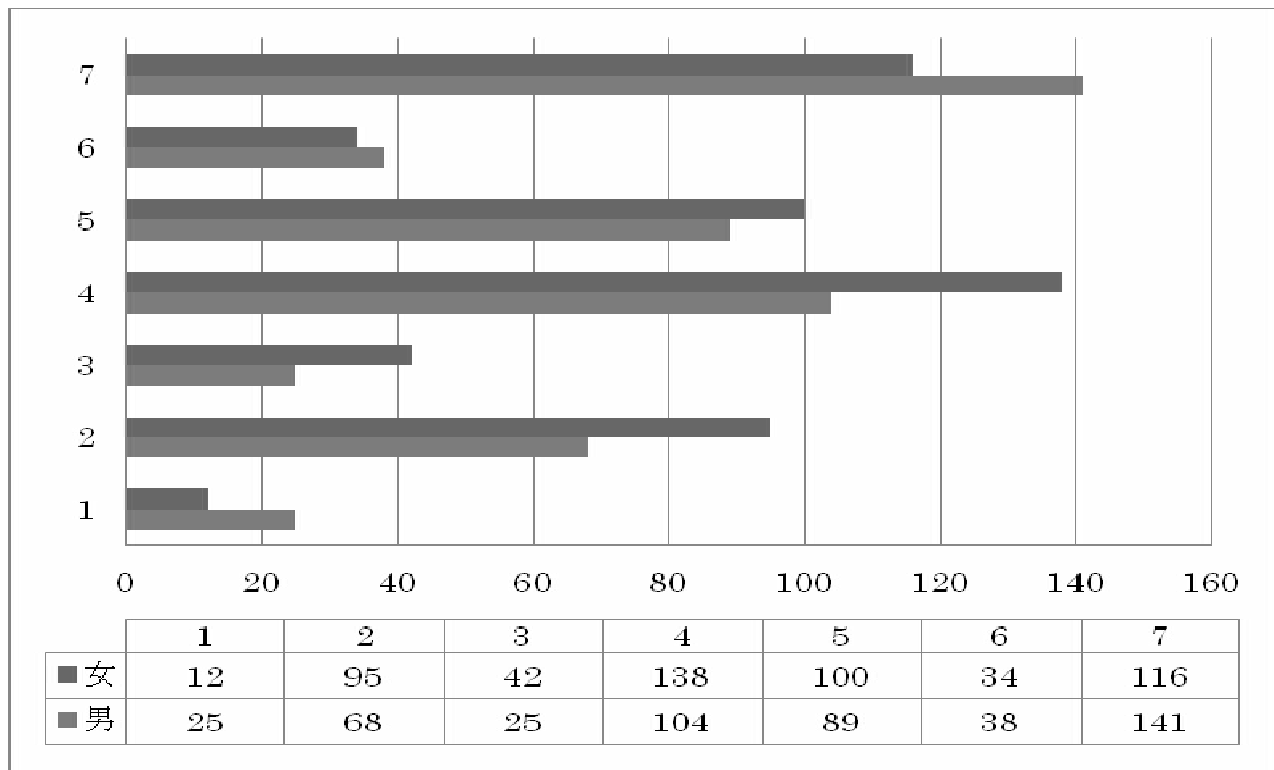
近年、個人情報等だということが前面に出され隣近所の付き合いさえも薄れてきている状況。

今までの隣近所の付き合いが壊れてきているが、今ならではの隣近所の付き合いができるのではないと思われる。

問5 家族や友人・知人以外で、何かあったときに相談する相手はどこですか。

(○はいくつでも)

1 区・老人クラブ	5 役場・地域包括支援センター
2 社会福祉協議会・民生委員	6 その他
3 ケアマネジャー	()
4 医師・歯科医師・看護師	7 いない



■相談は身近なところから

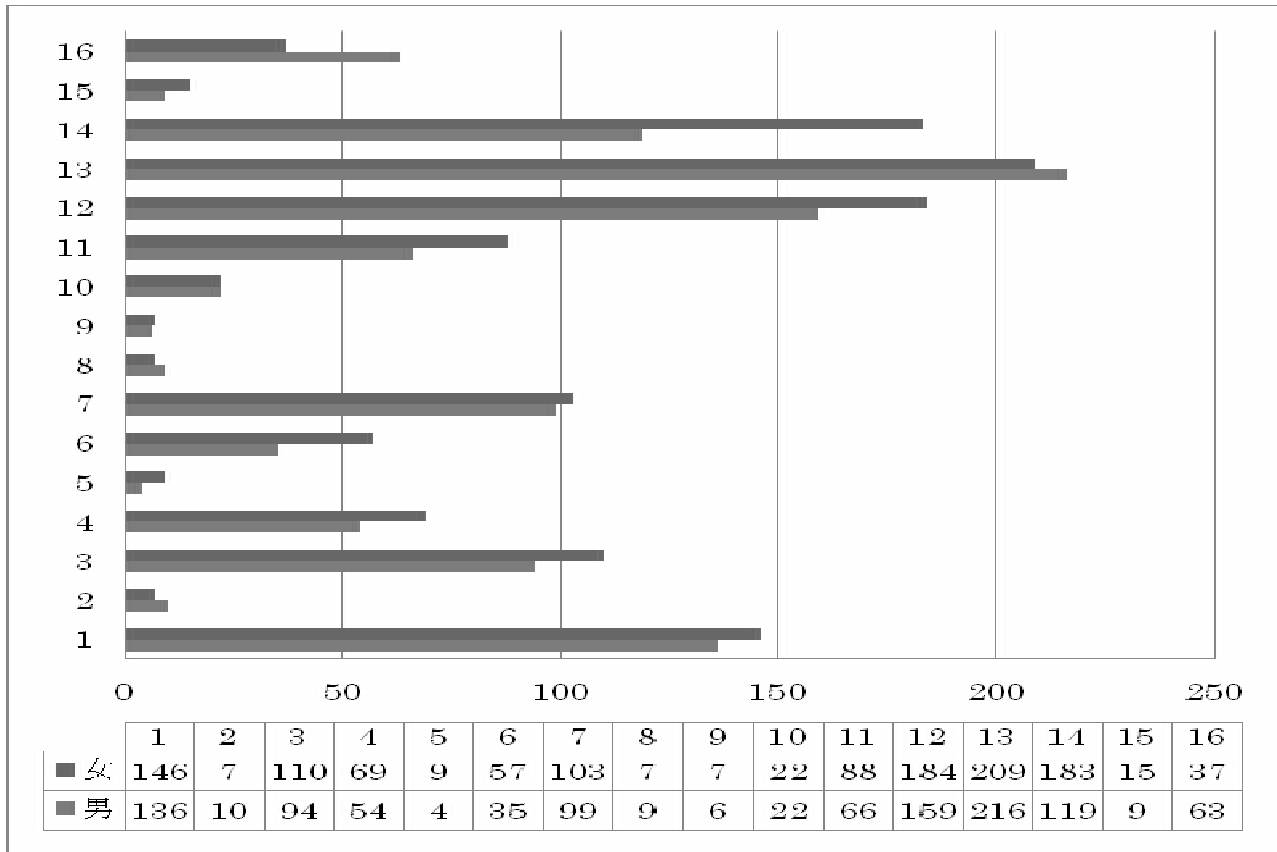
困りごとがなく相談する時にならないとわからないということなのか、相談する者がいないと

答えた方が多く、ついで、日頃かかわりのあるかた、医者看護師等が多い。

村や社協などに相談することが億劫なのかなかなかすぐに相談できるようではない。

問6 あなたやご家族が日常生活上の支援が必要になったとき、地域の人にどのような支援をしてほしいと思いますか。（○はいくつでも）

- | | | |
|-------------|----------------|----------------------|
| 1 外出の際の移動手段 | 7 掃除・洗濯・炊事 | 13 災害時の手助け |
| 2 財産やお金の管理 | 8 衣類の出し入れ | 14 安否確認等の定期的な声かけ・見守り |
| 3 買物 | 9 電化製品の扱い方 | 15 その他 |
| 4 ごみ出し | 10 ペットの世話 | () |
| 5 家具の移動 | 11 通院などの付き添い | 16 特にない |
| 6 庭の手入れ | 12 急病など緊急時の手助け | |



■有事の際の手助けを求めて、地域のつながりや支援体制の強化が必要

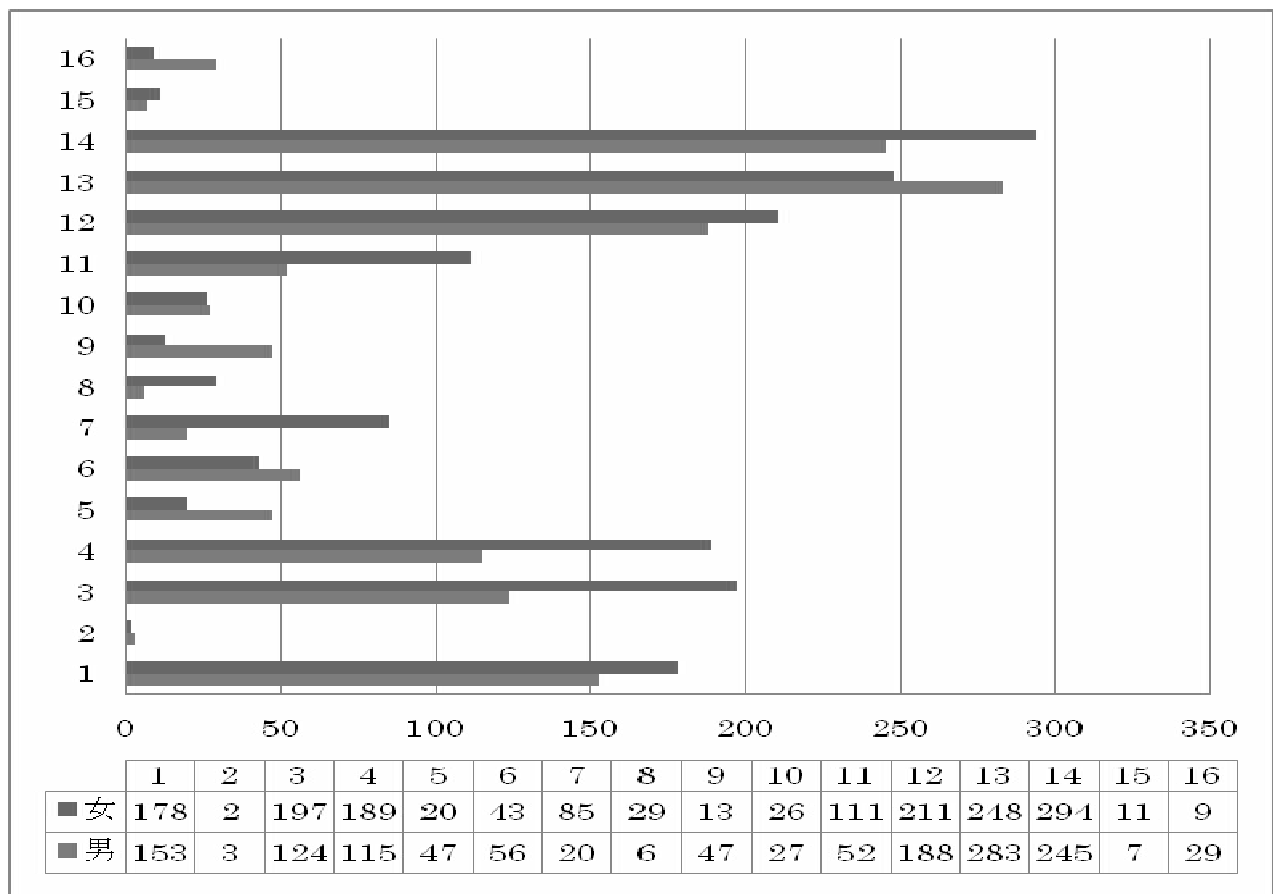
地震災害等の最近の情勢からか、男女ともに40%以上の方が災害時の際・緊急時に助けてほしいと感じている人が多く、特に女性は安否確認等定期的な声掛けをも望んでいる。

また、買い物や通院など外出の際の移動の手段などの手助けをしてほしい方も25%の希望がある。

村で生活していくために必要な、生活支援ボランティアや地域のつながりなどの協力体制の強化も必要であるとする。

問7 となり近所に、高齢や病気・障害等で困っている家庭があった場合、どのような支援ができると思いますか。（〇はいくつでも）

- | | | |
|-------------|----------------|----------------------|
| 1 外出の際の移動手段 | 7 掃除・洗濯・炊事 | 13 災害時の手助け |
| 2 財産やお金の管理 | 8 衣類の出し入れ | 14 安否確認等の定期的な声かけ・見守り |
| 3 買物 | 9 電化製品の扱い方 | 15 その他 |
| 4 ごみ出し | 10 ペットの世話 | () |
| 5 家具の移動 | 11 通院などの付き添い | 16 特にない |
| 6 庭の手入れ | 12 急病など緊急時の手助け | |



■支援意識が高い女性が豊富

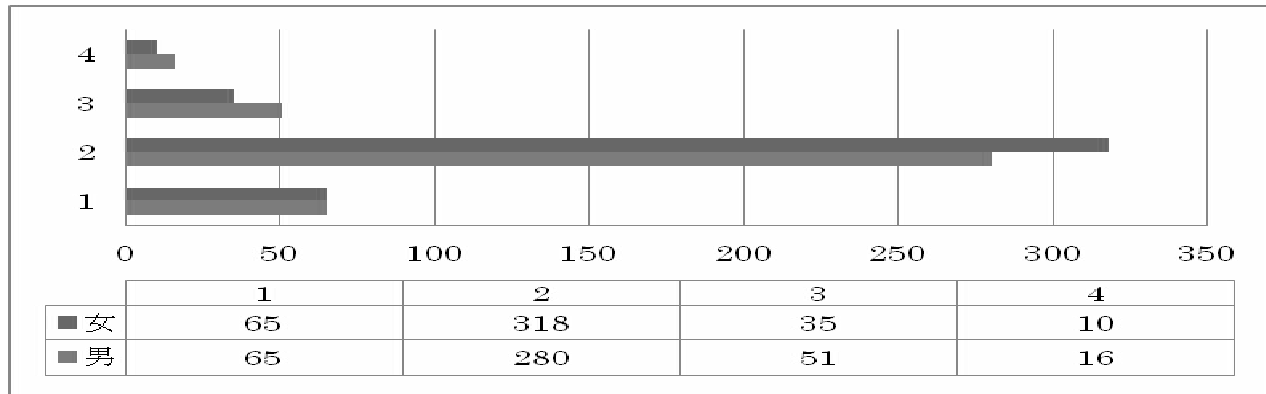
女性は、緊急時・災害時の手助け・定期的な声掛けについて大半の人が積極的に支援できると回答し、男性も半数の方が支援できると回答。

女性は、他に買い物や病院への外出支援や生活支援もできる方が多い。地域に支援ができる女性がたくさんいる事は高齢者世帯や独居老人世帯の力強い存在である。

2 健康について

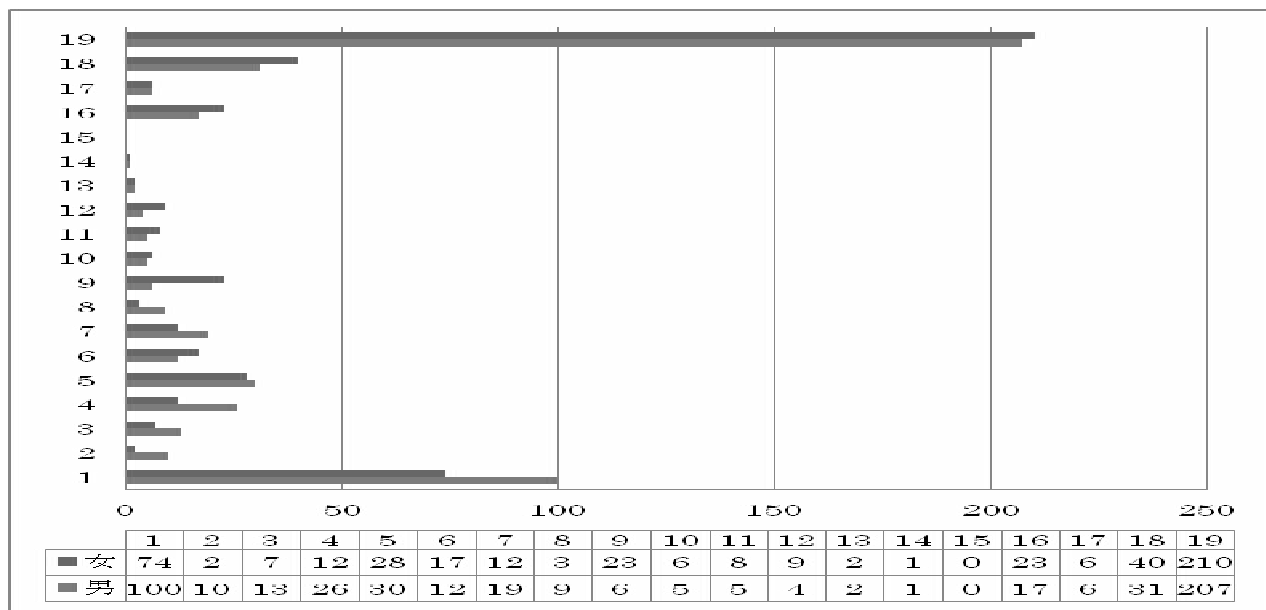
問8 普段、ご自分で健康だと思いますか。（○は1つ）

- | | |
|----------|-------------|
| 1 とても健康 | 3 あまり健康ではない |
| 2 まあまあ健康 | 4 健康でない |



問9 現在治療中、または後遺症のある病気はありますか。（○はいくつでも）

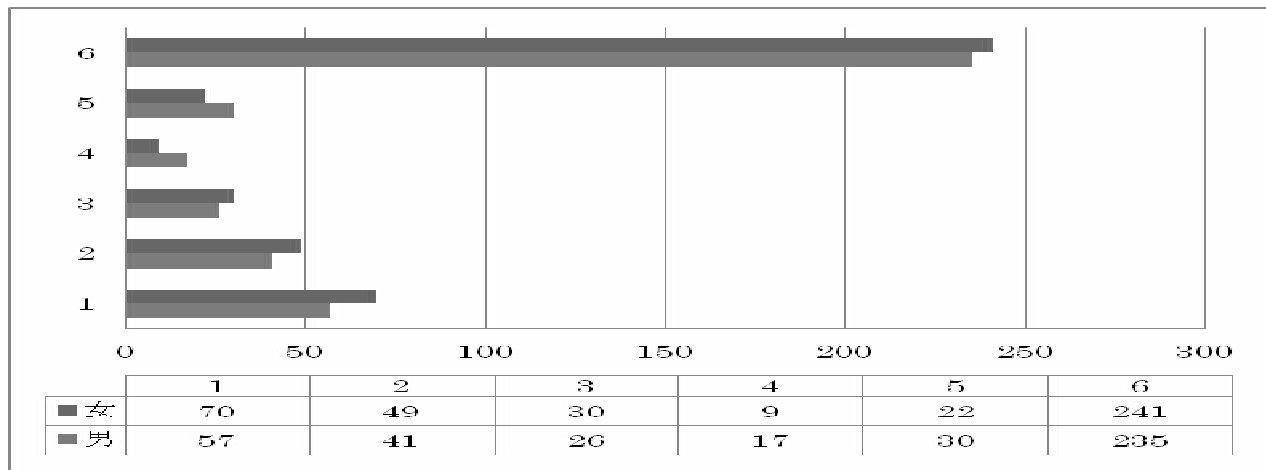
- | | | |
|--------------------|-----------------------|-------------------|
| 1 高血圧 | 8 腎臓・前立腺の病気 | 14 認知症（アルツハイマー病等） |
| 2 脳卒中（脳出血・脳梗塞等） | 9 筋骨格の病気（骨粗しょう症、関節症等） | 15 パーキンソン病 |
| 3 心臓病 | 10 外傷（転倒・骨折等） | 16 目の病気 |
| 4 糖尿病 | 11 がん（新生物） | 17 耳の病気 |
| 5 脂質異常（高脂血症） | 12 血液・免疫の病気 | 18 その他（ ） |
| 6 呼吸器の病気（肺炎や気管支炎等） | 13 うつ病 | 19 ない |
| 7 胃腸・肝臓・胆のうの病気 | | |



第2章 調査研究の結果

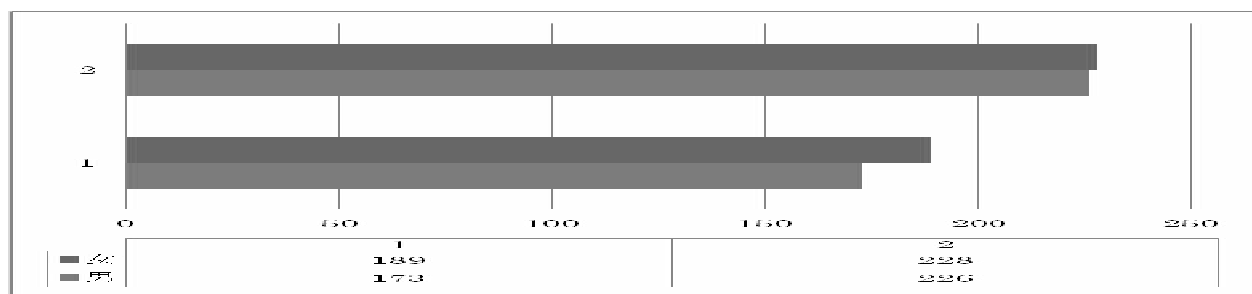
問10 現在、医師の処方した薬を何種類飲んでいますか。（○は1つ）

- | | | |
|-------|-------|----------|
| 1 1種類 | 3 3種類 | 5 5種類以上 |
| 2 2種類 | 4 4種類 | 6 飲んでいない |



問11 現在、病院・医院（診療所、クリニック）に通院していますか。（○は1つ）

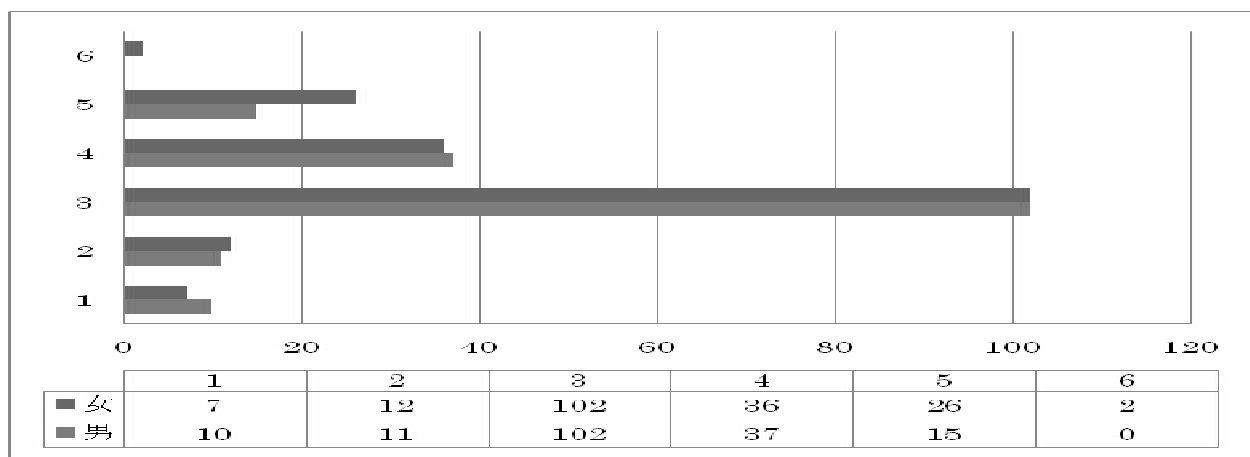
- | | |
|------|-------|
| 1 はい | 2 いいえ |
|------|-------|



▶（問11で「1 はい」と答えた方におたずねします。）

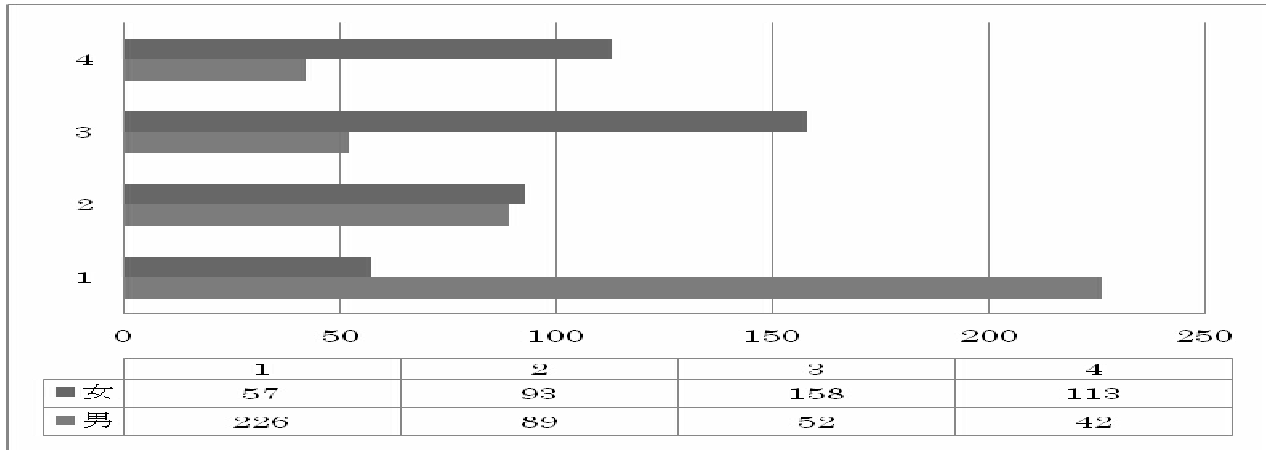
問11-1 通院頻度を教えてください。（○は1つ）

- | | | |
|---------|------------|------------|
| 1 週1回以上 | 3 月1回程度 | 5 3か月に1回程度 |
| 2 月2～3回 | 4 2か月に1回程度 | |



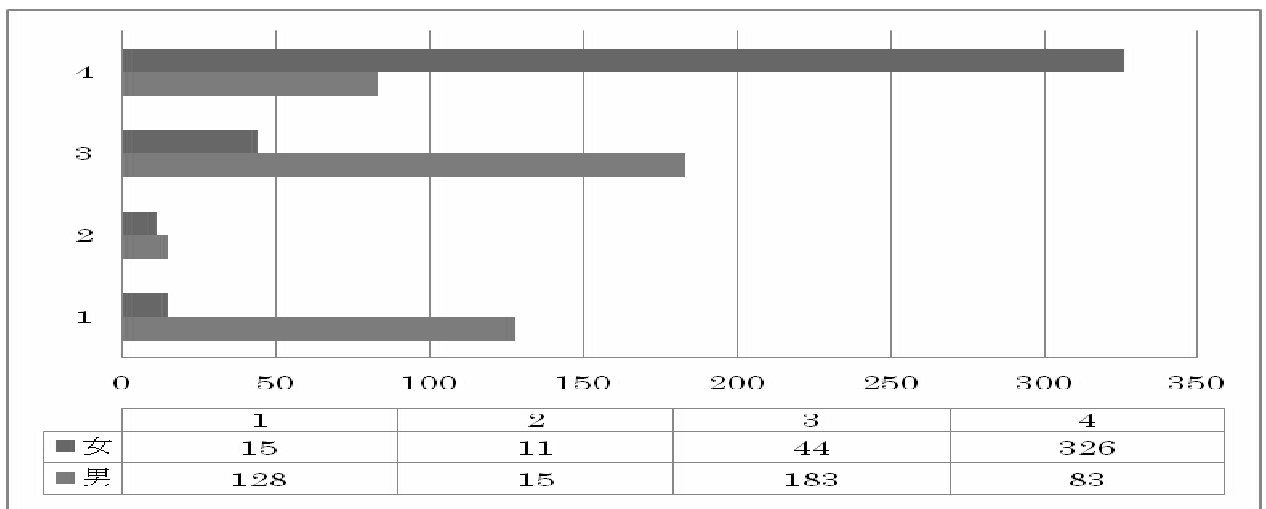
問12 お酒は飲みますか。（○は1つ）

- | | |
|----------|------------|
| 1 ほぼ毎日飲む | 3 ほとんど飲まない |
| 2 時々飲む | 4 もともと飲まない |



問13 タバコは吸っていますか。（○は1つ）

- | | |
|-------------|--------------|
| 1 ほぼ毎日吸っている | 3 吸っていたがやめた |
| 2 時々吸っている | 4 もともと吸っていない |



■健康について

ほぼ健康だと回答する人が大半であり村民の健康状態は良いと言える。

しかし、既に高血圧等で通院されている方は月に1回のペースで通院されている方が多い。

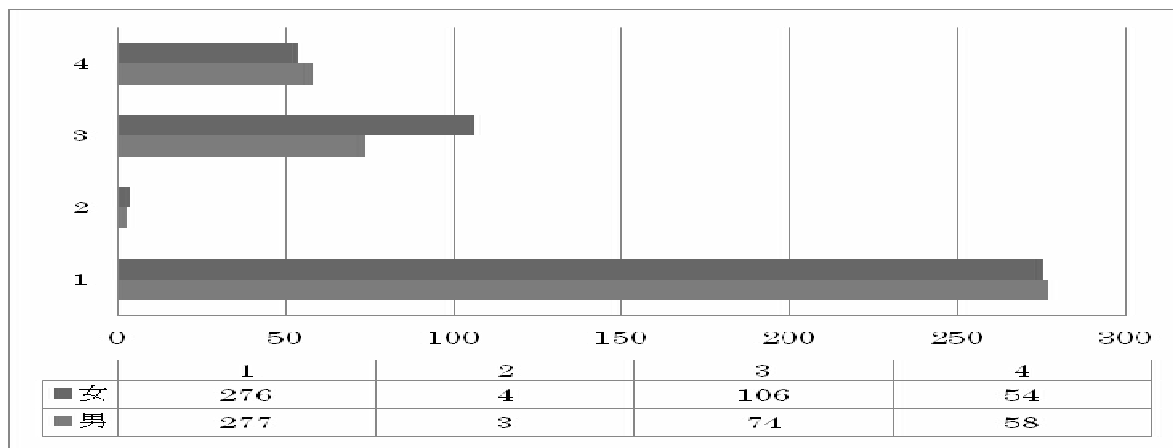
健康について関心を持ち始めたことにより、男性についてはタバコをやめた人が多いことがわかる。

3 農業について

ここでお聞きする農業は、自家消費や趣味の野菜作りや米作り、花づくりなども含まれます。

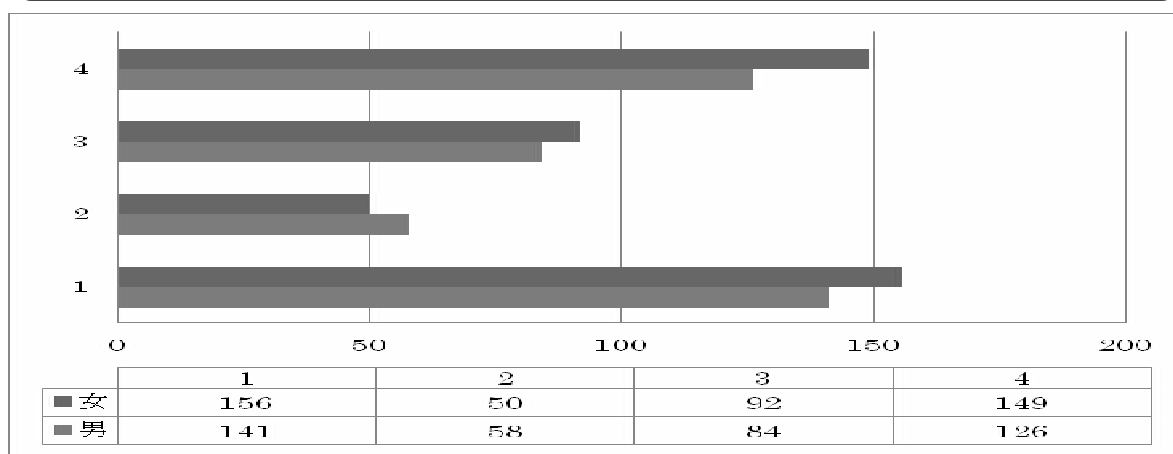
問14 あなたの家には農業ができる環境がありますか。

- | | |
|-----------|----------|
| 1 水田と畑がある | 3 畑だけがある |
| 2 水田だけがある | 4 農地はない |



問15 現在、農業を行っていますか。

- | | |
|--------------|------------|
| 1 週1回以上行っている | 3 年数回行っている |
| 2 月1回以上行っている | 4 行っていない |



■農業についてはやっている人が多い

農業について回数に差はあるがやっているほとんどである。

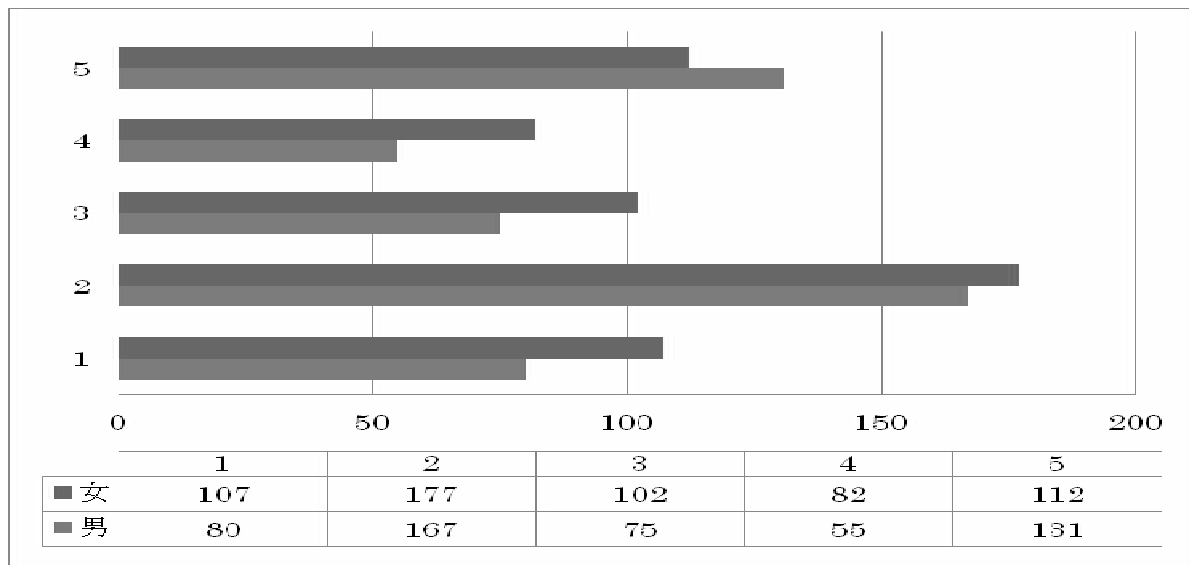
地域の実情から田畑があることにより何らかの形で農作業をしている。

問16 問15で「行っている」と答えた方におたずねします。

農業を行っている理由（気持ち）についてお聞きします。

（〇はいくつでも）

- 1 野菜（米・花）づくりが楽しいから
- 2 自分で食べるものは自分でつくりたいから
- 3 誰か（子どもや親せきなど）に食べてもらいたいから
- 4 ストレス解消や健康にいいから
- 5 農地があるから仕方なく



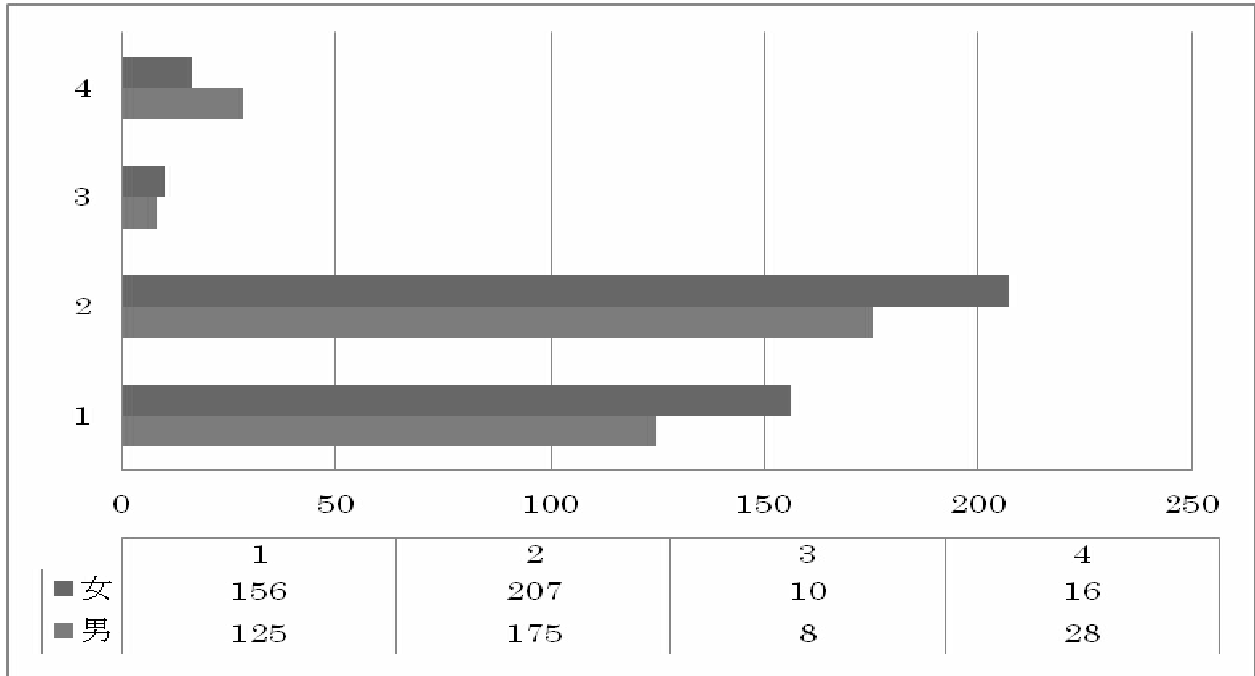
■農業感

自分で作った物を食べる喜びや、子供や親せきなどにあげたいからなど喜びを感じてもらうためにやっている。反面、農地があることにより仕方なくと回答する方も少なくはない。

農業をすることにより楽しみを感じている人が多く、楽しみを農業に求めていると感じられる。

問17 あなたの家で主に農業に従事している人の年代は

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 65歳以上 | 3 18歳～39歳 |
| 2 40歳～64歳 | 4 その他 |



■農業従事者の年齢

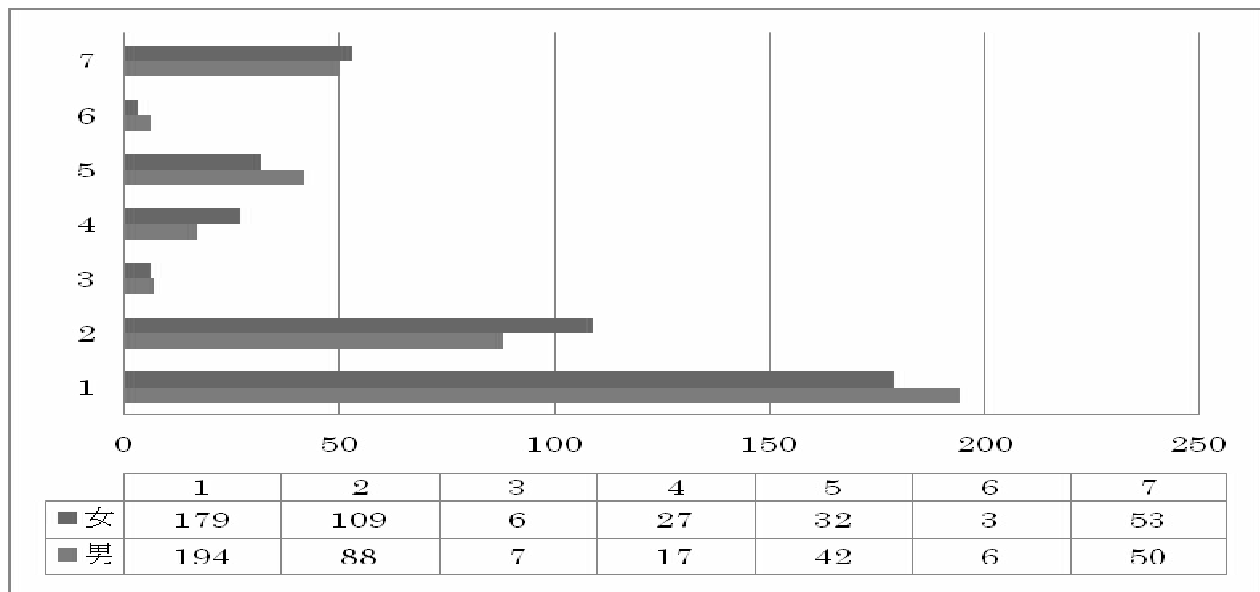
農業に従事している人の年齢は40歳代以上が大半である。

また、女性の活躍も感じられる。

65歳以上の農業を行っている人が多く、定年等で退職してから農業についている人が多いことがうかがえる。

問18 今後のあなたの農業についてお聞きします。

- 1 これからも農業は続けたい
- 2 仕事などで時間がなくてできないが、いずれはやりたい
- 3 農地がないのでできないが、いずれはやりたい
- 4 1人ではできないが、気の合う仲間やグループでならやりたい
- 5 いずれは農業をやめたい
- 6 今すぐにでもやめたい
- 7 今もやっていないし、将来もやらない



■今後の農業について

今後も農業は続けたい。そしていずれはやりたいが多数。

現在は40代の男性40%、女性54%の方は農業をやっていない状況であるが、30～40%の方がいずれは農業をやりたいと思っている。

仕事がある中で、なかなか農業をする時間がなかったり、親が農業をやっているから、今はしていない方も多数いる。

それに比べ60代の男女は、農業をしていない方がわずか17%しかいなかった。

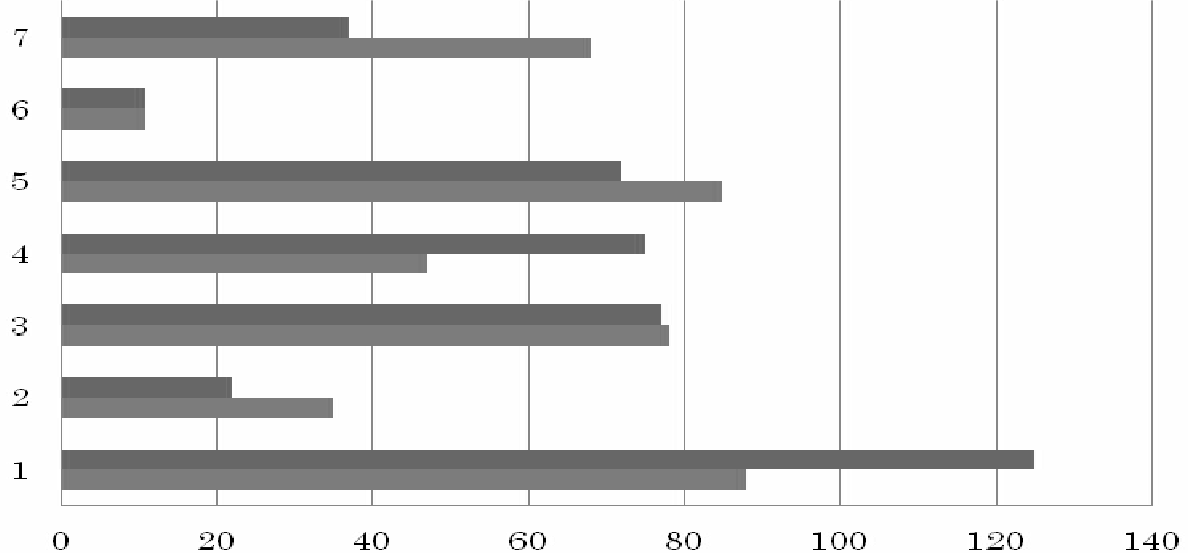
また、今後も農業を続けたいと考えている方は63%の方がいる。やはり、仕事を退職してから主として農業をやっている年代である60代が、今後も農業を続けるとともに若い世代へと引き継いでいく必要があると考える。

4 介護予防について

※ 介護予防とは、要介護状態の発生をできる限り防ぐ（遅らせる）こと、そして要介護状態にあってもその悪化をできる限り防ぐことです。具体的には、いつまでも元気に、自分らしく生きがいを持って暮らすことができるよう、意識して体力を維持するために行う取組（運動、食事、口の中をきれいに保つなど）のことです。

問19 現在、介護予防に取り組んでいますか。（○は1つ）

- | | |
|---------------------|--------------------------|
| 1 意識して取り組んでいる | 5 興味はあるが、具体的な取り組み方がわからない |
| 2 体力が落ちてきたら取り組みたい | 6 その他（ ） |
| 3 もう少し歳をとってから取り組みたい | 7 興味・関心は特にない |
| 4 きっかけがあれば取り組みたい | |



	1	2	3	4	5	6	7
■ 女	125	22	77	75	72	11	37
■ 男	88	35	78	47	85	11	68

■健康運動や介護予防に取り組んでいきたい

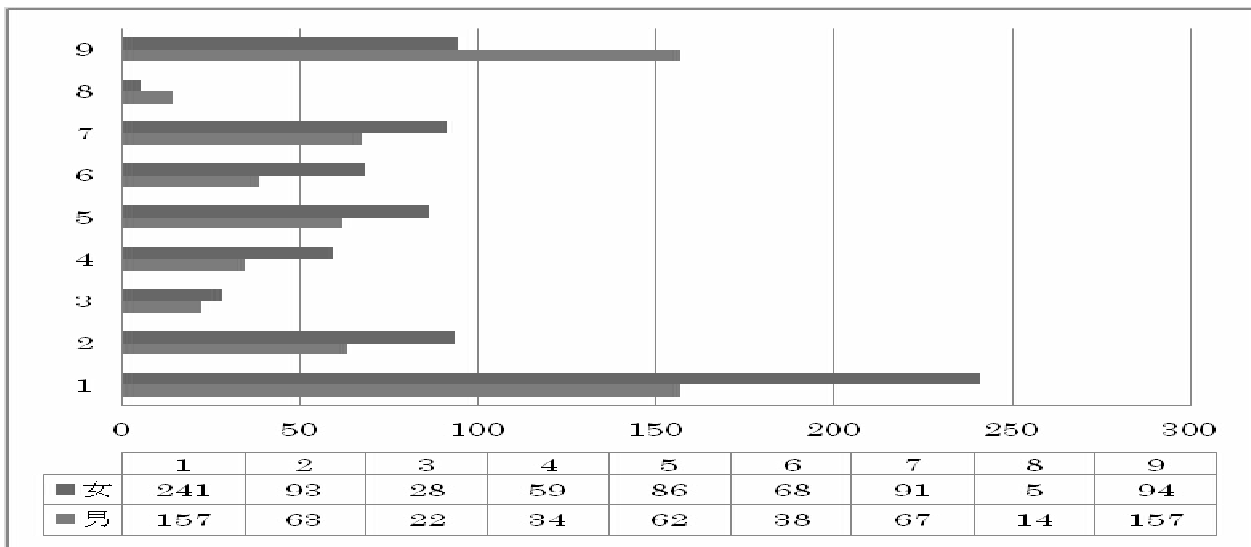
男性は80%の方、女性は90%の方が健康運動や介護予防運動に興味を持っている。また、現在意識して取り組んでいる人は、女性が30%もいる。

特に、60代の女性は2人に1人は意識して取り組んでいる状況である。

意識して取り組む年代が若い世代になるほど、健康維持や予防につながっていくと考えられる。

問20 村では、将来できるだけ要介護状態にならないようにするため、介護予防事業を実施していますが、あなたが今後参加してみたいことは何ですか。（〇はいくつでも）

- 1 運動機能向上のための教室（ストレッチ運動、筋力向上トレーニングなど）
- 2 栄養バランスよく、おいしく食べるための教室や調理実習
- 3 口の中の清掃保持や顔・口まわりの運動
- 4 家の中に閉じこもらないために、公民館等集まってのゲームや会食
- 5 認知症になることを予防するために、趣味活動やゲームなどを行う教室
- 6 園芸を行う教室
- 7 健康セミナー
- 8 うつ状態になることを予防するための教室や保健師などによるご自宅への訪問ケア
- 9 参加してみたいことは特にない



■介護予防は女性に関心を持っている

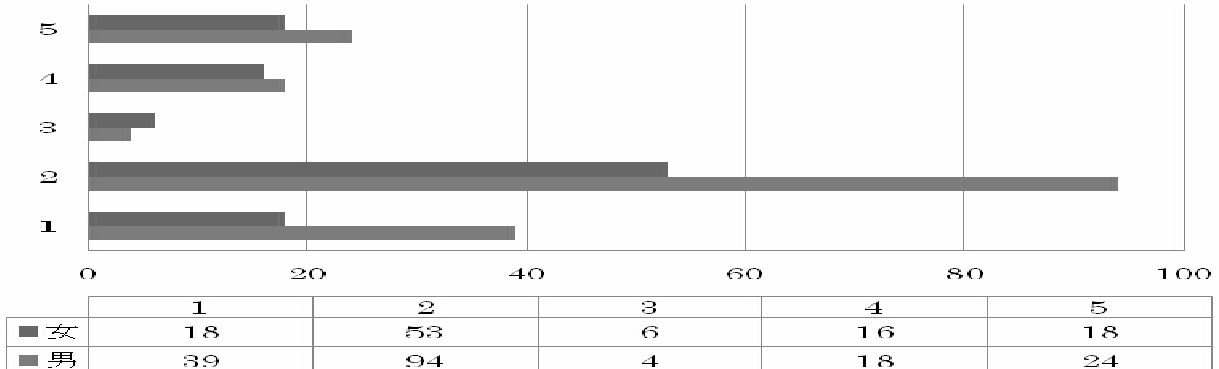
介護予防は女性が高い関心を持っており、運動教室・健康セミナーなど体を動かす教室に高い数字が見られる。

その反面、男性に関しては参加してみたいことが特になく、教室に参加することが億劫であるという結果である。

(問20で「9 参加してみたいことは特にない」とお答えの方におたずねします。)

問20-1 参加してみたいことが特にない理由は何ですか。(○はいくつでも)

- 1 普段から田畑等に出て農作業をしているので、改めて介護予防事業に参加しなくてもよいから
- 2 まだ元気なので、すぐには介護予防事業へ参加しなくても大丈夫だから
- 3 介護予防事業に出掛けていくのが面倒だから(送迎がないから)
- 4 介護予防事業に参加すること自体に必要性や魅力を感じないから
- 5 その他()



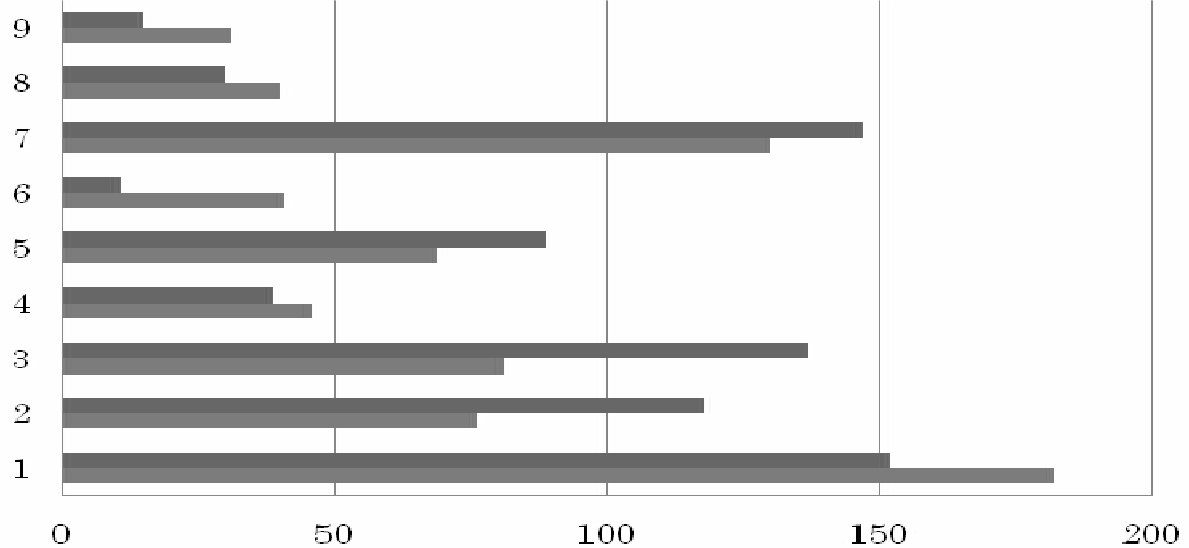
■介護予防はまだ先の話だと感じている

実際に、介護予防することが必要だという状況となっていないことから介護予防についての関心があまりない。特に男性については必要性を感じていない。

また、介護予防と改めてやらなくても、自分の生活の中で行っている農業などが介護予防と感じている人が多い。

問21 あなたは健康についてどのようなことが知りたいですか。（〇は3つまで）

- | | |
|--------------------------------|---------------|
| 1 がんや高血圧などの生活習慣病にならないための工夫について | 5 寝たきりの予防について |
| 2 望ましい食生活について | 6 歯の健康について |
| 3 運動の方法について | 7 認知症の予防について |
| 4 健康診断・各種検診の内容や受け方などについて | 8 うつ病の予防について |
| | 9 その他 |
| | () |



■健康についての関心は、がんや生活習慣病そして認知症

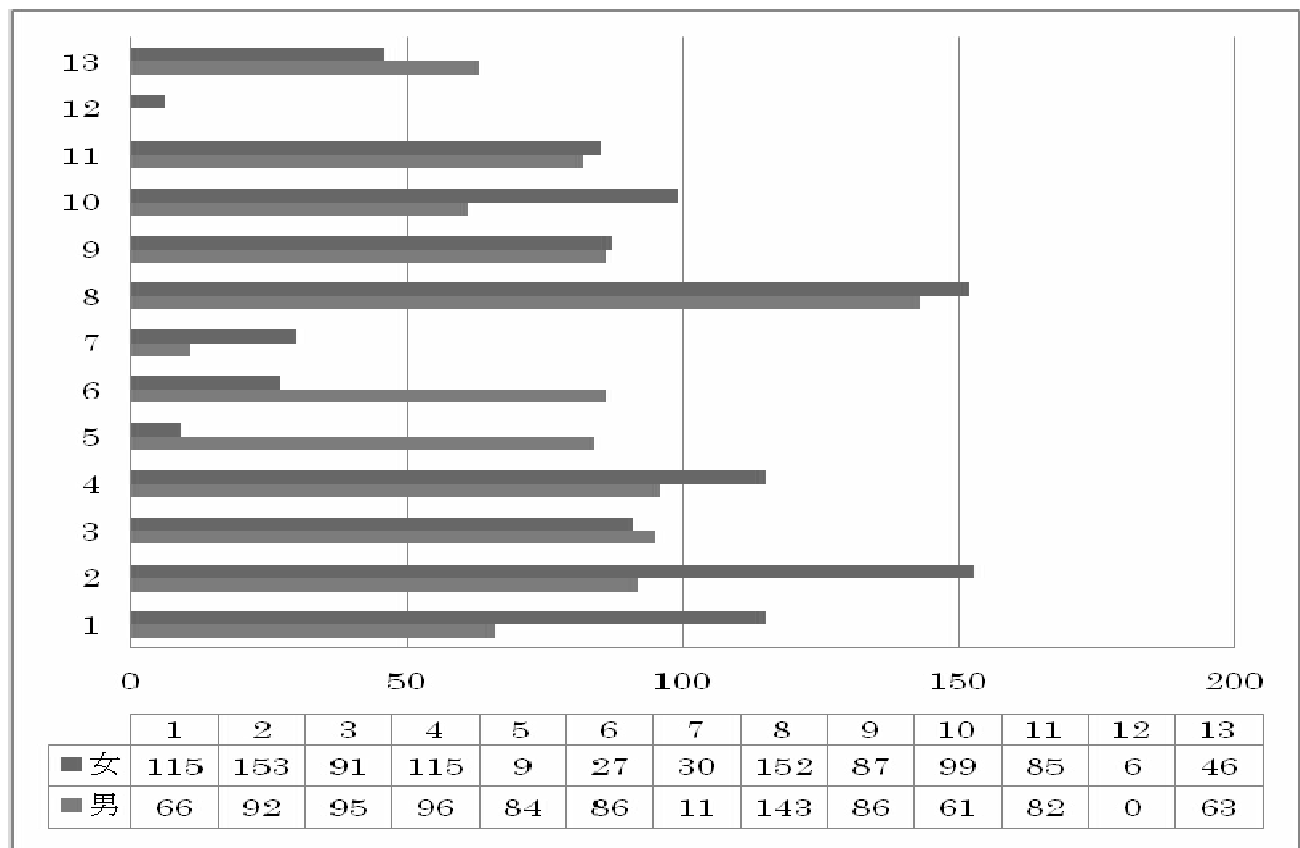
健康については、がんや高血圧などの生活習慣病にならないための工夫や、認知症に

ならないための予防策について関心を持っている。

ここでも女性は、運動の方法について関心を持っており、運動の必要性を感じているようだ。

問22 あなたは、ふだんから健康や介護予防のために気をつけていることはありますか。
(○はいくつでも)

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 栄養バランスやかむ回数に気をつけて食事をしている | 7 パズルや計算作業など、認知症の予防に取り組んでいる |
| 2 口の中を清潔にしている（歯みがき、うがいなど） | 8 定期的に健康診断を受けている |
| 3 ウォーキングや体操など、定期的に運動をしている | 9 かかりつけの医師（主治医）に定期的に診てもらっている |
| 4 規則的な生活を心がけている（夜更かしをしないなど） | 10 気持ちをできる限り明るく保つ |
| 5 たばこをやめた | 11 休養や睡眠を十分にとっている |
| 6 お酒を飲みすぎない | 12 その他
() |
| | 13 特になし |



■健康のためにタバコをやめたりお酒を減らしたり

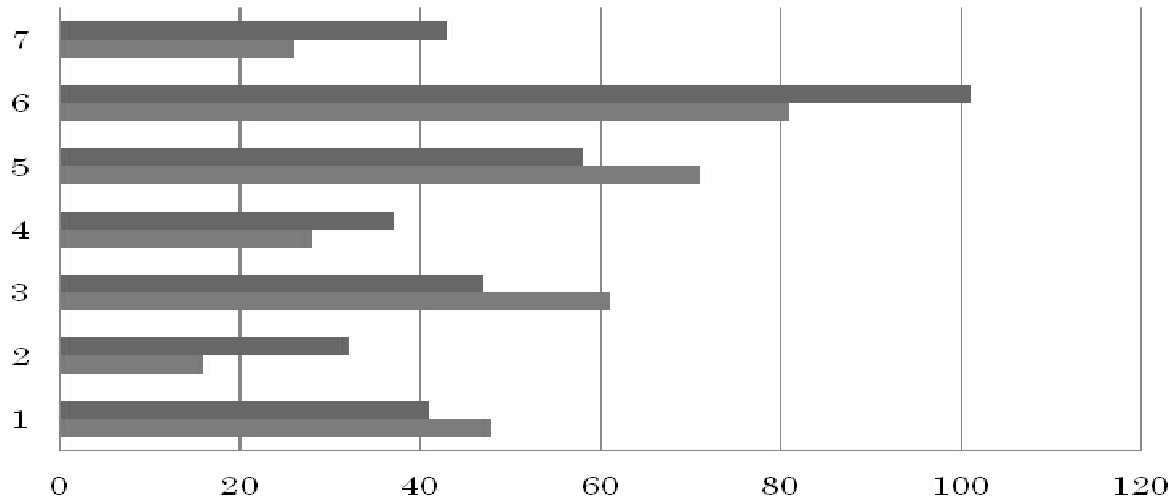
健康に関心を持ち、まずはタバコをやめたりお酒を減らしたりと身近なところから始めていることが男性に多い。

女性は、口腔環境にも関心を持っており、はみがきや食事のかむ回数などにも気を付けている。

(問22で「1」～「7」と答えた方におたずねします。)

問22-1 取り組むこととなった主なきっかけは何ですか。(〇はいくつでも)

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 家族のアドバイスや一言 | 5 検査の結果(数字など)が気になって |
| 2 知人や友人からのアドバイスや一言 | 6 マスコミの情報から自分で判断して |
| 3 医師等の専門家からの指導や助言 | 7 その他 |
| 4 具体的に症状が現れたので | () |



	1	2	3	4	5	6	7
■女	41	32	47	37	58	101	43
■男	48	16	61	28	71	81	26

■検査結果や情報等により健康情報を入手している

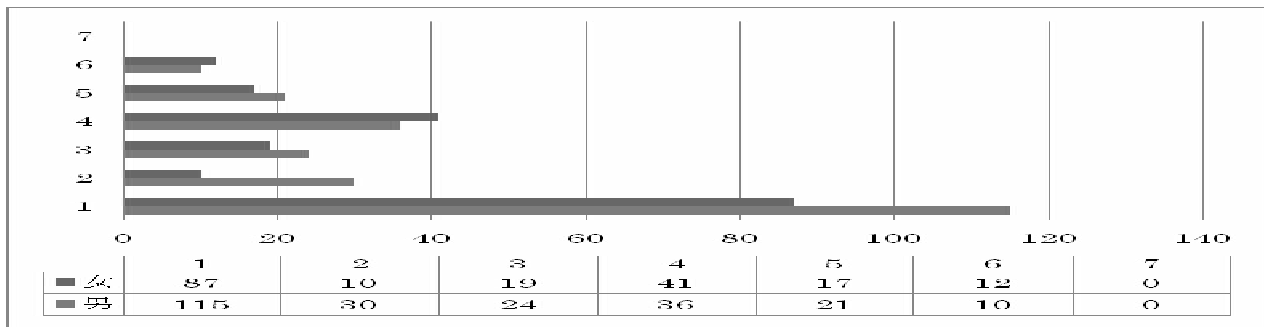
男性は80%の方が関心を持っており、家族や医師などからの助言により取り組む姿勢が見られる。

女性は90%の方が関心を持っており、マスコミから入手して健康・介護予防に興味を持っており、意識的に取り組んでいる人が多い。

意識して取り組んでいく年代が若い世代になればなるほど、健康維持や予防につながっていくのではないかと。

1 現在介護をしている 3 今まで介護したことはない
2 以前は介護をしていたが現在はしていない

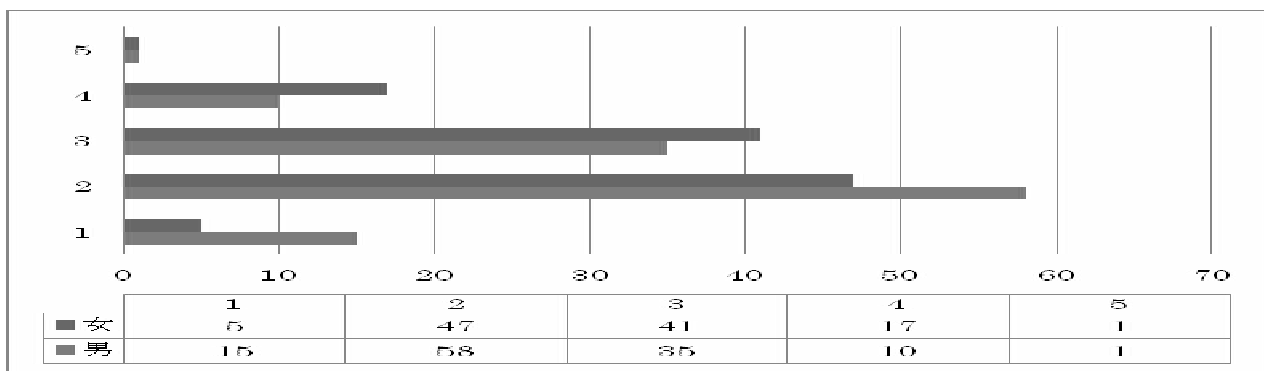
第2章 調査研究の結果



(問24で「1」とお答えの方におたずねします。)

問24-2 自宅でどのように介護サービスを利用したいですか。(○は1つ)

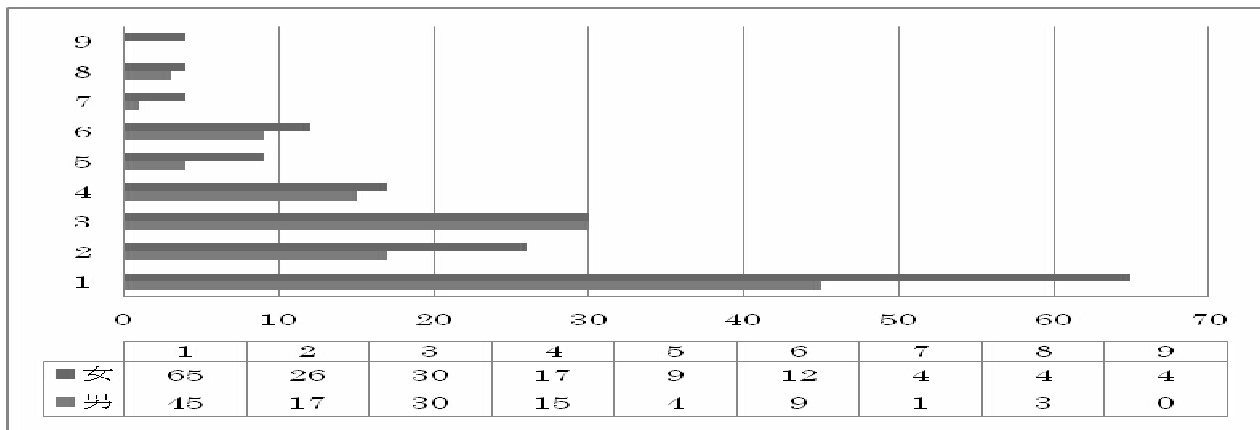
- 1 家族だけに介護されたい
- 2 家族による介護を中心とし、ホームヘルパー、デイサービスなどの介護サービスも利用したい
- 3 ホームヘルパー、デイサービスなどの介護サービスを中心とし、併せて家族による介護も受けたい
- 4 ホームヘルパー、デイサービスなど、介護サービスだけで介護を受けたい
- 5 その他 ()



(問24で「2」とお答えの方におたずねします。)

問24-3 施設等への入所(入居)を希望する理由は何ですか。(○はいくつでも)

- 1 家族に迷惑をかけたくないから
- 2 自宅では、認知症対応やリハビリなど専門的な介護が受けられないから
- 3 家族は介護の時間が十分にとれないから
- 4 自宅では、急な容態変化や介護者の都合など緊急時の対応の面で不安だから
- 5 在宅で介護サービスを利用するより諸々の費用を考え総合的にみると経済的だから
- 6 住宅の構造に問題があるから
- 7 自宅でなく離れた場所にある施設なら世間の目が気にならないから
- 8 家族がいないから
- その他 ()

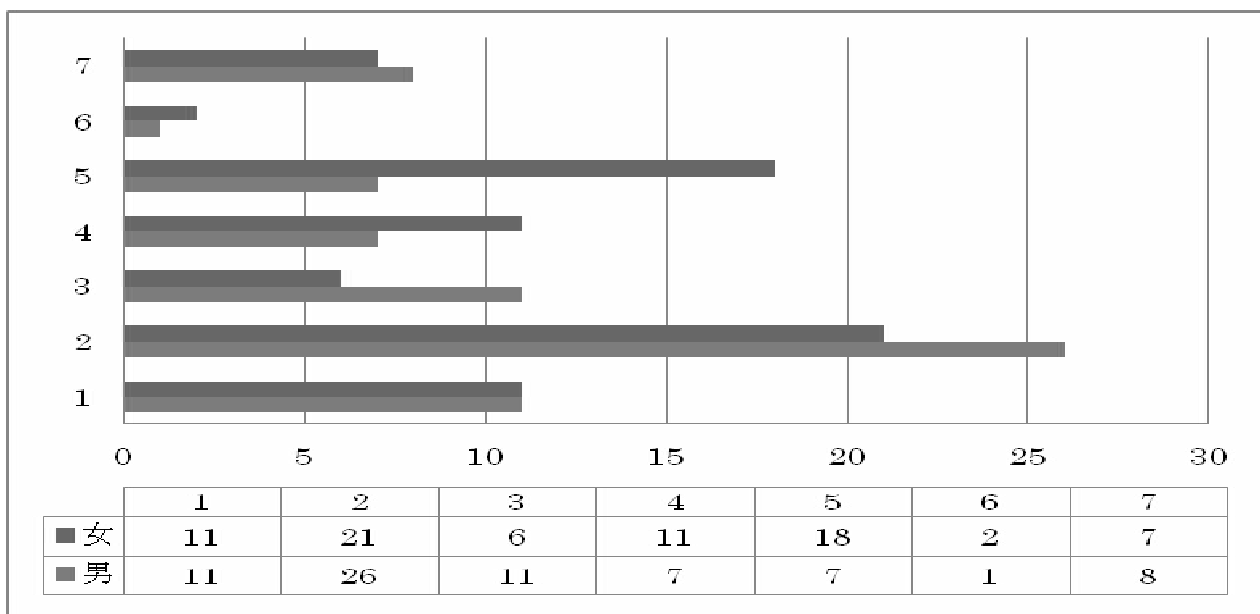


(問24で「2」とお答えの方におたずねします。)

問24-4 もっとも希望する「施設」や「住まい」の形態は、次のどれですか。

※ 施設の形態は問わない方は「7」を選択 (○は1つ)

- 1 常時介護が受けられ、施設の規模は大きく(定員30~100人程度)ても、少人数ごとに家庭的な生活を送れる個室の施設(ユニット型の特養、老健など)
- 2 住み慣れた地域や自宅近くで常時介護が受けられ、小規模(定員5~29人程度)で家庭的な雰囲気の個室の施設(小規模な特養など)
- 3 常時介護が受けられる大規模(定員30~100人程度)な施設で、個室に比べて利用料金が比較的低額な相部屋(4人1部屋程度)の多い施設(従来型の特養など)
- 4 一人暮らしの不安や身体・認知機能の低下を補うため、高齢者が必要に応じて介護を受けながら生活する小規模施設(グループホーム、ケアハウスなど)
- 5 主に高齢者を入居者とし、希望に応じて食事や清掃などのサービスが提供される集合住宅(有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅など)
- 6 その他(病院など)
- 7 特になし(施設の形態は問わない方を含む)

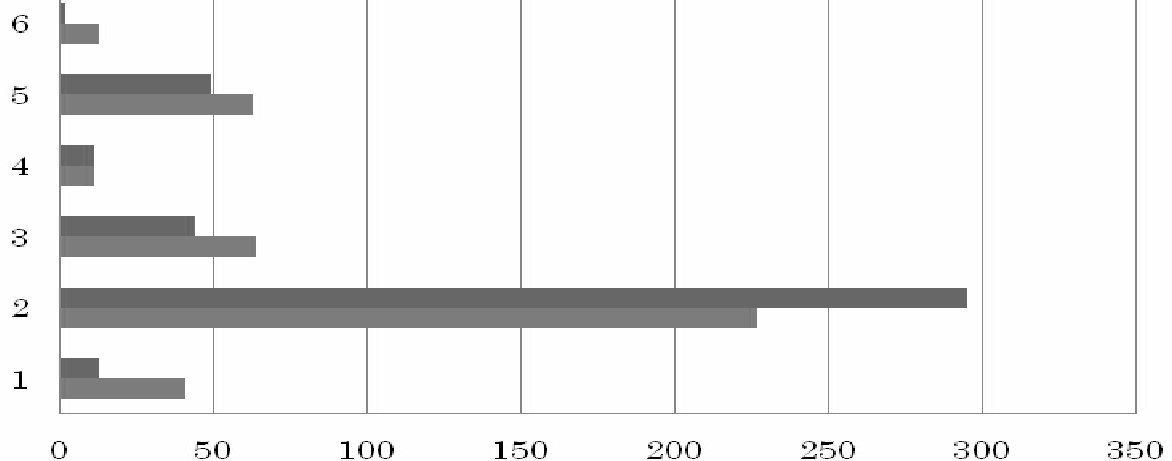


■介護サービスについて

家族には迷惑をかけたくないという思いが多いが、施設に入としても家庭的な雰囲気を持てるところを希望している。

問25 あなたの家族に介護が必要となった場合、どのように介護したいと思いますか。
(○は1つ)

- 1 なるべく家族のみで、自宅で介護したい
- 2 介護保険制度のサービス（デイサービスや短期の宿泊サービスなど）や福祉サービス（日常生活支援や緊急通報サービスなど）を使いながら自宅で介護したい
- 3 老人ホームなどの施設に入所させたい
- 4 その他（ ）
- 5 わからない
- 6 ひとり暮らしのため、家族はいない



	1	2	3	4	5	6
女	13	295	44	11	49	2
男	41	227	64	11	63	13

■やはり住み慣れた自宅がいい

住み慣れた環境でいつまでも元気で暮らしたい、そして介護になっても介護サービスを使いながら自宅で介護したい。こう考えている人が多い。

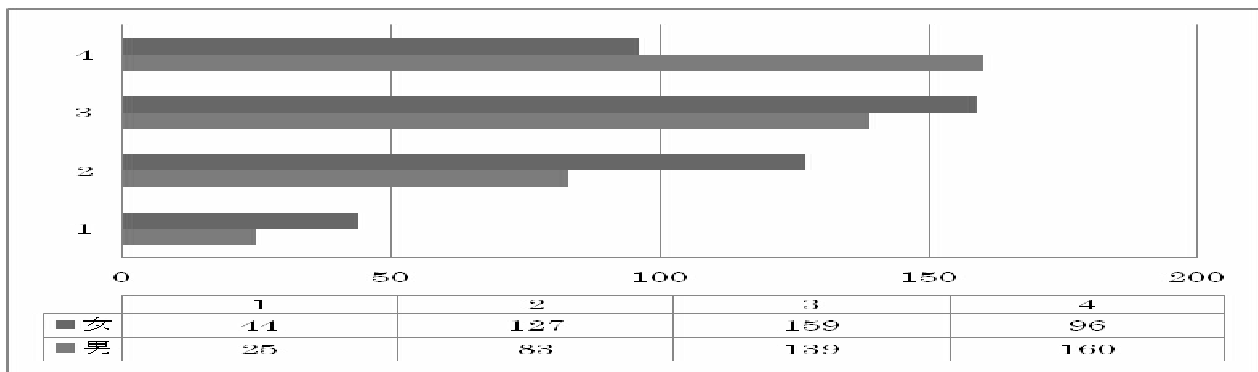
介護される側は、なるべく自宅でいたい但家族に迷惑がかかるから施設に行きたい。

このことから、介護はできる限り在宅でサービスを使いながら、どうにもならなくなった時は施設で介護を受けることを望んでいる。

6 地域包括支援センターについて

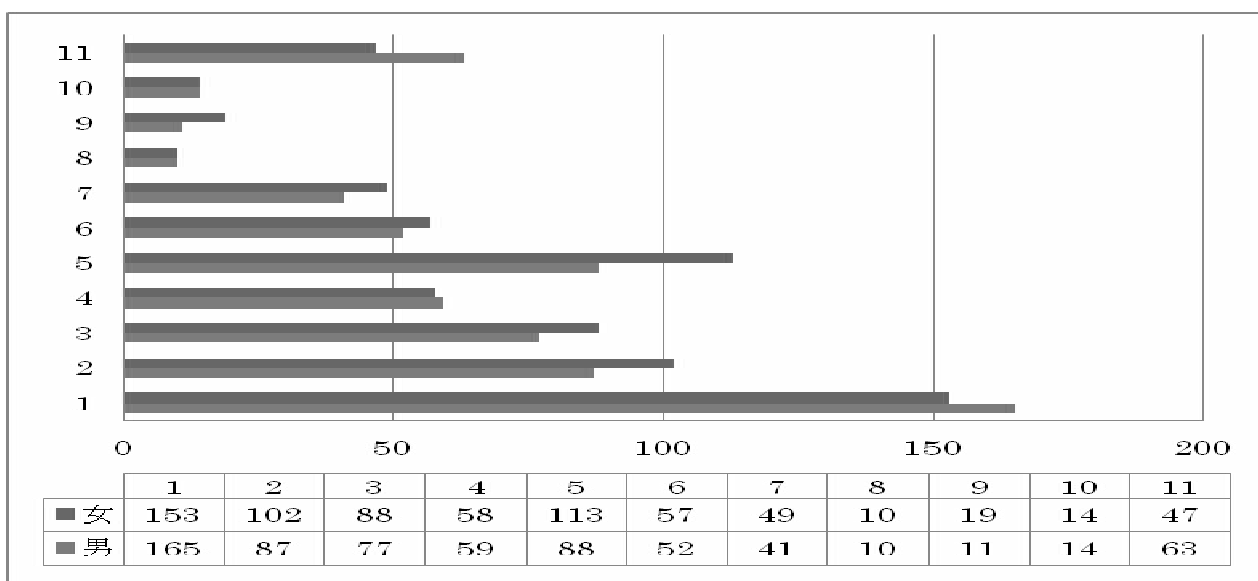
問26 あなたは、高齢者への総合的な生活支援の窓口である、地域包括支援センターのことをご存知ですか。（○は1つ）

- | | |
|-------------|------------|
| 1 よく知っている | 3 ほとんど知らない |
| 2 ある程度知っている | 4 全く知らない |



問27 今後、地域包括支援センターに力を入れてほしい事業は何ですか。（○は3つまで）

- | | |
|-------------------------------|--------------------|
| 1 事業内容の周知 | 7 介護予防のためのケアプランの作成 |
| 2 高齢者宅への訪問等による実態把握 | 8 高齢者虐待、消費者被害の防止 |
| 3 高齢者の一般的な相談 | 9 成年後見制度の周知と相談 |
| 4 認知症の相談 | 10 その他 |
| 5 病院や施設の入退院(所)に関する相談 | () |
| 6 介護予防の普及啓発事業
(健康教育、健康相談等) | 11 特になし |

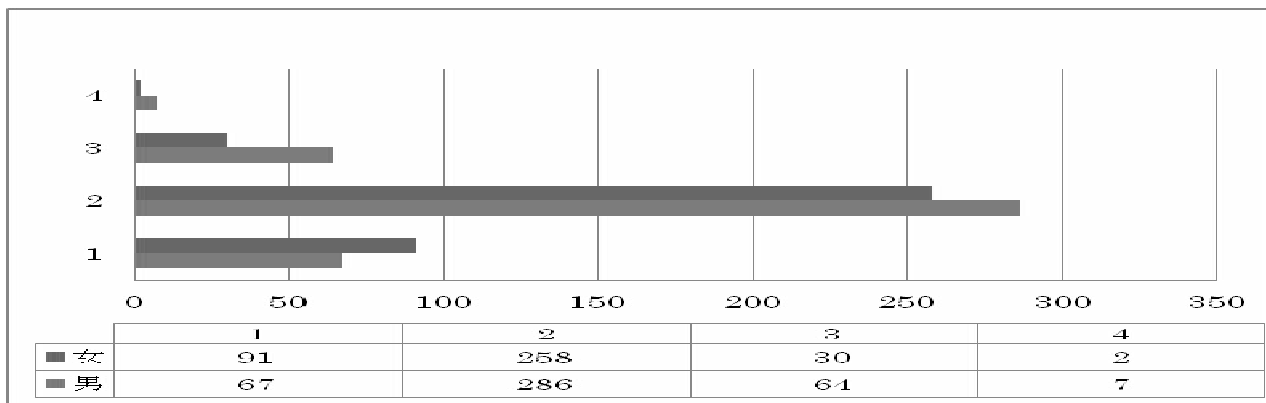


- 地域包括支援センターについて啓発活動が少ないために、知られていない。今後啓発活動が必要。村の直営のため、地域包括支援センターよりも役場の介護保険・福祉担当だと言う認識がある。

7 認知症について

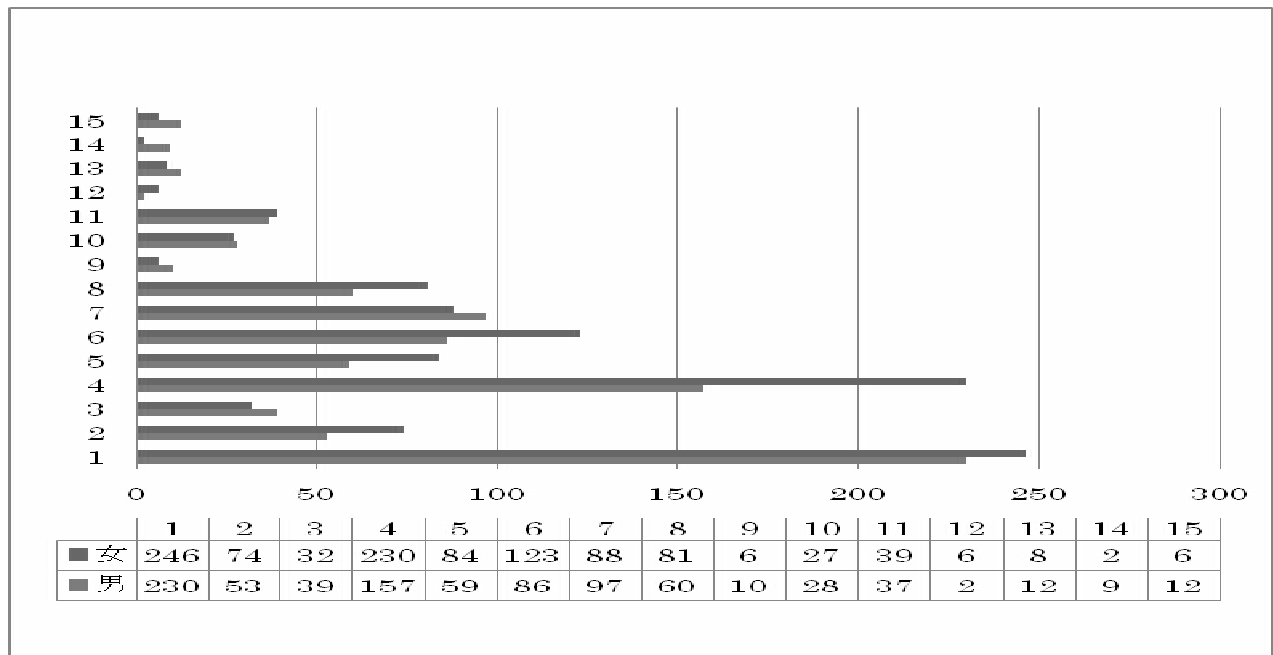
問28 あなたは、認知症という病気のことをご存じですか。（○は1つ）

- | | |
|-------------|------------|
| 1 よく知っている | 3 ほとんど知らない |
| 2 ある程度知っている | 4 全く知らない |



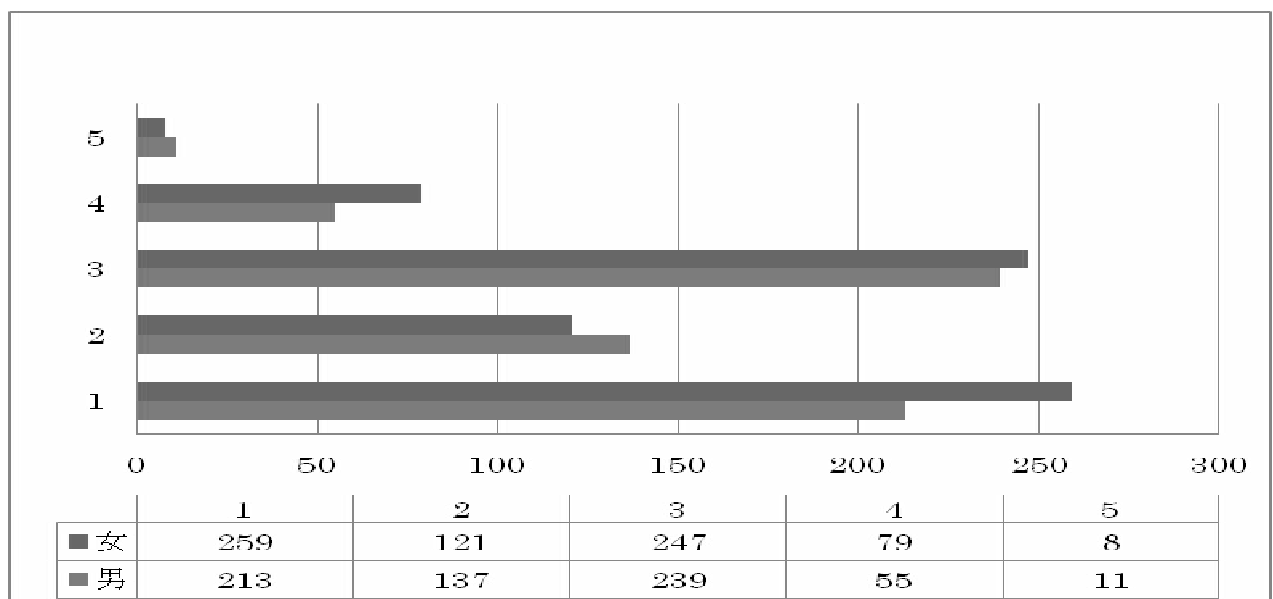
問29 身近な方に認知症の疑いがあるときに、どこに相談しますか。（○はいくつでも）

- | | | |
|------------|----------------|---------------------|
| 1 家族・親戚 | 7 精神科医療機関 | 12 認知症の家族会等ボランティア団体 |
| 2 友人・知人 | 8 地域包括支援センター | 13 認知症コールセンター |
| 3 民生委員 | 9 保健所の相談員 | 14 その他 |
| 4 かかりつけの医師 | 10 認知症疾患医療センター | 15 特に相談はしない |
| 5 ケアマネジャー | (老人性認知症センター) | |
| 6 村の保健師 | 11 介護サービス事業所 | |



問30 あなたは、認知症のどんなことに興味がありますか。（○はいくつでも）

- | | |
|--------------|------------------------|
| 1 認知症の介護の仕方 | 4 認知症の人や家族を支えるボランティア活動 |
| 2 認知症の医学的な情報 | 5 その他（ ） |
| 3 認知症の予防 | |



問31 認知症サポーター養成講座により、住民の方が認知症に関する正しい知識と理解や、認知症高齢者とその家族への支援などの知識を習得できるよう支援しています。あなたは、このような教室に参加したいと思いますか。（○は1つ）

■認知症についての関心が高い

認知症については、ある程度の認識はあるようだ。また予防策について関心が高く誰もがなりたくないという意識を持っている。

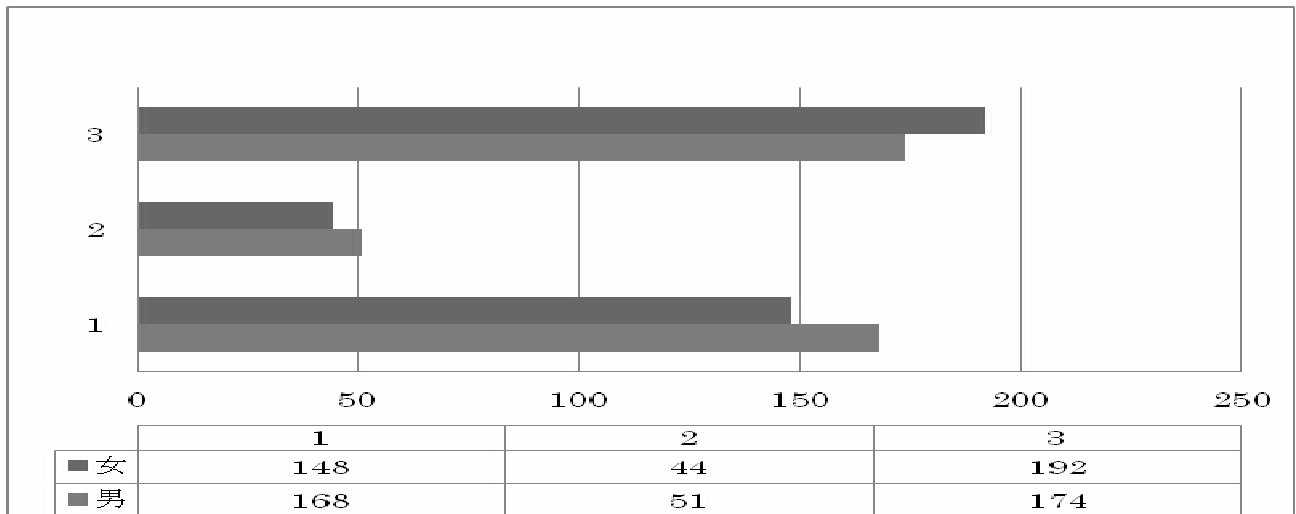
また、認知症についての理解について正しい理解をすることが大切だと感じている。

今後、認知症の支援について、啓発活動をすると同時に支える側の体制づくりも必要である。

8 高齢者施策について

問33 介護保険料は、介護サービスを充実させるほど高く、逆に保険料を抑えれば介護サービスの水準が下がるという関係にあります。介護保険のサービスと保険料の関係について、あなたのお考えに最も近いものはどれですか。（○は1つ）

- 1 介護保険サービスを充実するために、保険料が引き上げられてもやむを得ない
- 2 保険料を現状程度に維持することが重要であり、そのために介護サービスが削減されてもやむを得ない
- 3 わからない



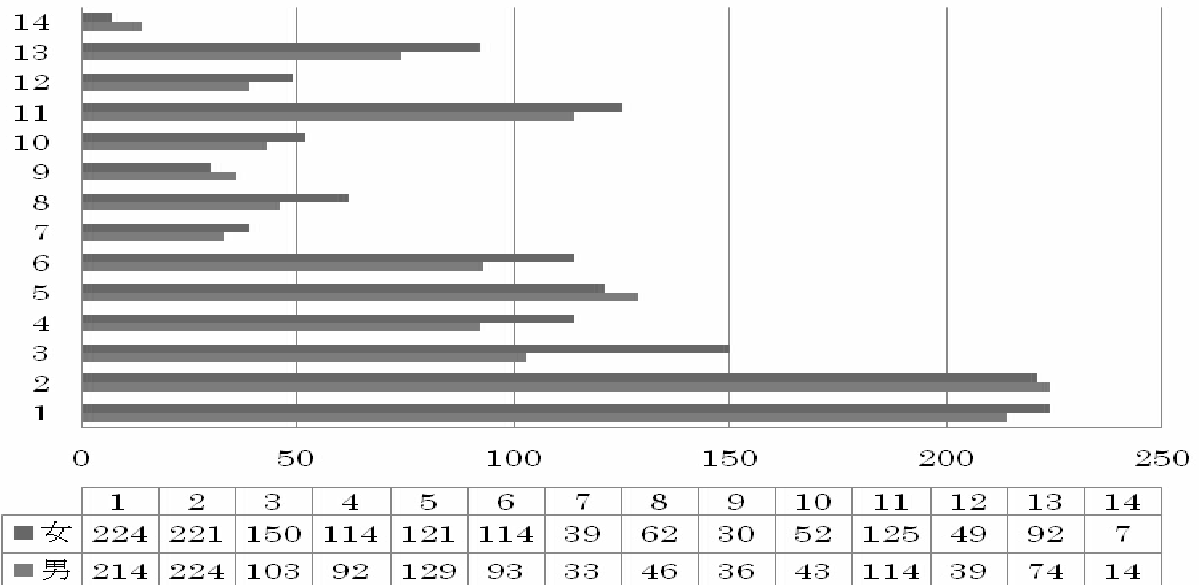
■介護サービスの必要性

介護サービスの必要性は感じ、介護保険料の値上げにはやむを得ないと感じている。

しかし、わからないと回答する方も多く実際にサービスを使う立場になったり、保険料が改定されないとわからないということが多い。

問34 行政に望む高齢者施策はどのような事業ですか。（〇はいくつでも）

- 1 介護保険の在宅サービス（ホームヘルプ、デイサービス等）の充実
- 2 介護保険の施設サービス（特別養護老人ホーム、老人保健施設等）の充実
- 3 30人未満の特別養護老人ホームや、5～9人の認知症グループホーム等といった、小規模な環境で介護サービスを受けながら共同生活できるサービスの充実
- 4 介護に関する相談や介護者教室の充実
- 5 介護予防（寝たきり予防、認知症予防など）事業の充実
- 6 外出支援（公共交通機関を利用する際の助成、移送サービスなど）
- 7 生活支援（具体例があればご意見・ご要望の欄に記入をお願いします）
- 8 健康づくりのための教室、健康相談の充実
- 9 健康診断や歯科検診などの充実
- 10 隣近所の助け合いやボランティア活動の育成や活動への助成
- 11 生きがいをもって活動できる場や働ける場の整備
- 12 世代間の交流事業や高齢者の知識や経験を伝える場づくり
- 13 認知症疾患医療センター等の専門医療機関の充実
- 14 その他（ ）



■介護保険のサービスの充実を希望

高齢者施策に臨むことは、介護保険サービスの充実を願う方が多く、介護になったときの不安がないようにすることが必要と考える。

9 その他自由に記載された内容

■介護保険制度、政策に関すること

- ・ヘルパーやデイサービス等の充実。
- ・在宅介護等の行政による支援体制づくり。
- ・介護施設を田舎に作って、都会のお金で都会の老人の終の住処をつくり、老々介護は田舎でやるようにする。
 - ・口腔内の衛生と歯の噛み合わせと全身の関係。施設で入れ歯(良い入れ歯をして早寝早起をした結果、小便のお漏らしがなくなったという結果があるらしい。予防に勝る治療はないので心がけ生活し医療費削減につながれば。
- ・介護保険料を引き上げず、お金の使い方を考え、無駄な税金を使わず、必要なところに使ってほしい。
- ・身内が認知症になった場合介護に時間を費やすようになるが、仕事や子育て、介護が重なった時に対応できるか不安。
- ・介護施設の充実も大切だが、これからの若い子供たちに背負わせるのもどうかと思う。
- ・介護施設は、老人にとって介護していただく場所であり、若者にとっては働く場所。循環してそれぞれの立場で生活が成り立つ場所を願う。
- ・各家庭を地域、行政が理解し(老人)本人、家族の気持ちを具体化できるサービスを望む。(本人の気持ち、希望が実現するように)
- ・高齢の親がいて、これから先病気やけがをしたときに自分一人では何もできないし、友人や兄弟に頼るばかり。その前に自分でも村の行政を活用できるか、時期を見て相談に行きたい。
- ・生きること、生かされることを間違わない介護が大切。
- ・同居の母が要介護状態になった時、私では体力的に介護が不可能。仕事もしなければならぬ。どうすればいいかわかりません。低収入の人でも日中だけでも介護してもらえ施設が欲しい。子供にも費用はどんどん掛かってくる。今後の為にも施設や補助の検討を。
- ・高齢者が増える中で施設が少ないのは不安。今のサービスのままでは頼りない。介護者の負担を減らし介護に対し安心し心強く楽しく介護ができるように。

- ・ショートステイ、デイサービスなどコストを低くし、前もって予定しなくても、月に何回でも、突然でも対応でき利用できるようにしてほしい。すぐに老人ホームに入れるようになってほしい。
- ・認知症の家族を抱えていても仕事を続けられるようなサービスの充実。
- ・認知症になる前から自分の意思表示をしておく。(延命治療や胃ろうなど)
- ・仕事をしながら在宅で介護が受けられるよう考えてほしい。
- ・介護していないのでわからないが、予防に力を入れてほしい。介護だけでなく自身の健康にも不安がある。病院のかかり方、見つけ方など苦労している。
- ・認知症に対する知識を深め偏見を持たれない社会をつくることが大切。
- ・村は高齢者にやさしいと思う。都会ではもっと厳しいと聞く。財源の問題等はあると思うが出来る限り低下することなく維持してほしい。
- ・介護が必要になっても支援を受けず重くなってから利用する方が見受けられる。高齢者世帯への情報発信など、落ち度無く取り組んでいただきたい。
- ・介護施設はプライバシーを守り、人間的な生活ができる施設にしてもらいたい。
- ・デイサービス(いきいき広場)は月一度。働かなければいけないので関わってあげたいのは山々だが出来ないのが現状。
- ・不自由を感じない施策や施設が必要。
- ・母が介護保険のデイサービスやショートステイで手厚いお世話をして頂きありがたいと感じている。国全体や地域ネットワークが取り組みを推進して頂くことを願います。
- ・在宅介護の場合はヘルパー、看護師の多くの手を借り、認知症の家族がいる場合、働いている家族には迷惑を掛けたくないなので毎日通所できる。
- ・学校のような場所、制度があればいいと思う。認知症の家族を持ったことがあるので、認知症の方をみて重くなってから手をさし延べるのではなく、軽い時からのケアが必要。どんな介護を受けるかはなってみないと分からないが…。
- ・義母の介護ではデイサービスを利用し、現在は特養にお世話になっている。定員数も認知症の母に合っていて、介護度が進んだ時には部屋まで迎えに来て頂き本当にありがたい。介護者だけが悩むのではなく一緒に考えて頂けて介護ができたことを感謝しています。
- ・介護が必要となりそうになった時、まずどこに、どのように連絡すればいいのか簡単なリーフレットがあればわかりやすいと思う。(例を2.3例あげて支援や認定までスムーズに)

ズにできるように)

- ・年金のみで生活し介護サービスが受けられるのだろうか。希望はたくさんあるがお金が無ければ何もできない。
- ・高齢者家族、一人住まいの家が増えて自分も一人になった時どのような生活になってしまうのかとても心配。
- ・施設は増えてきているが、まだまだ入所を待っている人が多いと思う。
- ・急に何かあった時に預かってもらえる環境を整えてもらえると安心できる。
- ・介護認定やサービスを嫌がり家族の負担は大きく精神的にも大変苦労されている人もいるので訪問される(有料で)回数を増やしてほしい。
- ・認知症になった人を家庭で介護することは家族だからこそ無理があり、介護する人、介護を受ける人が双方心穏やかに過ごすのは不可能と思われる。認知症の高齢者施設の充実を望む。
- ・現在介護の最中です。デイサービスやショートステイを利用して自分の気持ちを切り替えて母を見守っています。急な用事が出来たなどすぐ対応できるショートがもう少し増えてほしいと思うデイサービスの中にショートステイが出来たらいいと思う。
- ・いずれ介護が必要となった時は家族に看てほしいと思う。しかし家族の負担を思うと施設でお願いしたいが経済的に不安。長生きしても安心して住めるそんな村にと思っている。
- ・デイサービスに行っても自分にとって好きでもない事や、やりたくない事もあるのに無理矢理やらされるといった意見を聞く事があります。利用者同士では話ができず、スタッフの方たちも忙しそうのでゆっくり話を聞いてもらえない。行ってもつまらない、迎えに来て連れて行かれてしまうとの声も聞いた。これでは意味のない施設となっているのではないかと思います。一日を楽しく、また行きたいと思うところでないとだめだと思う。一人一人の意思を尊重できたらいいと思う。
- ・老々世帯や独居が増加すると思います。難しい面もあると思うがキーパーソンになる方に元気なうちに介護教室を開催したらどうか？
- ・介護の学習会など勉強会があったらいいのかなと思う。
- ・今の高齢者は幸せ、今後はもっと厳しくなる。負担を軽くし少ないサービスで家族に迷惑はかけたくないと思う。
- ・個人に合ったきめ細やかな対応ができる施設や施策の充実

- ・徘徊の恐れがある人に小型のGPS（ペンダント、時計型）を装着させて、万が一の時はリアルタイムで居場所を確認し保護できるようなサービス（24H 対応）（CATV+ハイヤーでもできるし引き受けなければ個人会社でもできる）基本料は安くして出動料金はそれなりにすれば成立する。
- ・困った時に相談がすぐできる（休日、夜間含む）体制の充実。

■生活の支援に関すること

○交通施策・買い物支援について

- ・公共交通機関は料金が高い。ハイヤーなどに補助をして高齢者や一人暮らしの“足”を充実させる。
- ・運転ができなくなった時の生活に不安。外出支援、生活支援等の充実を望む。
- ・高齢者や障害者の送迎タクシー等の低額制度は有り難いので無くしてほしくないし、さらに可能な限りの低額への改良を。
- ・デマンド交通はあるが、大型スーパーへの送迎がなく高齢者の買い物が大変。
- ・車での生活用品や食品の移動販売、移動式ATM など考えてほしい。スーパー等へマイクロ送迎も良い。
- ・運転できない人にとっての外出支援はとても必要。人数に応じた割引や生活困窮者への割引パスなどのサービス、ボランティアや仲間同士での移送シスムの構築、気軽にお願いできるようなシステムなどの体制づくりが必要。
- ・運転できなくなった時に、デマンド交通だけで通院できるのか不安になり考えることがある。
- ・交通機関もなく店舗もない。農業もやっていなくてすべて購入しているので、運転ができなくなった時どうなるのか。と常に不安を感じています。商業施設が近くにあれば一番良いと思うが不可能に近いのでボランティアや支援を受けやすい村になってほしい。
- ・デマンド交通を利用しやすくすることが必要。定期バス、安い運賃の路線バスなどが村内の温泉、公共施設や商店で停車してくれると買い物もしやすい。

○その他の支援

- ・介護保険サービスだけでなく、村や地域でできる事（ボランティア等）を実

践してほしい。介護保険サービス以外でもやってほしいことはたくさんある。

- ・介護者の負担が減り、仕事や精神的な影響も少しは軽くなるのではないか。
- ・生活支援、栄養のバランスのとれた弁当の宅配サービス(三食)
- ・村内に食料品を買う店が減り、外出や買い物が心配。老人向けの弁当や給食の宅配が毎日あったらいい。(デイサービスの昼食を希望者に届けるなど)。
- ・低塩、高たんぱく、低カロリーの高齢者向けの向上的でリーズナブルな食事の宅配サービスがあったらいいなと思う。自分自身が最後まで人に甘えることなくやっていくという心構えが必要だという事を周りのお年寄りから学ばせてもらっていますが、それでも高齢になり弱者になった時その立場を理解した施策を望みます。
- ・洗濯、掃除、ゴミだし等、細々とした日常に必要なことを家族の有無に関わらず利用できるものを。
- ・高齢者支援には行政、社協、地域等の連携が大切。
- ・介護保険サービスだけでは困難なため村独自の支援が欲しい。

■健康づくり・介護予防に関すること

- ・寝たきりを予防するためのスポーツ施設等の充実。インストラクターつきでプール、ジム等無料または低価格で利用できる施設を村営で運営していただきたい。
- ・健康に気を付けている人への優遇制度を導入すべき。薬漬けの医療を辞めるべき。
- ・体を動かせる所、軽スポーツのできる場所(ジムなど)を作してほしい。
- ・ふう太ネットを利用した高齢者施策や健康づくり施策等の紹介、職員の紹介を含め放映したらどうか。事業に携わっている方を知らない村民が多い。メディアを活用し全職員の紹介を。
- ・保健医療、福祉の施策が重要。行政の高齢者政策を一段と展開してほしい。
- ・高齢になり、少しでもお世話にならないようにしたい。
- ・年を重ねるごとに将来は不安と心配はつきもの。健康維持に体力づくりや前向きに努力したい。
- ・高齢者や一人暮らしの人を区の分館等を集めて、介護予防や認知症予防プログラムを推進するような事業。単純に分館単位でのネットワークづくりなどでも効果はあると思う。

- ・健康で長生きするための介護予防に力を入れるべき。高齢者が一人で生活することのないようみんなで考えていくべき。
- ・健康寿命を延ばし、少しでも長く自立生活ができるように、年間を通して馬曲温泉行の福祉バスが必要だと感じる。温泉で健康、生きがいをづくりをして軽体操や趣味活動(カラオケなどの音楽活動、手芸など)、文化的な内容(詩、俳句、短歌など)ができて、温泉で交流を深められたらいい。
- ・高齢者のロコモティブシンドロームを避ける「動き」をつくる。動きたくなるような、動きたくなることが大切。今日「用事に行くところ、行けるところ」があることが大切。
- ・趣味活動も盛んになると共に動きが増える。コミュニティーを高める対策が必要。いきいきと楽しい生活ができる村づくりが健康づくりにつながっていく。買い物難民をできるだけ少なく健康を自分で守れる村づくりが求められる。
- ・健康は自分で作るもの
- ・義母が入院し、その間に認知症の症状が現れたが看護師たちは忙しく頼れなかった。病気にならないのが一番だと強く感じた。
- ・食べ方の順番(野菜から食べる等)、血圧測定、体重測定を自分ですることで病気の人が減ったと聞いた。行政からの指導という事なので村でももっと力を入れていただけるといい。
- ・運動のできる場所、トレーナー、器具などを設置してもらいたい。
- ・健康寿命、ただ寝たきりで長生きするのはどうかと思う。早い段階から皆で考えていけるようにしてほしい。
- ・なるべく回数を抑えて健康づくりをお願いしたい。
- ・若い時から健康に暮らせる村づくりを。
- ・60歳以上でも働ける職場づくり(シルバーでなく)、村の特産品づくり等、60歳を過ぎても働けて収入もあり、自分は必要とされている自覚があると思われる。高齢になっても認知症や介護の必要ない道なのかなと思う。行政で病気の無い健康づくりの取組みの一環として考えてほしい。
- ・年齢や体力に合った運動教室が必要。定期的に楽しく行う。
- ・パノラマランドにスポーツジムをつくり、若い時から運動や健康に気を付ける習慣をつける。スポーツジムで運動した後、温泉に入って汗を流すことができたらいと思う。
- ・足、腰が痛くなると歩くのも困難になってくる。リンパビクスのようなあまり負担の

ない教室を開いてほしい。

- ・高齢者施策や健康づくりには興味があり、役に立てれば。
- ・予防対策に力をいれてほしい
- ・認知症になったらどうするかではなく、ならないようにすることが大事。
- ・ボランティア＝¥0 は限界があり、自治体がそれに頼っているといつか崩壊すると思う。もっと「民間力」を活用すべき。
- ・国の予算のかなりの部分が老齢年金と老齢医療。老人になってからでは健康のことを考えても遅い。年金医療にお金がかかる原因(タバコや酒)となるものを禁止すべき。

■生きがいや集まれる場所の確保

- ・けがの予防(腰、足、膝、肩等先決)。予防、喋り、笑い、感動できればぴんぴんころり間違いなし。そういう場所の提供やアイデアが必要。年寄りの元気村→子供たちの元気(子供と年寄りの運動会、農園づくり)
- ・お茶のみサロンのような場を増やしてほしい。サークル、クラブ活動、団体活動など知る機会があまりないように感じる。興味や関心が持ちにくい。定年退職した方も入れるような工夫もほしい。
- ・趣味活動のプログラムを多数用意し、年代ごとに分かれて参加したい。
- ・冬期間の高齢者の一人暮らしは人と接することが少なく、不安になる人もいるので、福寿苑のような居室を希望する人も今後は増えると思う。希望者には入居できる体制を。(民宿などの活用も)
- ・出掛けること(お茶のみ等)がおっくうになり、話をする事が少なくなり TV を見ながら寝転がっていることが多い。このような高齢者がどのようにしていけばいいか考えてしまおう。
- ・元気な 60～70 代の健康維持や、団塊世代の力、活動の場がほしい。
- ・各地区の出前サービスのような活動を活発にし、老人が孤独にならないよう人と関われる機会を作るようにできたらと思う。会話することは刺激になり何より楽しく学ぶこともあり誰でも必要なことだと思う。
- ・社協のふれあいサロンの支援(充実、資金援助)をしてほしい。
- ・女性より男性の一人暮らしは高齢になると出かけることもできなく不安感や寂しさを

抱えているので、希望者には話し相手ボランティアをお願いしたい。またヘルパーもなるべく話しかけを心懸けてほしい。

- ・身近な寄り合い所をどのようにしていったらよいか良い方法をみんなで考えていけたらと願う。
- ・「いきいき広場」参加人数が減少している。健康づくりに力を入れてほしい。
- ・「ふれあいサロンボランティア」で計画しているが負担になってきている。
- ・一人暮らし、要支援者、老人世帯への見回りや声かけ、相談等多くしていきたい。
- ・元気な高齢者を活用する仕組みが必要ではないか。何かをやってみたいが何をしていいかわからないという人が多いと思う。
- ・高齢者、子供たちが交流できる場所を。
- ・年をとってもできるだけ自分でできる事を維持し生きる楽しみ、喜びを持って過ごせる地域社会を作っていけるといいと思う。
- ・働ける人は少しでも生甲斐を持って人の役に立つ仕事を手伝ってもらおう。(若者の世話になるので、年寄りもできる事はやって生涯を終えるプロジェクト)

■その他

- ・障害者三級の立場で高齢の母もおり障害者年金、国民年金をもらっているがいずれ一人になり、障害者となる前の厚生年金をもらえる年になった時に、国民年金・障害者年金どちらか選ばなくてはいけない。国民として厚生・国民年金は支払ってきたものの何とか厚生・国民年金にプラスして障害者年金を受け取りたい。
- ・少子化高齢化はますます進むが、村民一人一人知恵を出し話し合い、よき村になってほしい。
- ・社会的弱者が笑顔で過ごせる地域、国であればと願う。
- ・弱者への対応には気力体力が必要。職員数の確保、困難事例を一人で抱え込まない体制づくりを。若者には経験を積み、心からの対応ができるように。
- ・第三セクターの事業等を充実させ若者の村移住を促進させ高齢者比率を下げ安心して生活ができる環境づくり。
- ・高齢者が邪魔にならず、(高齢者の)知恵が生かせ、出歩ける安全な村(どこへ行っても年寄りが歩け、道路も安全)

- ・人口の多いところにいると多少安心感があると思うが、山間の家屋が点在するような所に住んでいると、高齢になると住めないと感じる。
- ・何歳になっても働き続けられる場所の整備
- ・コンサートや文化的な施設の充実、雪対策など充実。安心した老後を過ごせる村であってほしい。
- ・具体的な対策と共に若き担い手が村に残れるような、生涯働いて家族を養っていける環境づくりも大切。老いも若きも入り混じって賑やかに暮らせる村を。
- ・最後はどうしたいかはっきりさせておくことの大切さ、知恵を出し合いたい。
- ・(問 33 介護保険料について)全部やって頂ければいいと思える施策ですが、参加したり、意識認識をあげるための施策がなかなか難しい。依存するだけの施策ならなんでもお願いしたいのが現実。
- ・働いているので村の活動に参加できない。若い時は仕事が終わってから夜は活動に参加したが、今は疲れて夜出掛けるのもおっくう。
- ・多くの人実態をどこまで把握できるか難しいところですが、村民の生活向上を考えた場合それが最も重要です。近くに住んでいても顔を見ない、話をしないなどよく聞きます。なるべくきっかけをつくりつまらない話でもいいからしたいと思う。
- ・亡き義母の時は在宅介護で大変お世話になりました。健康には気を付け毎日楽しく過ごせるよう心掛けていこうと思います。できる事があれば手助けになるようなことがあれば協力していきたい。
- ・家には脳卒中の後遺症を残す夫がいます。今のところ自分の事は自分でできる状態で助かっているが、いずれは重くなることも考えられるので、その時は家族で話し合いお互いにいい方向に持っていきたいと思う。

■住民意識調査まとめ

40歳から65歳の住民意識調査から、地域の社会参加活動への関心があまりうかがえない。

また、助け合いの基本は家族から、そして親戚からとなっている。

現状では、最初に隣近所への助けを求めるという人が少なく、隣近所のつながりが希薄化していることがはっきりと出ている。

その反面、最近では災害が多発している状況から、緊急時には隣近所に助けを求める傾向にある。

また、日常生活では手助けしてほしいことの中には、移動支援や買い物、掃除・洗濯などの支援もほしいと感じている。

これに対し、緊急時や災害時、定期的な声掛けなどには、積極的に支援できると回答している人も多い。

他にも支援できることはいくつか挙げられている。なかでも女性は買い物や外出支援・生活支援についてもできると回答した人が多くみられた。

支援できる人がいるということは、今後高齢者世帯や独居老人世帯等の生活において不安の解消にもつながるといえる。

高齢者等が住み慣れたこの村で、可能な限り在宅で生活していくためには、今までのサービスを利用するとともに、新しい生活支援のサービスも必要になっている。

住み慣れた環境の中で、農作業は年齢が高くなるほど行っている状況が多く見られ、定年退職後に本格的に取り組んでいる場合も多い。

健康のために農業をやっている人も多く、農作業により健康を保っていると感じていると思われる。

このようなことから、農作業等を取り入れる活動が健康状態を保持するに役立っていると考えられる。

イ 住民聞き取り調査（高齢者へのヒヤリング）

◇調査対象者 介護予防事業（地区出前デイサービス）参加者
6地区 70歳代～80歳代・男女50人

◇調査内容 高齢者の農業への関わりについて意見を聴くとともに、また高齢者の活動する場について日頃感じていることや生きがいについて等聴き取りを行う。

地区出前デイサービス 「いきいき広場」

- ・ 住み慣れた地域の仲間との交流や、居宅外での活動をすることで、生活習慣を活動的なものに変え、認知症の発症予防や軽減、寝たきり・閉じこもりの予防を図る。またそれにより生活機能全体の向上を図り、個々の対象者が居宅において、いつまでも健康でいきいきとした生活を続けられるよう支援する活動。



生きがいづくりのモデルとして「いきいき広場」で干し柿づくりを実施

- ・ 現在、村内各地区分館で活動を行っており、いかに長く介護保険のお世話にならずに健康でいられるように努力している。
しかし、70～80代の高齢者については、まだまだ現役で農作業に活躍している方も多く、夏場の参加者が少なくなることもある。

調査の内容

■農作業への意識について

問1 どんな気持ちで農業をやっていますか？

回答

- ・健康維持のため
- ・生きがいのため
- ・家にいるだけでは退屈なので気分転換のため
- ・その時々、時期の作物を作るのが楽しみ（毎年作っていても同じものができるわけではないから）
- ・土いじりが楽しい
- ・草取りをした後きれいになり気持ちもすっきりする
- ・畑の作物に話かけながらやっていることが楽しい
- ・離れている（一緒に住んでいる）子や孫の食べさせるのが楽しみ。
- ・近所の人と物々交換するのが楽しみ
- ・田畑を荒らしたくない（あるから仕方なく）
- ・若い人はみんな働いていて大変だから、頑張ってやっている

問2 農業をやっていて良かったと思うことは？

回答

- ・毎年出来具合が違うので楽しみだ
- ・自分の作ったものは安心して食べられる
- ・「日曜百姓隊」仲間で行っている
- ・作物がよくできると良かったなあと思い、失敗すると今度頑張ろうと思うそれが張り合い

問3 農業をやっていない人はいますか？

回答 50人中1名

- ・虫が嫌い
- ・野菜は買えばいい（高齢者だけなので少量買えばいいから）

*農業についての意識については、「生きがい」

先祖から受け継がれてきた土地を大切に守っていくことは言うまでもなく、受け継いできた田畑を通じて農作物を育て、健康維持のため、子や孫に食べて喜んでもらうために行っている。それを生きがいと感じている。

■生きがいについて

問4 あなたの生きがいは何ですか？ありますか？

- ・ 隣近所でお茶のみが楽しい
- ・ 生きがいは、自分で計画を立てて次々と農作物を作っていくこと
- ・ いろいろ農作物で作ったものがうまいくこと
- ・ そば打ち
- ・ 仲間で米づくり
- ・ 卓球
- ・ 花づくり（家の周りを花でいっぱいにする）こと
- ・ 大正琴
- ・ 同じところに結婚した人で集まりお茶のみ、年に1回温泉やおいしいものを食べに行くことが楽しみ
- ・ 何もしていないと疲れてしまう。畑に出て作物といると一日が過ぎてしまうそれが生きがいというのかな
- ・ とにかく自分なりに体を動かしていること。
- ・ 特に生きがいとだと感じてないが、健康でいられること
- ・ 毎日畑へ行けること
- ・ 花で家の周りがきれいにすること
- ・ 若い人に迷惑かけないようにいつまでも元気でいられること
- ・ マレットゴルフ

「生きがい」は「健康でいられること」

生きがいについては、様々であるが何よりも健康であることを感じている。そしてその手段として運動等もあげられるが、農作業を通じてという方が多い。

農作業を通じて土から匂いや、自然の空気に触れることで気分転換や心身のリフレッシュとなっている。

また、農作物の生育過程を観察し収穫することで喜びを感じ、四季折々の自然に触れること、それぞれの季節に合った作物を作ることにより、季節感を味わっている。

また、毎年同じことの繰り返しである農作業でも、農作物の出来具合が違うため、常に新鮮に感じ毎年の励みになっている。

その他

■現在抱えている問題

問5 今困っていること不安なことはありますか？

- 回答
- ・冬の除雪が大変だ
 - ・みんな忘れてしまう
 - ・若い人たちは畑には全然行かない。自分たちがやらなくなったら、農作業はやらないだろうな
 - ・病気になって入るところがあるか心配
 - ・病気になったら不安（車の運転ができないから）
 - ・交通が不便（医者に通う手段が少ない）
 - ・車に乗れないのでデマンド交通を利用しているが、夕方4時以降がないので不便
 - ・車の乗らなければ動きが取れないから、80歳過ぎているけど車の運転をして買い物に出かけている
 - ・年々体力が衰えてきて心配

■介護状態になったとき

問6 自分が介護状態になったとき施設に入りたいか、家で面倒を見てほしいか？

回答 家にいたい気持ちはあるけど、施設に行きたい（女性のほとんど）

理由：自分のことは自分でできるうちは家にいたい。でもできなくなったら家の者に迷惑をかけたくないし、家の者にはつい無理を言ってしまう、怒られたり、お互い気持ちよくできなくなったりするから。施設の人なら仕事だからよく面倒見てくれるから。

■その他の意見

- ・村民の意識改革が必要。健康であることの必要性を感じる
- ・80歳になってもスキーをやろうと思っている。せっかく雪があるのだから
- ・みんなでなんかやろうとする気持ちが大事
- ・村民が健康に対する意識や介護に対する意識改革が必要。（健康でいることが大切。介護を受けないようにする気持ちが大事）

■地区出前デイスサービス「いきいき広場」について

- ・とても楽しみ
- ・冬場は月2回やりたい（夏場は農作業で働いているので）
- ・年齢の高い人（90歳代）と、まだ、まだ現役で働いている。（80代前半）が同じでは無理があると思う。
- ・他の地域の人と交流できたらいいと思う
- ・花壇づくりなどやれたらいい

■今後「いきいき広場」の活動として取組可能なもの

- ・干し柿づくり
- ・切り干し大根づくり
- ・凍み大根づくり
- ・花壇づくり



コーディネーターが必要



ヒヤリング調査まとめ

今回のヒヤリング調査から、木島平村の高齢者は、豊かな自然の中で人とつながりを持ちながら、農作業を、苦勞だとせず日々作物づくりを通して張り合いを感じている。

そして、ただ何もしないでいると疲れてしまうと感じ、何かしら動いていることがわかり、このことにより健康な心身を養っているのだと感じました。

今後、ますます高齢者の活動について、野菜づくりや花づくりなどを推奨することはもちろんですが、高齢者が持つ豊かな経験と知恵を、そして地域がもつ助け合いを見直しながら、生まれ育った農村環境を活かした健康づくり活動につなげるとともに、若い世代にも農村環境がもつ利点を継承していくことが必要であると考えます。

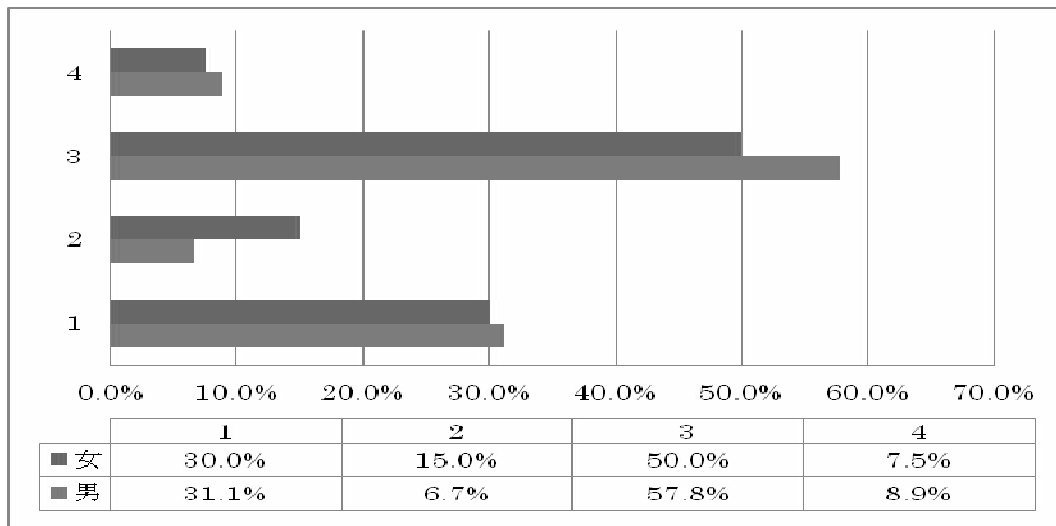
ウ 村民意識調査（20 歳代～30 歳代）

木島平村社会福祉協議会が 1,550 世帯にアンケート調査を行った結果で、その中で 20 代、30 代の方のアンケート回答データです。

（男性 20 代－10、30 代－35 女性 20 代－5、30 代－35 の計 85 の回答データ）

問 1 ご近所と、どの程度のお付き合いがありますか。

1 困ったときに相談したり、助け合える人がいる 2 家を行き来する人がいる 3 会えば、立ち話やあいさつをする人がいる 4 ご近所とはあまりつきあいがいい

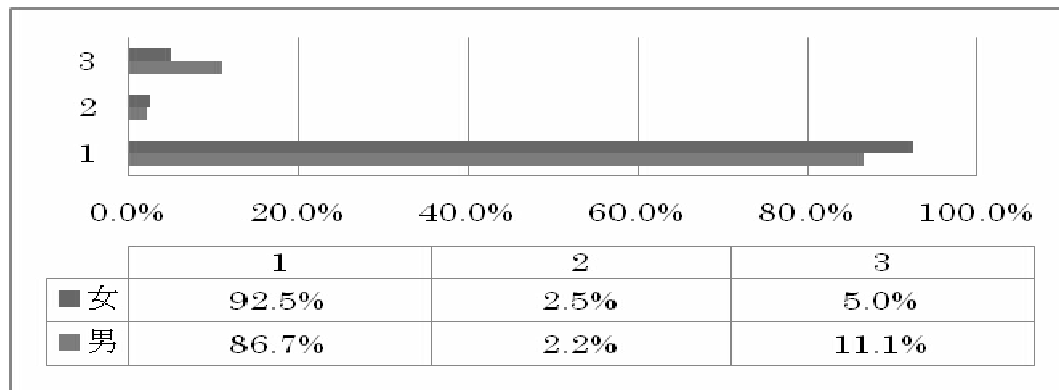


■若者の間にも人と人とのつながりはもてている

近所の付き合いが面倒だと感じていると思うが、それなりに困ったときに相談したり、助け合える人がいたり、家を行き来したり挨拶も交わせる体制はできている。

問2 地区の行事などへの参加状況。

- 1 参加している 2 以前は参加していたが現在はしていない 3 参加したことがない



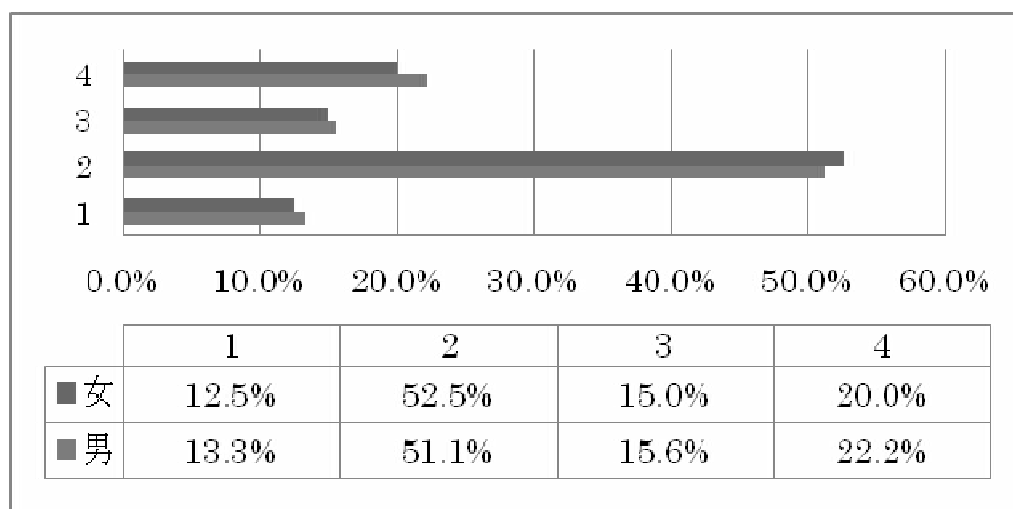
■地区行事へは積極的に参加

ほとんどの人が地区の行事には参加している。

地域の中での若者の存在は大きい。

問3 あなたが思う地域の範囲は。

- 1 隣組単位 2 区 3 穂高・往郷・上木島 4 村

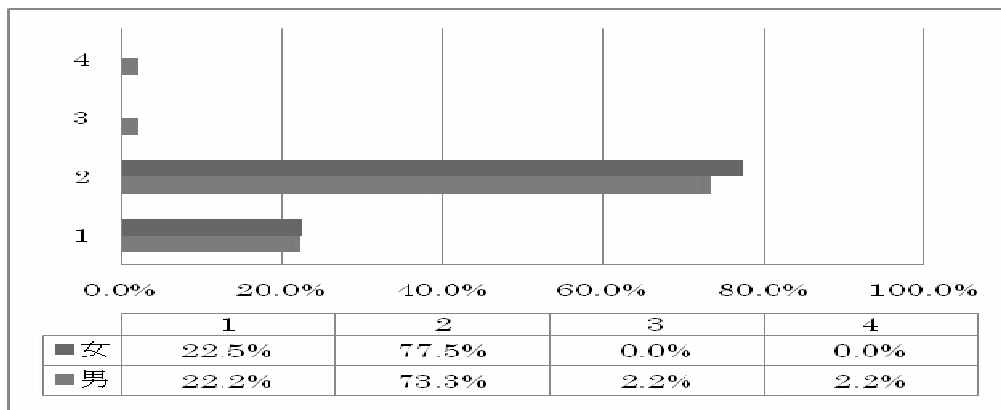


■若者にとって地域は地区

区の組織を地域とし括り、地域の活動は区の活動しているということになる。

問4 地域の助け合いは必要だと思いますか。

- 1 かなり必要 2 ある程度必要 3 あまり必要ない 4 全く必要ない

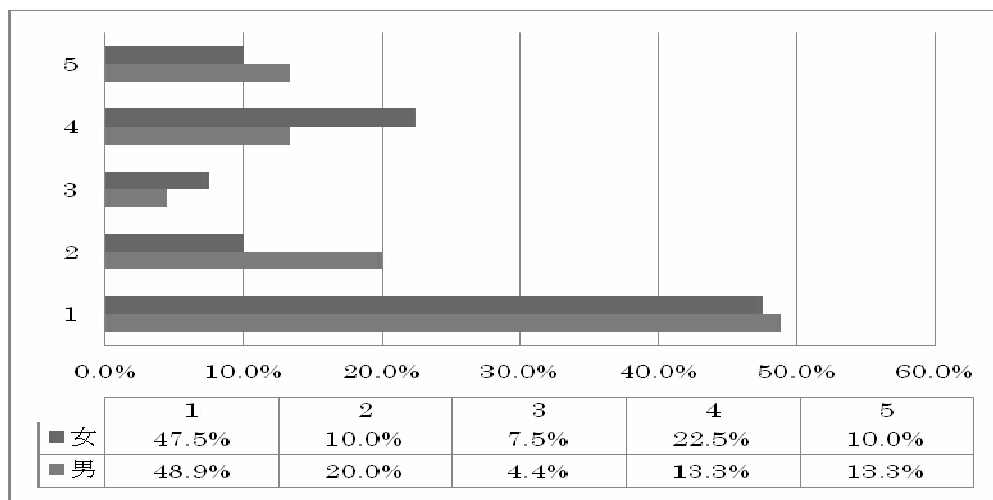


■地域の助け合いは必要

若者にとっても地域の助け合いの必要性を感じている。

問5 昔と比べて、最近の近所付き合いは希薄になってきていると言われていますが、このことについてどう思いますか。

- 1 時代の流れで仕方がない 2 希薄でも不自由していない
3 もっと親しい交流が必要 4 今以上に希薄になっては困る
5 わからない

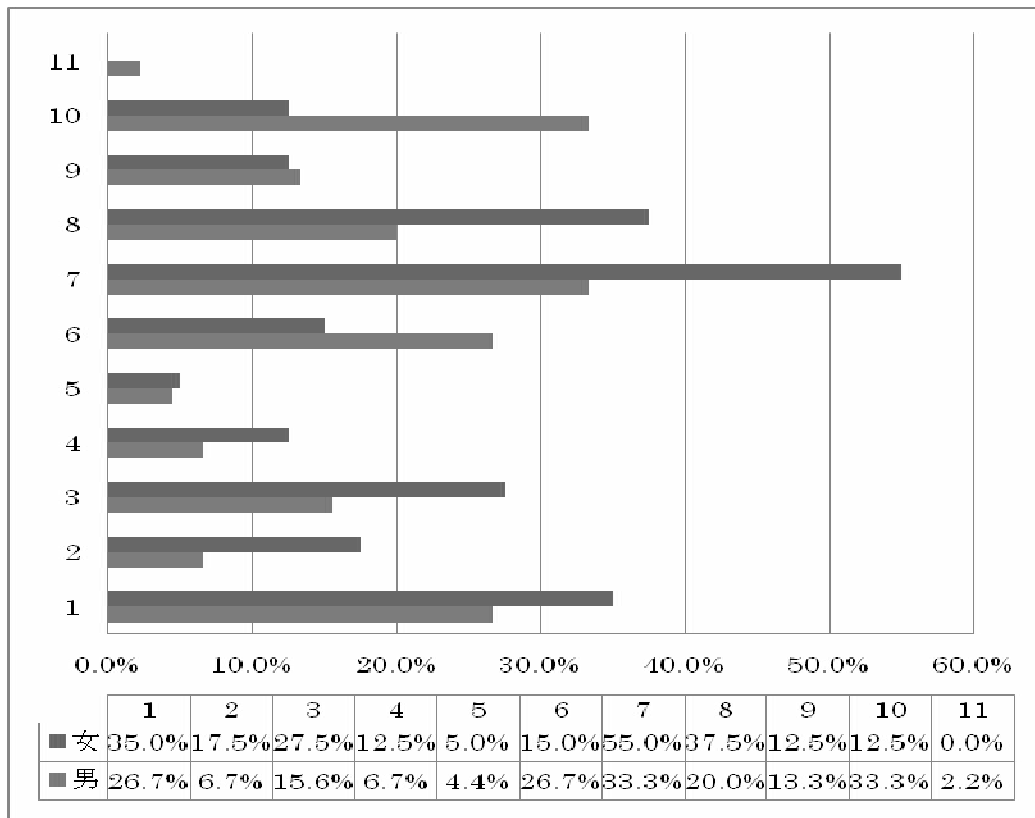


■近所づきあいの希薄化は時の流れ

時代の流れで仕方ないと感じているが、これ以上希薄化が進んでは困ると感じている。

問6 あなたの毎日の暮らしの中で、困っている事、不安に感じていることを教えてください。

- 1 自分の老後 2 自分の健康 3 家族の健康 4 家計の関係
5 親戚や地域との関係 6 仕事やいきがい 7 生計や暮らしぶり
8 子育て 9 環境 10 災害 11 その他



■不安なことは生計や暮らしぶり

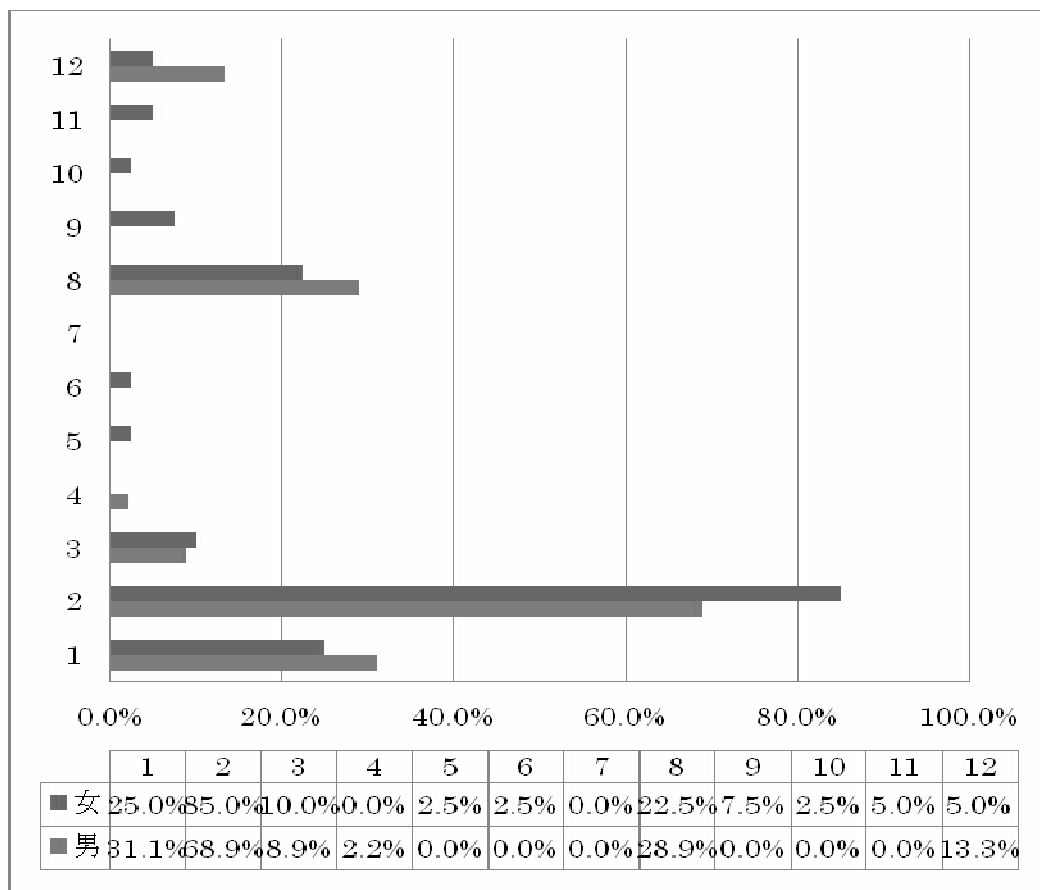
男性の多くは生計や暮らしぶりに不安を感じているが、次に不安に感じていることは災害。

女性の場合は、生計や暮らしぶりに不安を感じている次は、子育てについて、やはり子育ての主は女性であるため、不安感が強いようだ。

また、若いうちから老後のことを不安に感じている方も少なくはない。

問7 あなたは、困りごとや心配ごとがあった時、家族以外のどこに相談しますか。

- 1 親戚 2 友人 3 隣近所 4 地区の役員 5 民生児童委員
6 役場 7 社会福祉協議会 8 職場 9 学校 10 警察
11 その他 12 特にない



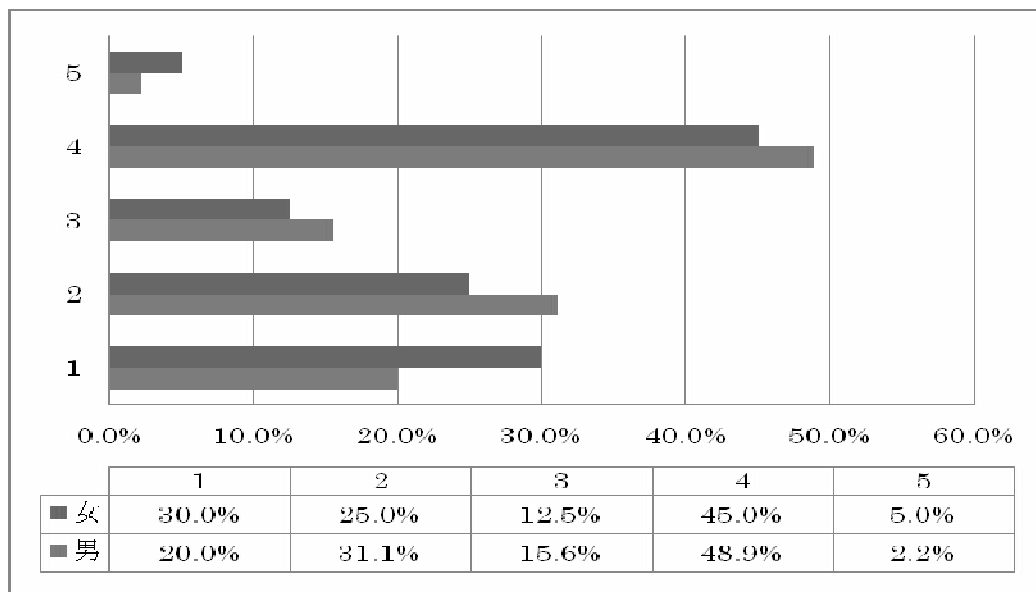
■若者は友人が大切

若者は、困ったことがあれば直ちに隣近所ではなく、友人に相談するが最も多く、ついで親戚・そして職場。

昔から村にいる友人が大切となっている。

問8 村民がお互いに力を合わせて、住みよい地域を築いていくうえで、問題となることは何だと思いませんか。

1 近所付き合いが減っていること 2 日中、地域を離れている人が多いこと 3 経済活動が全てに優先されること 4 価値感や生活様式の多様化 5 その他

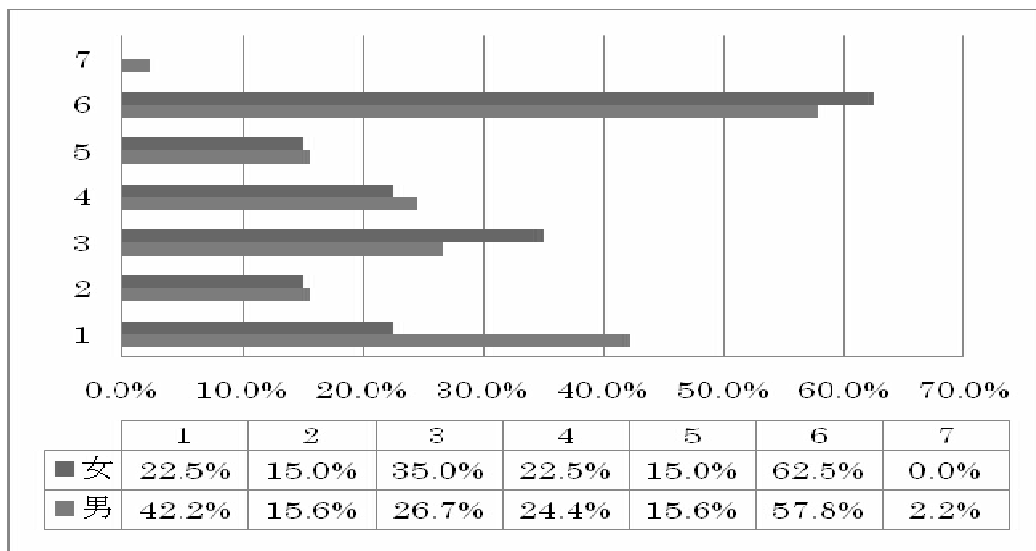


■価値観の違い

価値観の違いや生活様式が違っているので、住みよい地域を作ることが困難だと感じている人が多い。

問9 あなたは、区や隣近所の役割についてどのようなことを期待していますか。

- 1 ゴミ収集などの日常生活における協力体制 2 話し相手など、日常的交流 3 教育や子育て支援 4 行政からの連絡事項の伝達
5 お年寄りの世話などの相互扶助 6 災害や緊急事態が起きたときの支援 7 その他



■隣近所の助け合いは必要

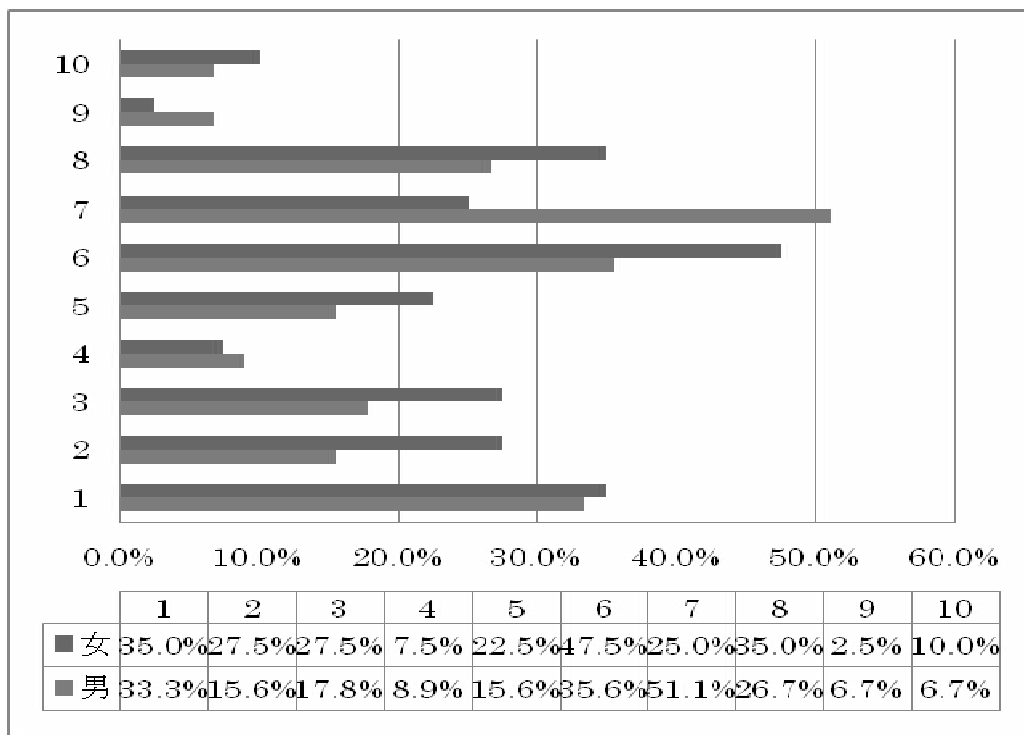
災害や緊急時には隣近所の助け合いが必要と感じている。

これは若者だけでなく感じている事である。

有事の際を考えると、隣近所の助け合いが必要であると感じている。

問10 近所の1人暮らしの高齢者や高齢者世帯のために、あなたはどんな支援ができますか

- 1 ゴミ出し 2 買い物 3 薬をもらいに行く 4 外出時の付き添い 5 車の運転 6 話し相手 7 雪片づけ 8 見守り
9 その他 10 できない

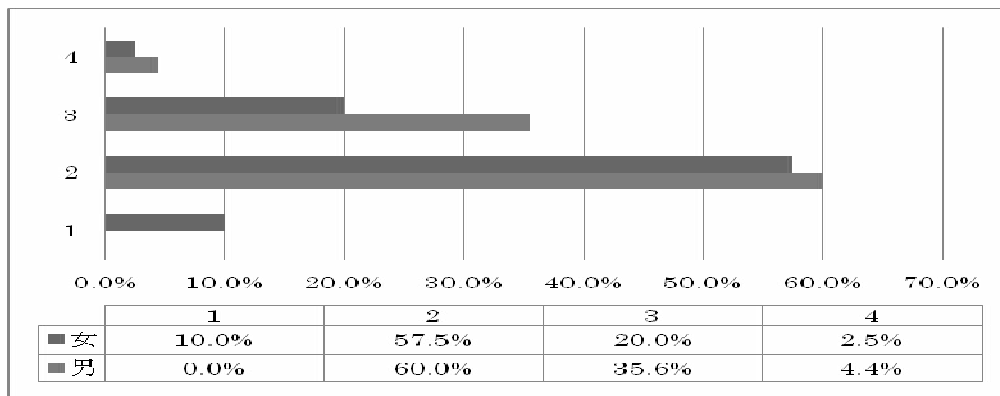


■支援者はたくさんいる

支援の形はいろいろであっても、支援できると回答している方が多くあり、自分が行う作業などのついでにという支援については抵抗感がなく、何かの形で支援できると感じている者が多い。

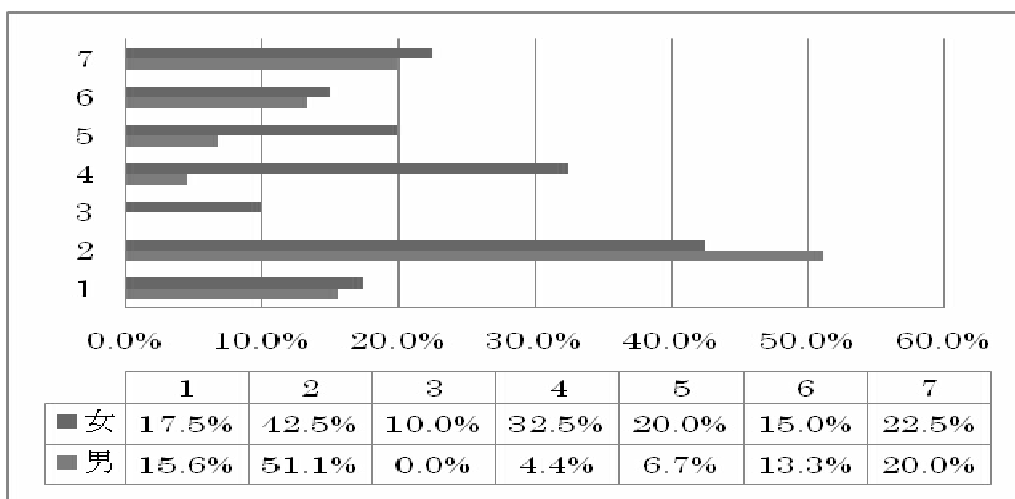
問11 あなたは、社会福祉に関心がありますか。

- 1 かなり関心がある 2 まあ関心がある 3 あまり関心がない
4 まったく関心がない



問12 あなたにとって、「福祉」とは、どのようなことだと思いますか。

- 1 みんなが幸せを実感する事 2 暮らしやすい社会を築くこと
3 経済的に困っている人を援助すること 4 身体面での援助をすること
5 精神面での援助をすること 6 援助の施設や制度を整備すること
7 人と人との関係をつなげること



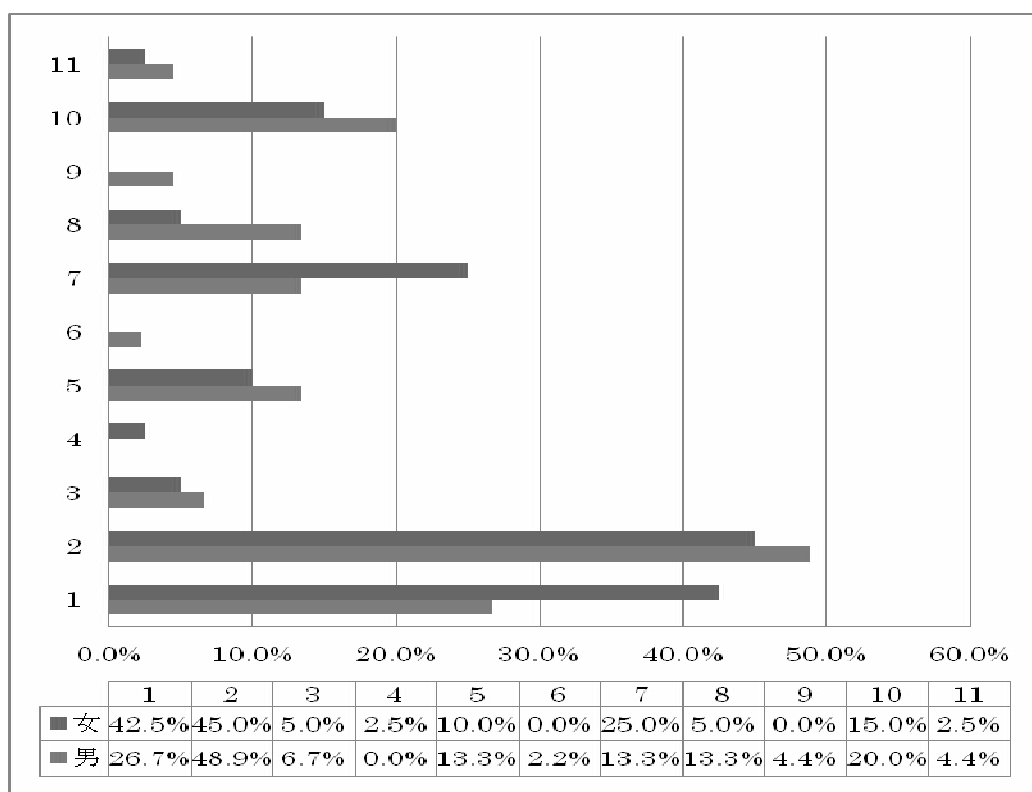
■福祉は暮らしやすい社会を築くこと

多くは暮らしやすい社会を築くことだと感じている人が多く、人の手助け

をすることだと思っている人は女性に多い。

問13 あなたは、福祉サービスに関する情報をどこから入手していますか。

- 1 社会福祉協議会の広報誌 2 県・市町村の広報誌
3 役場窓口 4 民生児童委員 5 友人・知人 6 加入団体
7 テレビ・ラジオ 8 新聞 9 雑誌・専門書 10 インターネ
ット 11 その他



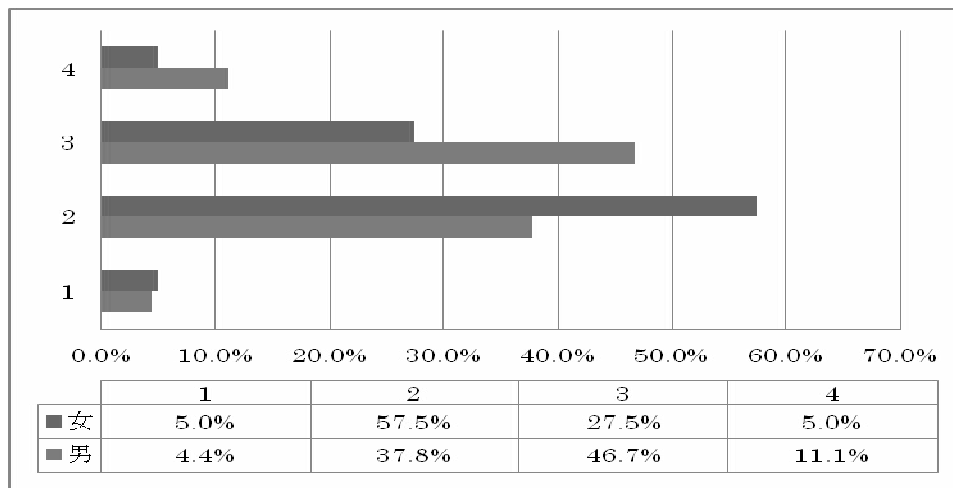
■情報は社協や行政から

福祉の情報の入手に当たっては社協や行政から得ている。

行政からの情報提供は伝わっていると感じられる。

問14 あなたは、ボランティア活動に関心がありますか。

- 1 非常に関心がある 2 まあ関心がある 3 あまり関心がない
4 まったく関心がない

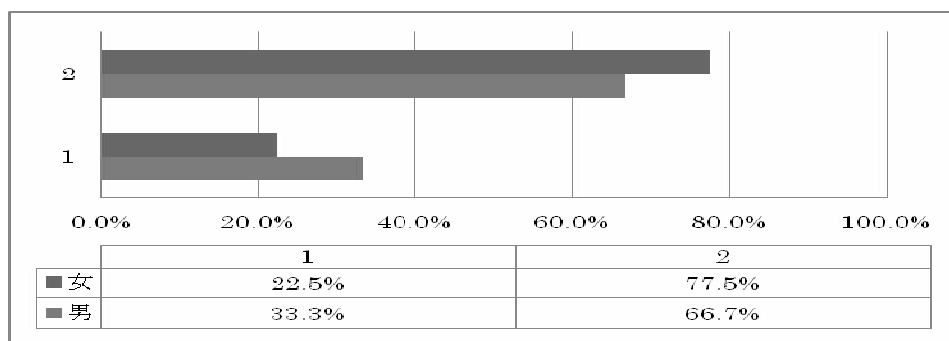


■ボランティアについては、女性の方が関心がある。

ボランティアへの関心は男性は50%、女性は60%が関心を持っている。

問15 現在、ボランティア活動に参加していますか。

- 1 ある 2 ない



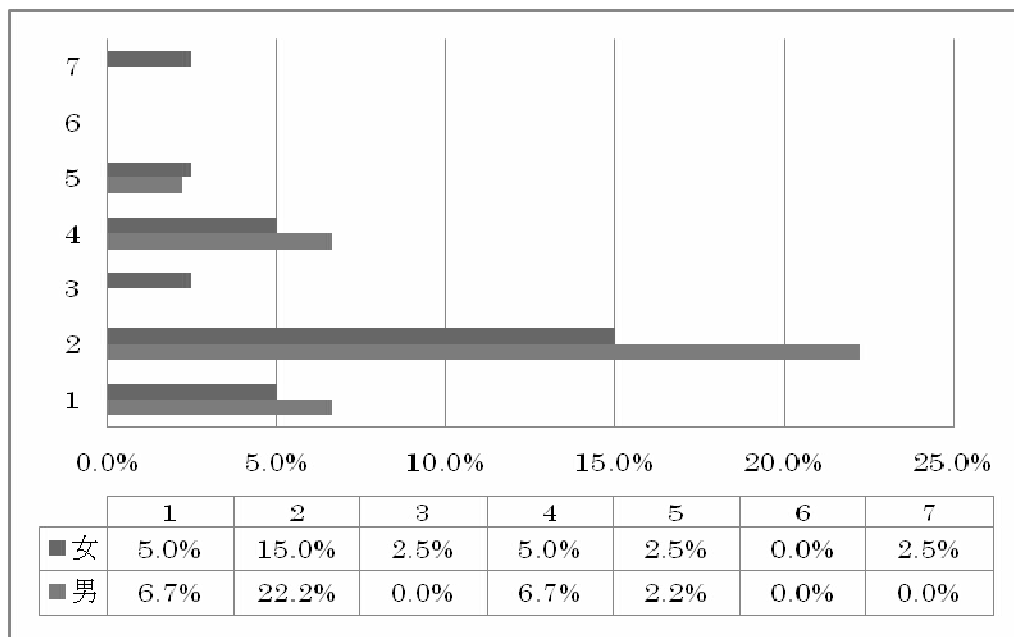
■ボランティア活動への参加は若者世代では男性が多い

若者世代のボランティアへの関心は女性の方が高いが、参加となると男性の方が高い。若い世代の女性は子育て等があり関心はあるが参加できないことがあるのか。

問15で「ある」とお答えの方にお尋ねします。

問16 ボランティア活動に参加したきっかけは何ですか。

- 1 自発的な意思で 2 各種団体などで参加する機会を与えられて
3 新聞・雑誌などの広告をみて 4 家族や親戚・友人や知人に勧められて
5 ボランティアに関する研修会・講習会などに参加して
6 その他 7 なんとなく



■きっかけは機会を与えられて

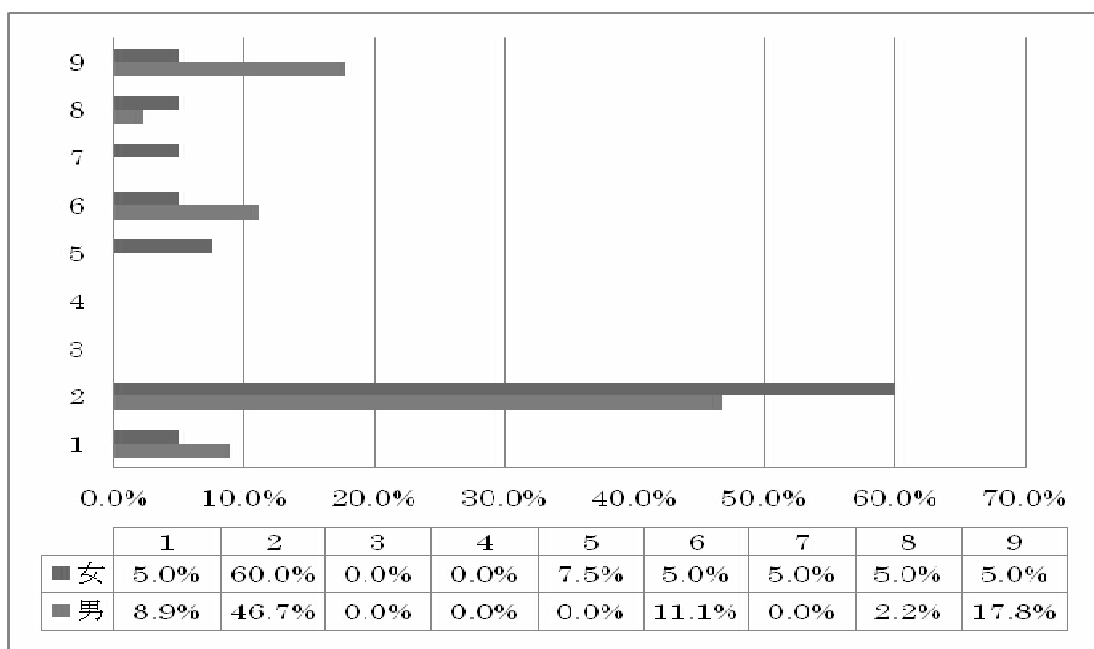
各種団体などで参加する機会を与えられて、ボランティア活動への参加するようになる。

また、自発的に参加した人・家族や友人などに勧められて参加するという方もおり意欲はありそうである。

問15で「ない」とお答えの方にお尋ねします。

問17 ボランティア活動に参加しなかった理由は何ですか。

- 1 関心がないから 2 自分の生活、仕事が忙しいから
3 関係団体や行政機関に任せておけばいいから 4 人と関わるのが面倒だから 5 仲間がないから 6 身近なところに活動の場がないから
7 健康に自身がないから 8 その他 9 なんとなく



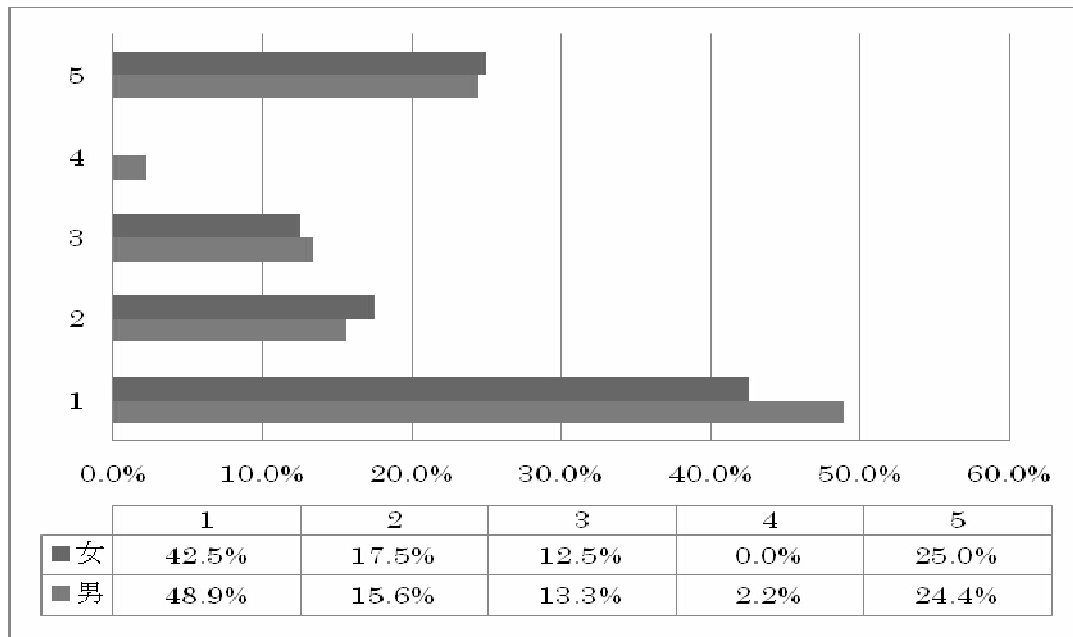
■日々の生活が忙しい

日々の生活が忙しくボランティア活動をしたくてもできないという方が多い。

若者世代では、仕事や子育てなど生活が基本となることで忙しく時間的に余裕がないようだ。

問 18 皆さんがボランティア活動に参加しやすくするために、何を望みますか。

- 1 社会奉仕活動に関する情報提供 2 経費（活動費）の支援
3 ボランティアの養成・体験講座 4 その他 5 わからない



■ボランティア活動には情報が必要

社会奉仕活動に関する情報の提供を求めている方が多く、活動には情報を提供してほしいと感じている。

まずはできることから、ボランティアに参加していただけるような情報の提供することが今後の課題。

村民意識調査のまとめ

20代～30代の村民調査結果から、村で生活をしていくなかで、若者も隣近所の付き合いや助け合いなどに対する関心はある程度持っていることがわかる。

地域とのかかわりが希薄化している状況に対して、これ以上進ませてはいけないと感じている。

また、若者は、隣近所よりも昔からの友人に支援を求めており、支えとなっている。

しかし、高齢者などへの支援については「できる」と回答しており、雪かきや話し相手・ゴミ出しなどできるという回答が多い。

また、ボランティア活動について関心を持っていると回答した人が多く、今後、この点での支援が有効であると考えられる。

近年災害などが多発していることや、村ぐるみ防災訓練、また地区の活動（消防団）等を通じて、若者であっても地域の助け合いの必要性を感じている人が増えているのではないかと考えられる。

2 農村環境を活かした「いきいきライフ」の実現

1 「いきいきライフ」実現のための活動プログラム

木島平村に住む誰もが、地域のつながりや隣近所でのお互いさまの心を育みつつ、いきいきといつまでも仲良く健康で暮らせるために、多様に展開される活動のプログラムを提案する。

この活動プログラムは、地域や対象者、資源によって多様な活動となるため、地域ごとの形成を図りつつ実践していくこととする。

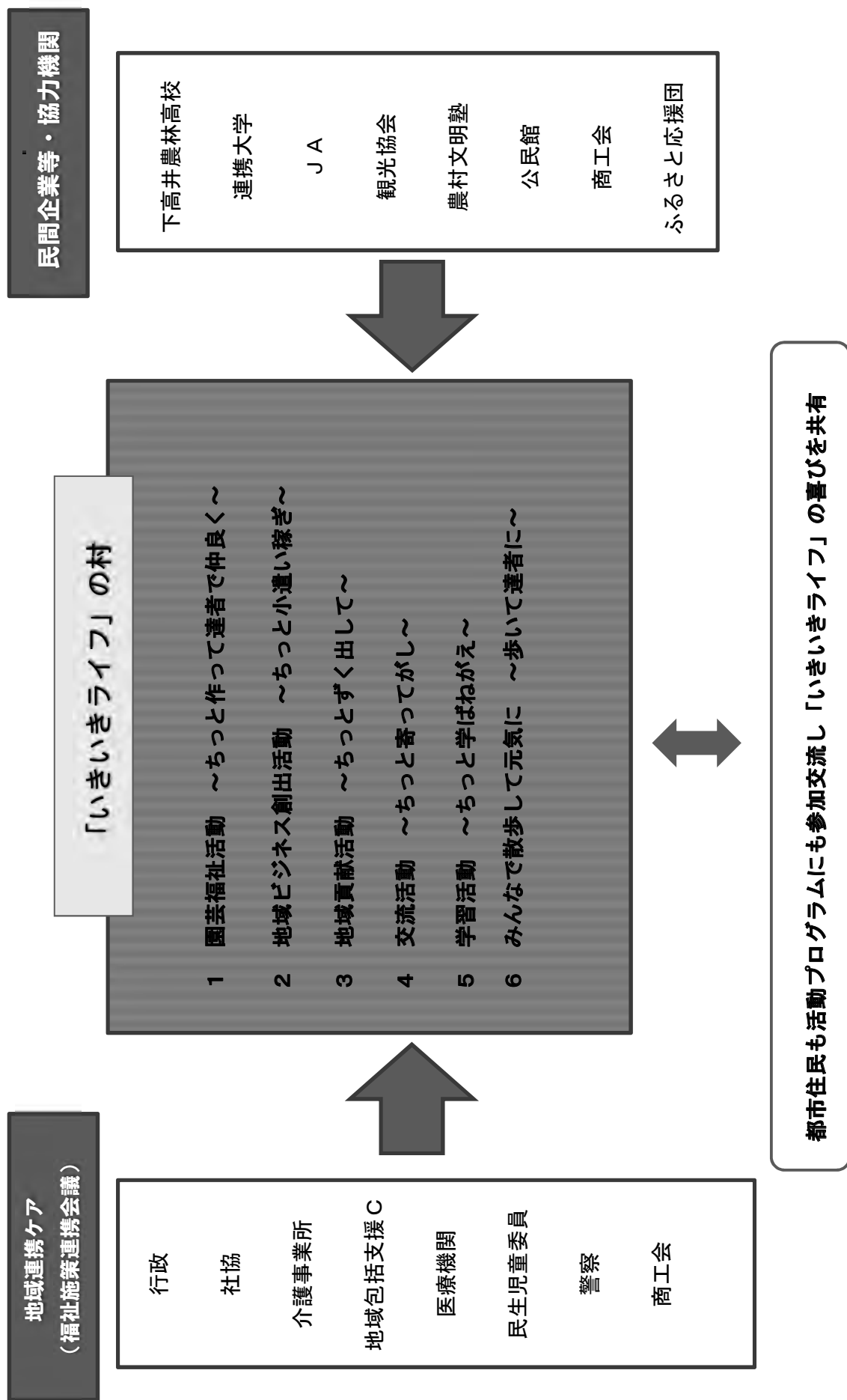
・活動プログラム

内 容	活動の基本的な考え方・事例
1 園芸福祉活動 ～ちっと作って達者で 仲良く～	・自分の畑や隣近所で楽しく元気に体を動かす ・農林高校生と一緒に畑作りや花壇作りで交流 ・地域の人たちと一緒に野菜や花など畑づくり
2 地域ビジネス創出活動 ～ちっと小遣い稼ぎ～	・野菜をみんなで持ち寄り、直売所などで販売 ・干し柿や切干大根、凍み大根などを作って販売 ・できることを持ち寄りつなげるビジネス ・いつまでも働ける喜びを
3 地域貢献活動 ～ちっとずく出して～	・作った野菜や花を施設や学校で使ってもらおう ・近所のゴミだしや買い物をついでに ・ちょっとついでに隣の雪かきを ・いつまでも必要とされる喜びを
4 交流活動 ～ちっと寄ってがし～	・隣近所で寄って気軽におしゃべりをしながらお茶のみをしよう ・老いも若きも子どもも気軽に寄って遊ぼう ・みんなで集まってみんなで見守り
5 学習活動 ～ちっと学ばねがえ～	・園芸を学ぼう ・高校生に教える、教わる（教え・教わる交流） ・地域の人から教わる（達人、職人） ・趣味の活動（そば打ち教室、陶芸教室、絵画）

	・芸術文化に触れて元気に ・学びから生きがいのきっかけを
6 もうちっと達者に ～歩いて達者になろう～	・気軽に散歩できる環境の充実 (休憩所、ベンチ、東屋、トイレなどの整備) ・花や緑をみて季節を感じよう

* 上記は活動プログラム例で、地域や対象者によって多様な活動を組み合わせて、地域にあった活動としていく。

2 活動プログラム構想の基本的な運営組織のイメージ ～地域みんなが関わり運営を行う～



3 活動プログラムの展開

■展開のはじめとして

(1) 拠点づくり

平成26年4月に開設する地域密着型特養「里山の家木島平」は小学校舎を活用して、地域の雇用と質の高い介護を提供する施設として整備される。

近接する下高井農林高校では、農山村の地域資源を最大限に活用したカリキュラムで、平成26年度から新たに園芸福祉コースをはじめとした8コース（※表1）を置き、より多様な地域ニーズに対応できる人材育成を行う。

下高井農林高校では、これまでも農山村の資源を活用し、地域で活躍する人材育成が行われてきた。しかし、この少子時代にあって、地域で学び、地域で活躍できる若者を育成できるかが重要な課題となっている。

地域で学び育った若者が、地域に関わりをもちながら暮らして行くことによって、地域活性化の一つにもなると考える。

・（※表1）下高井農林高校で平成26年度から新たに始まる学習課程

専門科目	コース名 (選択科目)	主な活動内容
グリーンデザイン科 森林や草花など地域の環境を基本にし、園芸を利用した新しい福祉、木材を活用したものづくりなど、地域に貢献できる人材づくり。	森林活用	木材加工や利用、森林保全など森林環境整備関すること。
	地域資源活用	自然資源や地域資源の有効活用。特産物の開発・普及など。
	草花活用	栽培、管理技術習得。花壇や癒し空間づくりなど。
	園芸福祉	花や野菜の栽培、管理を通じた交流。福祉にもたらす効果などを学ぶ。
アグリサービス科 農産物の生産、飼育、加工、開発流通など、安全・安心な食糧を供給するための技術と知識で、地域活性化のための人材づくり。	植物科学	栽培技術、特産物研究、バイオテクノロジーなどで地域農業に貢献。
	動物科学	農物の飼育管理技術の習得。畜産加工、研究。スクールズーとして開放。
	食品化学	食品原材料の生産・栽培、食品製造、農林ブランドの加工品開発、技術習得。
	食文化	調理・栄養・衛生。地産地消の伝統食文化の学習。特産物の利用開発・普及。

新たに設置される「園芸福祉コース」では、園芸福祉士の資格取得をはじめとし、地域住民の交流や施設での介護研修、木島平村社会福祉協議会が行うデイサービスと園芸交流を通じ、将来の福祉人材の育成も視野に入れる。地域と高校、施設が地域内で連携し、お互いにできることを提供することで、活性化の仕組みづくりを行っていく。

(2) 場所と機会づくり

「里山の家木島平」「下高井農林高校」「地域住民」が連携して交流を行う。施設と高校を場として、講座や介護研修などを実施しながら、交流を行っていく。

◇具体的な活動の場と機会

ア 地域密着型特養「里山の家木島平」

地域の小学校を改築してつくられた地域密着型特別養護老人ホームでは、地域に開かれた親しみのある施設として、地域住民が集まる場所づくりを目指す。

- ① 高齢者から子どもまで多世代にわたり集まるサロンづくり
- ② 介護人材育成事業 介護人材を育成する施設として、高校生をはじめとした研修の受入れを積極的に行う。
- ③ 3階に整備した宿泊施設付き研修施設では、地域向けの講座はもとより、村外からも参加できる「干し柿づくり」など、地元の人が教える体験講座などの開催も検討する。

イ 下高井農林高校（高校生）

地域住民の地域ビジネスや生きがい創出のため、比較的簡易一時的な作業の「干し柿」や「切干大根」「凍み大根」づくりなど、農閑期にできる場と機会を確保する。

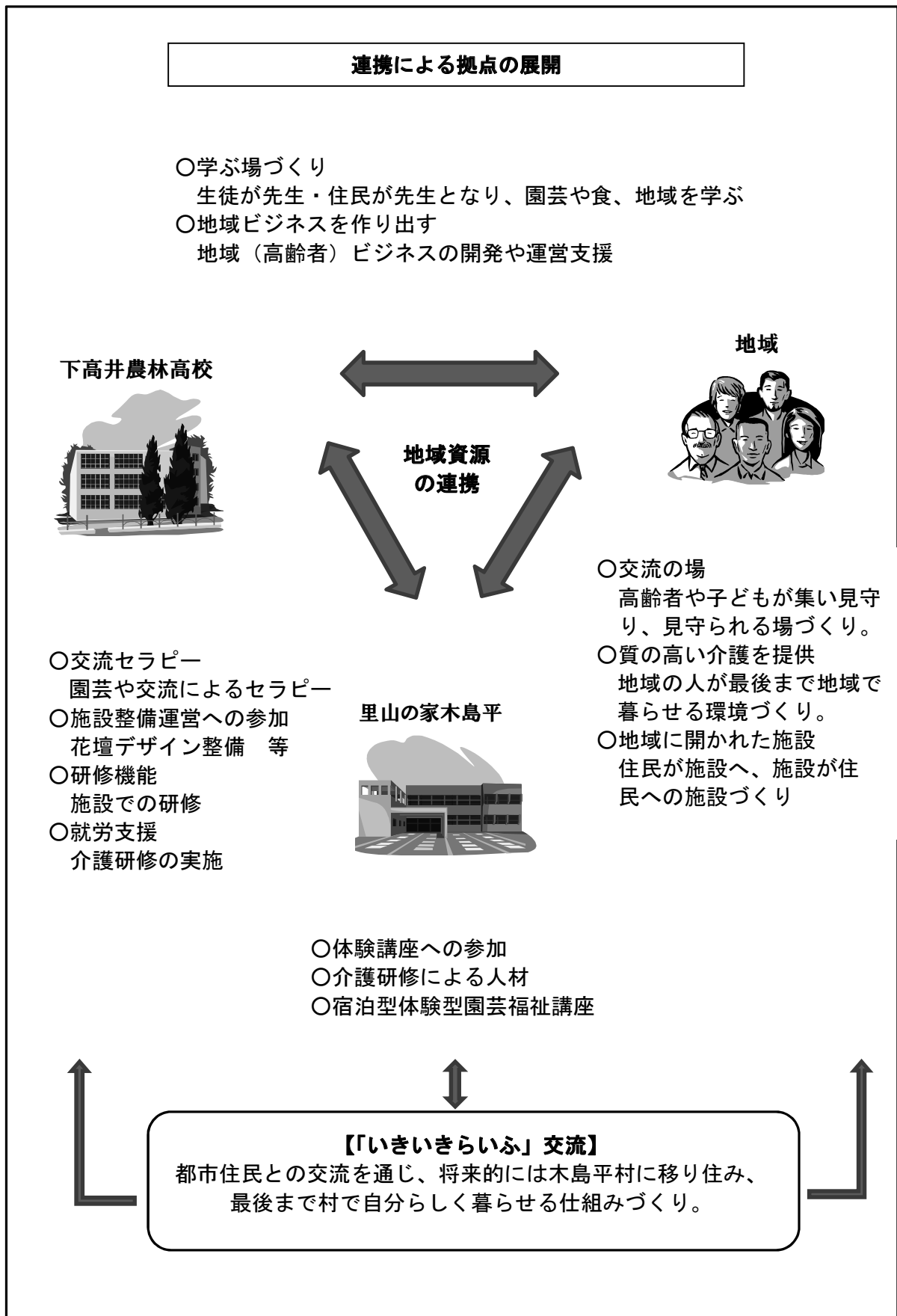
- ① 作物の生産過程において、住民ができない柿もぎや大根運搬など、生産加工工程の一端を担い、地域住民のビジネスモデルや高齢者

の生きがいりと合わせて介護予防していくことも考えられる。地域
(高齢者) サロン等での加工作業支援

- ② 村社協デイサービスや里山の家木島平での利用者、入所者で行う園
芸セラピー

■展開の広がり

地域ごとに、住民との対話を進め、何が必要か、何ができるか、何がしたいかを地区ごとの地図におとして見えるようにしていき、地区住民と具体的な展開方法を検討していく。



事業展開スケジュールについて

	H 2 6	H 2 7	H 2 8
・ 連携組織会議の運営 ・ 企画・実施に向けた検討	・ 連携会議構成の検討	連携会議 ・ 活動プログラムの具体的な検討 実施内容の検討と地域の選定 ・ 運営（展開）方法の検討 ・ 地区住民との検討、実践	
・ 事業展開	・ 下高井農林高校と里山の家木島平、デイサービスとの交流連携 里山の家の花壇整備（花壇デザインから植栽まで） ・ 園芸福祉講座の開催		
		活動プログラムの展開	

第3章 まとめと検討事項・課題

1 まとめ

木島平村の高齢者は、住んでいる場所や人とのつながりで農作業も苦勞と感じず、作物づくりを生きがいとして暮らしを立てている。また、野菜やコメを作ることに喜びを感じ、農作物を子や孫、隣近所にも分け与えることで張り合いを感じ、楽しみを見出し、生きがいを感じている高齢者も少なくない。

「畑があるので何かを作らなければいけない」「家周りの草取りをし、花などできれいにしなければならない」といったような気持ちが、結果的に体を動かし、外出行動として持続し、結果として、健康でいられるということにつながっている。

今後は、より一層この「農」や「園芸」に携われる機会と場を、地域に合った多様な形で作り出していくことが必要である。

また、お茶のみとおしゃべりが気軽にできる仲間づくりの場としては、高齢者だけでなく、子どもも含めた地域住民が気軽に集まれる場が求められていることが改めてわかった。

みんなが集まる場所ができることによって、地域のつながり、隣近所の関わりが持てるようになり、日常生活での不安感や不足感も緩和でき、地域の生活支援の場や担い手の育成につなげていくことが望まれる。

2 検討事項・課題

木島平村の農村環境を活かした「いきいきライフ」の実現～いつまでも自分らしく仲良く暮らせる村」の実現のため住民が連携していくためには、次のような課題があげられる。

■地域活動プログラムの実施

活動プログラムの実施に当たっては、各地域の資源や対象者の実状により、できること、行いたいことについて合意形成を図りながら、地域に合ったプログラムを形成していくことが必要となる。

また、地域での合意形成には、まず、既存の団体や集まり、福祉懇談会などの活動を手掛かりにして地域の状況把握を行い、活動への参加しやすさ・参加したくなるような活動プログラムを進めていくことが必要である。

■介護施設の発展的活用

整備した地域密着型特養は、木島平村に雇用場を創出することと、施設に入っても質の高い介護を受けられ、住み慣れた地域でいつまでも暮らせる環境づくりを目的としている。事業者側から見ると小規模の施設であり、運営面からも工夫が必要であることが予想される。木島平村のような農村において、このような施設を村の重要な施設として最大限に活用するためには、次の事項が検討課題になろう。

- ・ 雇用場として充実させるためには、採算性が合う規模にする必要がある。しかし、規模を大きくすれば、村民以外の、都市からの入居も想定しなければならない。
- ・ 木島平村近隣の地域出身者など、「ふるさとで最後を」と希望する人も含め、都市部からの入所も想定するならば、「あそこに入りたい」、「あそこなら安心して暮らせそうだ」という、質の高いサービスを提供しなければならない。都市部から農村の施設に収容させるようなことではなく、施設に入所していただいたなら、介護者の流れに合わせるのではなく、介護者は介護をさせていただき気持ちで、入所者一人ひとりの思いに耳を傾け、思いを聞き出すことにより、本人思いに添った、温もりのある家庭環境が保たれるような介護、そして木島平村の豊かな自然に触れ合うことができ、毎日の生活がゆったりとした面持ちで、いつまでも持続できるあたたかな介護を目指すことが重要である。高い理念と高い技術を持った人材を育成していくための方策の一つとして下高井農林高校を中心とした人材育成システムの確立が必要である。

資料編

研究会で各委員から出された主な意見の要約

◇農村環境について

- ・農山村の社会資本である農地の活用をすると同時に、自然だけでなく環境、も全部歴史も、そこにいる住民も高校も資源である。
- ・これまで資源やお金や人が動くことによって、事実的な営みが可能であった。それが崩れていているのにも関わらずどうやって取り戻せるか農村文明は一生懸命言っている。それを戻してはけない。少なくとも日本の地域社会が持っていた元々の力をきちんと素直に見直した上で取り戻そうとしなければいけない。
- ・農村であっても、趣味や生きがいを果たす役割は大きい。
- ・園芸福祉に取り組むことにより社会貢献や地域貢献ができ、楽しく自然と付き合うことができる。
- ・地域の資源がなくても、地域の見直しにより自然と介護予防や健康づくりのメニューができるのではないか。
- ・農村は、地域から若者が出て行ってしまう。

地域で仕事がないから若者が出て行ってしまうわけであり、ちょっとした需要を財に換算すればある種の狭い小さなビジネスチャンスはある。

需要を財にするということは、ビジネスにして、ある種の地場産業を生むこともできるのではないか。

地域に共有して頑張れる、地域のリーダーになりながらビジネスについてサポートする。

これからの農村社会の生き方、農村での経営をマネジメントすることもあるのではないか。

◇木島平村の介護、福祉について

- ・木島平村の高齢者は、できるだけ在宅で暮らしたいと願っている。
ただ嫁や家族に迷惑をかけないようにやむを得ず施設に行きたいという農村的価値観が出ている。
- ・村の自慢できるものがあるのだから、木島平村の地域社会と深く関わりながら「この村で暮らせばしあわせ、死ぬまで自分らしく生きられる」それにより結果的に介護度が高くなるまで自宅で暮らすことができるのではないか。
- ・今後のサービスには、軽度者をいかに保つ施策を重点に考えることが大切である。
- ・地域支え合いづくりを基本として、介護予防を地域で支えるための方法を検討することが必要。
- ・ベッドの上で介護することは最終段階。ここへ行くまでの環境を整えることがこれからの課題ではないか。
- ・介護になったら施設に入所ではなく、元気なうちは高齢者としての役割をもたせ、「高齢者の力がないと困る」というように期待されるように力を出せるようにすることで、高齢者が地域社会でも活躍しているのだという意識を持った活動させることができるのではないか。

◇人々の姿

- ・高齢者のほとんどは地元の人であり地縁がしっかりしている。農村文明塾思想を進めることは重要。
- ・社会貢献や地域貢献で楽しく自然と付き合うこと。
- ・農村では「草取りだけでも」といった社会貢献的な意識が強く、それが元気でいられる要因になっている。

- ・ 目指している地域づくりが具体的に行われるのだという事。農村文明塾は高い見識でやるのは入口で大切。ただそこに村民が参加してこないと意味がない。教えてもらうという受け身になるだけ。自分たちで何を作りたいか考えていれば、疲れない・健康・元気、そしてしっかりしていられる。
- ・ 対象である高齢者が動き、彼らの感性も磨かれ、そして集団ができることから地域社会も元気になり、いい循環で介護もまわっていくことを目指そうとしている。
- ・ 男女の視野が違う前提で物事を考え、別けるのではなく別だからこそ一緒にし、役割分担を作るとシェアもできる。男女が両方いないとできないようなプログラムを行政が作る。干し柿づくりもどこをどう分担させ、年齢差や男女差の多彩な才能をどう組み合わせ、開花させるかが楽しみだと思う。
- ・ 活動についてのコーディネートをする。干し柿作りなど、物を運んだりすること、それこそ高校生の出番はある。干し柿を運んできて作業の準備をするまでを高校生が分担する。また結果を持って行ってやる。そういう世代間の協力が重要。今までの農村は昔から一律だったが、今は非常に多様化している。この状況を踏まえ、どのくらいのマンパワーがどういうプロセスにおいて必要なのかおさえ、反対の側の働きたい人と休みたい人、外へ出て住んでいる人、農業をやる人と兼業でやる人、その他多様な状況で、いろいろな組み合わせで行うことで新たなことが見付き楽しみなことがでてくるのではないかと思う。

平成 25 年 11 月

各 位

長野県木島平村長 芳川 修二

平成 25 年度厚生労働省老人保健健康増進等事業

「アンケート調査」ご協力をお願い

時下、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

全国各地の農山村では、少子高齢化による介護力の低下など在宅介護に関わる環境は決して恵まれているとはいえません。

長野県木島平村では、村にある環境や資源が、健康づくりや介護予防のために重要な要素であることを再認識し、かつての日本の農山村に存在していた地域コミュニティや集落機能、助け合い機能の活用事例の調査をしています。

農山村で暮らす人々が、地域でいつまでも仲良く元気で暮らせるために、農山村の環境の実態把握と調査研究を行うこととなりました。

つきましては、その参考とさせていただきたく、別添のアンケート調査にご協力いただきますようお願い申し上げます。

このアンケート調査は、全国 184「村」の皆様を送らせていただいています。

ご多忙とは、存じますが、何卒趣旨をご理解の上、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

調査ご協力をお願いについて

1 返信方法及び期日

お手数ですが、同封の返信用封筒に調査票を入れて、**平成 25 年 12 月 5 日（木）**までに、ご投函いただきますようお願いします。

2 調査票について

- ・データでご回答の場合は、メールで件名欄に「調査票希望」と入力の上、下記 E-mail アドレスでご送信ください。追って、書式（Excel 様式）を返送します。

2 情報の取り扱いについて

ご回答いただいた内容については、本調査研究事業で使用し、事例として集計し、報告書等で公表させていただくことがあります。また、調査後、事例についてお聞きする場合がありますことをご了承願います。

3 本調査事業に関するお問合せ先

木島平村役場 民生課健康福祉室 担当：丸山（まるやま）、湯本（ゆもと）

〒389-2392 長野県下高井郡木島平村大字往郷 973-1

電話 0269-82-3111 FAX 0269-82-4121

E-mail kenfuku@kijimadaira.jp

平成25年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
農山村の環境を活かした介護福祉のあり方調査研究事業実態調査

村名	
担当部署	
ご担当者名(記入者氏名)	
電話番号	
FAX番号	
E-mail	

以下の設問についてご記入をお願いします。

◆貴村の状況について教えてください。

問1 村の人口及び高齢化率について教えてください(H25年4月1日時点での国調推計値)

(1)人口	人
(2)高齢化率	%
(3)(2)のうち75歳以上比率	%

問2 世帯について教えてください。

- (1)世帯数
- (2)高齢者のみの世帯数
- (3)高齢者世帯数のうち独居世帯数

	戸
	戸
	戸

問3 財政状況について教えてください(平成25年度数値)

- (1)財政力指数について
- (2)実質公債費率
- (3)将来負担比率

	%
	%

問4 規模別の集落(地区、区等)数について教えてください。

集落の規模	集落数
1戸～10戸	
11戸～30戸	
31戸～50戸	
51戸～100戸	
101戸以上	

- ◆ 介護予防事業、地域コミュニティづくりの事例についてお聞きします
- 問6 現在行っている介護予防事業について、内容・参加者数・参加対象・予算規模等を教えてください。
- (1)一次予防事業

--

(2)二次予防事業

--

問7 貴村で行われている介護保険以外の生活支援サービスについてお聞きします。

- (1)生活支援の実施・運営主体について、【表】から該当する番号をご記入ください。
- 運営主体が複数ある場合は、該当番号を全てご記入ください。その他住民が自主的に行われていると思われるものも合わせて記入ください。

支援の内容	該当番号	支援の内容	該当番号
配食		送迎(運転)	
掃除		買い物	
洗濯		話相手(傾聴)	
食事づくり		ゴミ出し	
入浴見守り		受診付き添い	
雪かき(除雪)		草刈り	
集会(サロン等)			
その他の支援 がありましたら ご記入くださ い。			

【表】

- ①村(行政)
- ②社会福祉協議会
- ③NPO法人
- ④自治会
- ⑤ボランティア組織(団体)
- ⑥隣近所
- ⑦その他法人・組織
- ⑧その他

(2)問7ー(1)で行われている支援で、課題や問題となっていることについてご記入ください。
(例 支援ボランティアの高齢化。担い手が不足 等。)

--

問9 地域コミュニティの資源についてお聞きます。
日常生活のなかで、介護予防や閉じこもり予防につながる住民のコミュニケーションが図れる
(自然にとれるような)環境や習慣がありますか。
例) 村内に5つの共同浴場があり、住民が自由に入浴でき、共同で管理を行っている。
マレットゴルフが盛んで、村民の無料コースがあり早朝から多くの人が利用している。
その他の資源として、共同洗い場、朝市、特産物の生産加工や販売、山菜取りに行く など
思いつくもので結構です。できるだけご記入ください。

コミュニティ資源の内容、管理・運営主体

問10 貴村の高齢者や地域住民・組織などが自主的に活動しているものがありますか。
問9で記入したものを除く。

--

ご協力ありがとうございました。
同封の返信用封筒でご返送お願いします。

いま、なぜ園芸福祉が必要か

農園芸に携わることにより、心身の健康や癒しに効果があることは古い時代から考えられてきました。なかでも江戸時代は暮らしや経済はすべて植物に支えられていたといえ、植物の持つさまざまな力が国民生活を成り立たせる園芸福祉社会と言って過言ではない時代であったといえます。

その後の工業発展により、人々の生活は便利になり経済的な豊かさを手に入れましたが、自然破壊や環境汚染を招き、大都市への人口集中は農山村の過疎化や都市でのコミュニティの空疎化という憂慮すべき現象を招いています。

そして21世紀、今や時代は、モノの消費を中心とした社会から自然や環境と共生をめざす循環型社会の実現に向け進んでいます。今こそ植物と接することや園芸・農作業によってもたらされる幅広い効果を見直し、社会のさまざまな分野で活用すべき時を迎えているのです。

園芸福祉は、花や野菜、果物、その他緑の栽培や育成、配植、交換、管理、運営、交流などを通じて、みんなで幸福になろうという思想であり、技術であり、運動であり、実践といえます。

「健康的な地域づくりと健康増進を視点とした地域活性化方策実証調査」結果では、農・園芸活動と保健・健康増進の関係を医学的見地から検証でき、数値的実証効果が得られている。

仲間を作り、植物と触れ合う活動を通して楽しい時間を過ごすという園芸福祉のテーマのもと、様々な活動に取り組んでもらった結果、37%の参加者に血圧の低下効果、そして57%に心身への改善効果がみられるという数値的実証を得ている報告がされている。

また、今後社会的な理解と認知を得るために期待される方策として、2点について述べられている。

(1) 健康管理と生活習慣病に対する予防効果を向上させるために、農園芸を通してもたらされる栄養・運動・休養・体験・コミュニケーション効果など統合的なプログラム提供する機会を増やすことも、有効需要の創出、交流人口の増大、都市農山村交流活動を促進する効果を生み出すと予想されている。

(2) 地域の社会資源を新しい視点から考えた地域活性化策を、健康・体験志向のグリーンツーリズムやエコツーリズムは、新たな地域資源の活用による滞在型健康管理プログラムとして事業化が可能と考えられ、農園芸・保健・医療・福祉の連携に加え、食育・教育といった統合的な視野に立った官民協働型プロジェクトの普及も検討すべきといえる。例えば、効果的な運営に至っていない農業公園や大規模年金保養施設などの運営見直し課題の解決策として、それらの社会資源を新しい視点から考え、健康増進効果を生む園芸福祉プログラムの開発と運用、園芸福祉士などの人材育成と登用などの展開も考えられる。

このような、官民型のプロジェクトでの滞在型健康管理プログラムの提供は、日常生活での国民一人ひとりの健康管理意識・健康増進の向上へ寄与するとともに、国民医療経済的にみても、生活習慣病予防によって国民医療費の低減の貢献することも可能と推測される。また生涯現役で日常生活を過ごすことは、高齢者医療費や介護保険の出費を抑えることにもつながると考えられている。

資料引用

「健康的な地域づくりと健康増進を視点とした地域活性化方策実証調査」報告書
～特定非営利活動法人 日本園芸福祉普及協会～

都市の高齢者の住宅政策調査

都市の高齢者が農村への移住の可能性や、都市の高齢者の住宅事情について、(株)みずほ企画主催の「高齢者の豊かな生活空間開発に向けての研究会」から事例を調査した。

日時 2013 年 8 月 6 日 研究会名「これからの高齢者住宅の方向性」

場所 日本教育会館

内容 都市部における高齢者住宅確保の方向性

都市部の高齢者住宅の方向性

(1) サービス付き高齢者向け住宅の整備

- ・介護事業者と不動産事業者が提携し、賃貸方式で住居サービスを提供。
- ・健康なうちから入居し、順次必要なサービスを提供していく。介護保険前は食事など 24 時間体制の生活サービスもあり、ホテル並みで、ある程度所得がある人向けのものである。

(2) 既存の団地を再開発し多機能を持つ団地化

- ・サービス付き高齢者住宅、介護事業施設、子育て支援施設を整備し「地域交流」「多世代交流」を進めている。
- ・1つのマンションに介護事業所、医療施設、住居を同居させた「地域包括ケア」を進めている。

(3) 低所得者向け住宅の対策

- ・低所得者向け住宅対策として「地域善隣事業（厚労省モデル事業）」で、ソーシャルワーカーや利用者の互助による高齢者を見守る「高齢者ハウス」の活用も進めている。

2 高齢者住宅の課題

都市部でも農村部でも同様の制度上の問題として、住所地特例の問題があり、住宅の整備市町村へ高齢者が集中し、保険者の負担増の問題がある。

地方部（農村部）での課題として「独居」「高齢者世帯」「息子と高齢世帯」の住まいのあり方が問題となっている。

3 農村での住まいの考え方と課題

農村では、持ち家に住み、最後まで同じ家と地域に住むことが通常で、家を離れ移り住む概念が薄いため、その家で最後まで暮らしたいと思っている。病気や介護などでどうしても在宅で過ごせなくなった時に、施設へ入るという流れになっている。しかし、在宅でできるだけ長く過ごすためには、健康な体はもとより、在宅でいられる環境づくりが必要である。

平成25年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）事業
「農村環境を活かした介護のあり方調査研究事業」報告書

木島平村 民生課

〒389-2392 長野県下高井郡木島平村大字往郷973-1

TEL : 0269-82-3111 FAX : 0269-82-4121

E-mail kenfuku@kijimadaira.jp